

# 家

(上)

島崎藤村

青空文庫



橋本の家の台所では昼飯ひるの仕度に忙しかった。平素ふだんですら男の奉公人だけでも、大番頭から小僧まで入れて、都合六人のものが口を預けている。そこへ東京からの客がある。家族を合せると、十三人の食う物は作らねばならぬ。三度々々この仕度をするのは、主婦のお種に取って、一仕事であつた。とはいへ、こういう生活に慣れて来たお種は、娘や下婢おんなを相手にして、まめまめしく働いた。

炉辺ろばたは広がった。その一部分は艶つやつや々々と光る戸棚とだなや、清潔な板

の間で、流ながしもと許もとで用意したものは直にそれを炉の方へ運ぶことが出来た。暗い屋根裏からは、煤すすけた竹筒の自在じざいかぎ鍵かぎが釣つるしてあつて、その下で夏でも火が燃えた。この大きな、古風な、どこかいかめ厳いしい屋造やづくりの内へ静かな光線を導くものは、高い明あかりまど窓まどで、その小障子の開いたところから青く透き徹とおるような空が見える。「カルサン」という労働はかまの袴はかまを着けた百姓が、裏の井戸から冷い水を汲くんで、流許ながしもとへ担かついで来た。お種はこの隠居にも食わせることを忘れてはいなかった。

お種は夫と一緒に都会の生活を送ったことも有り——娘のお仙が生れたのは丁度その東京時代であつたが、こうして地方にも最も早う長いこと暮くしているので、話す言葉が種いろいろ々に混まつて出て来る。

「お春や」とお種は下婢の名を呼んで尋ねてみた。「正太はどうしたろう」

「若旦那様かなし。あの山瀬へお出たぞなし」

こう十七ばかりに成るお春が答えたが、その娘らしい頬は何の意味もなく紅く成った。

「また御友達のところでは話し込んで見ると見える」とお種は考え深い眼付をして、やがて娘のお仙の方を見て、「山瀬へ行くと、いつでも長いから、昼飯には帰るまい——兄さんのお膳は別に置いて置けや」

お仙は母の言うなりに従順に動いた。最早処女の盛りを思わせる年頃で、背は母よりも高い位であるが、子供の時分に一度煩つ

たことがあつて、それから精神こころの發育が遅れた。自然と親そばの側を離れることの出来ないものに成つてゐる。お種は絶えず娘の保護を怠らないという風で、物を言付けるにも、なるべく静かな、解わかり易やすい調子で言つて、無邪気な頭腦あたまの内部なかを混雜させまいとした。お種は又、娘の友達にもと思つて、普通の下婢たびのようにはお春を取扱つていなかつた。髪もお仙の結う度たびに結わせ、夜はお仙と同じ部屋に寝かしてやつた。

あるじ主人や客をはじめ、奉公人の膳めいめいが各自の順でそこへ並べられた。心の好いお仙は自分より年とし少したの下婢きげんの機嫌そこをも損ねまいとする風である。

仕度の出来た頃、母はお春と一緒に働いている娘の有様を人形

のように眺めながら、

「お仙や、仕度が出来ましたからね、御客様にそう言っていらいらっしゃい」

と言われて、お仙はそれを告げに奥の部屋の方へ行つた。

東京からの客というのは、お種が一番末の弟にあたる三吉と、ある知<sup>しりびと</sup>人の子息<sup>むすこ</sup>とであつた。この子息の方は直樹と言って、中学へ通つている青年で、三吉のことを「兄さん、兄さん」と呼んでいる。都会で成長した直樹は、初めて旅らしい旅をして、初めて父母の故郷を見たと言っている。二人は橋本の家で一夏を送ろう

として来たのであった。

「御客様は炉辺がめずらしいそうですから、ここで一緒に頂きましょう」

とお種はそこへ来て膳に就いた夫の達雄に言った。三吉、直樹の二人もその傍に古風な膳を控えた。

「正太は？」

と達雄は、そこに自分の子息が見えないのを物足らなく思うという風で、お種に聞いてみる。

「山瀬へ行つたそうですから、復また御呼ばれでしょう」

こうお種は答えた。

はえ  
蠅は多かつた。やがてお春の給仕で、一同食事を始めた。御家



大事と勤め顔な大番頭の嘉助親子、年若な幸作、その他手代小僧なども、旦那や御新造ごしんぞうの背後うしろを通つて、各自めいめい定まつた席に着いた。奉公人の中には、二代、三代も前からこうして通つて来るのも有る。この人達は、普通に雇い雇われる者とは違つて、寧ろむし主従の關係に近かつた。

裏はたけの畠で働く百姓の隠居も、その時手てぬぐい拭で足を拭ふいて、板の間いのところにかシコマつた。

「さあ、やつとくれや」

と達雄は慰勞ねぎらうように言つた。隠居は幾度か御辞儀をして、

「頂戴ちようだい」と山盛の飯を押頂おしいて、それから皆など一緒に食

始めた。

「三吉」とお種は弟の方を見て、「田舎へ来て物を食べると、子供の時のことを思出すでしょう。直樹さんやお前さんに色々食べさせたい物が有るが、追々と御馳走しますよ。お前さんが子供の時には、ソラ、赤い芋茎の御漬物などが大好きで……今に吾家でも食べさせるぞや」

こんなことを言出したので、主人も客も楽しく笑いながら食つた。

お種がここへ嫁いて来た頃は、三吉も郷里の方に居て、まだ極く幼少かつた。その頃は両親とも生きていて、老祖母さんまでも壮健で、古い大きな生家の建築物が焼けずに形を存していた。次第に弟達は東京の方へ引移って行つた。こうして地方に残つて

居るものは、姉弟中でお種一人である。

「お春、お前は知るまいが」とお種は久し振で弟と一緒に成ったことを、下婢おんなにまで話さずにはいられなかつた。「彼あれが修業に出た時分は、旦那さんも私もやはり東京に居た頃で、丁度一年ばかり一緒に暮したが……あの頃は、お前、まだ彼が鼻洩はなを垂らしていたよ。どうだい、それがあんな男に成つて訪ねて来た——えらいもんじやないか」

お春は団扇うちわで蠅を追いながら、皆なの顔を見比べて、娘らしく笑つた。

旧むかしからの習慣として、あだかも茶席へでも行つたように、主人から奉公人まで自分々々の膳の上の仕末をした。食べ終つたもの

から順に茶碗ちやわんや箸はしを拭いて、布巾ふきんをその上に掩かぶせて、それから席を離れた。

この橋本の家は街道に近い町はずれの岡の上にあつた。昼飯ひるの後、中学生の直樹は谷の向側にある親戚を訪ねようとして、勾こうば配いの急な崖がけについて、折れ曲つた石段を降りて行つた。

三吉は姉のお種に連れられて、めずらしそうに家の内部なかを見て廻つた。

「三吉、ここへ来て見よや。これは私がお嫁に来る時に出来た部屋だ」

こう言ってお種が案内したは、奥座敷の横に建増した納戸なんどで、  
 箆たんす笥だの、鏡台だの、その他種々いろいろな道具が置並べてある。襖ふすまに  
 は、亡なくなつた橋本の老祖母さんの里方の縁続きにあたる歌人の  
 短たんざく冊などが張付けてある。

「私が橋本へ来るに就いて、髪を結う部屋が無くては都合が悪か  
 ろうと言つて、ここの老祖母さんが心配して造つて下さつた――  
 老祖母さんはナカナカ届いた人でしたからね」とお種は説き聞か  
 せた。

「へえ、その時分は姉さんも若かつたんでしようネ」と三吉が笑  
 つた。

「そりやそうサ、お前さん――」と言いかけて、お種も笑つて、

「考えて御覧な——私がお嫁に来たのは、今のお仙より若い時な  
んですもの」

薬研やげんで物を刻おろす音が壁に響いて来る。部屋の障子の開いたところから、斜はずに中の間の一部が見られる。そこには番頭や手代が集つて、先祖からこの家に伝わった製薬の仕事を励んでいる。時々盛んな笑声も起る……

「何かまた嘉助が笑わしていると見えるわい」

と言いながら、お種は弟を導いて、奥座敷の暗い入口から炉辺の方へ出た。大きな看板の置いてある店の横を通り過ぎると、坪庭に向いた二間ばかりの表座敷がその隣にある。

三吉は眺め廻して、「心こころもち地ちの好い部屋だ——どうしても田

舎の普請は違いますナア」

「ここをお前さん達に貸すわい」と姉が言った。「書籍ほんを読もうと、寝転ねころぼうと、どうなりと御勝手だ」

「姉さん、東京からこういふところへ来ると、夏のような気はしませんね」

「平素ふだんはこの部屋は空あいてる。お客でもするとか、馬市でも立つとか、何か特別の場合でなければ使用つかわない。お前さんと、直樹さんと、正太と、三人ここに寝かそう」

「ア——木曾川の音がよく聞える」

三吉は耳を澄まして聞いた。

間もなくお種は弟を連れて、店先の庭の方へ降りた。正太が余

暇に造つたという養鶏所だの、桑畠だのを見て、一廻りして裏口のところへ出ると、傾斜は幾層かの畠に成っている。そこから小山の上の方の耕された地所までも見上げることが出来る。

二人は石段を上つた。掩おほい冠おほさつたような葡萄ぶどう棚だなの下には、清水が溢あふれ流れている。その横にある高い土蔵の壁は日をうけて白く光っている。百合ゆりの花の香においもして来る。

姉は夏梨の棚の下に立つて、弟の方を顧みながら、「この節は毎朝早く起きて、こうして畠の上の方まで見て廻る。一頃とは大違いで、床に就くようなことは無くなつた——私も強くなつたぞや」

「姉さんは何処どこか悪わるかつたんですか」と三吉は不審いぶかしそうに。



「ええ、持病で寝たり起きたりしてサ……」

「持病とは？」

姉は返事に窮こまつて、急に思い付いたように歩き出した。「まあ、病氣の話などは止そう。それよりか私が丹精した畠でもお前さんに見て貰おう。御蔭で今年は野菜も好く出来ましたよ」

野菜畠を見せたいというお種の後に随ついて、弟も一緒に傾斜を上った。坂の途中を横に折れると、百合、豆などの種類が好く整理して植付けてある。青い暗い南かぼちゃ瓜棚の下を通つて、二人は百姓の隠居の働いているところへ出た。

石垣いしがきに近く、花園を歩むような楽しい小径こみちもあつた。そこから谷底の町の一部を下瞰みおろすることが出来る。

お種は眺め入りながら、

「私も、橋本へ来てからこの歳に成るまで、町へ出たことが無いと言つても可い位……真実ほんとうに家うちの内なかにばかり引込みきりなんですよ……用が有る時はどうするなんて、三吉なぞは不思議に思ふかも知れないが、買物には小僧も居れば、下婢おんなも居る。嘉助始め皆なで外の用を好く達たしてくれる。ですから、私は家を出ないものとしていますよ……女というものは、お前さん、こうしたものですからね」

こんな話を弟にして聞かせて、それから直樹が訪ねて行つた親

戚の家々を指して見せた。いずれも風雪を凌ぐしの為に石を載せた板屋根で、深い木曾山中の空気に好く調和して見える。

「母親おつかさん、沢田さんがお出たいで」

とそこへお仙が客のあることを知らせに来た。三人は一緒に母屋やの方へ降りて行つた。

物置蔵の側わきを帰りかけた頃、お種は娘と並んで歩きながら、

「お仙や、お前は三吉叔父さん、三吉叔父さんと、毎日言い暮していたツけが——どうだね、三吉叔父さんが被入いらしつて嬉しいかね」

と母に言われて、お仙はどう思うことを言い表して可いか解らないという風であつた。この無邪気な娘は、唯、「ええ、ええ」

と力を入れて言っていた。

庭伝いに奥座敷へ上つてから、お種は沢田という老人を三吉に紹介した。この老人は、直樹の叔父にあたる非常な神経家で、潔癖が嵩じて一種の痼疾こしつのように成っていたが、平素癩ふだんかんの起らない時は口の利ききようなども至極丁寧にする人である。

老人は三吉に向つて、よく直樹を東京から連れて来てくれたと言つて、先まずその礼を述べた。

「三吉」と姉は引取つて、「この沢田さんは、やはりお前さんの父親おとつさんのように、国学や神道の御話が好きで……父親さんが生きてる時分には、よく沢田さんの御宅へ伺つては、歌などを咏よんだものだぞや」

こうお種が言出したので、老人も思出したように、

「ええ……左様さようだ……貴方がたの父親さんは、こう大きな懐ふところをして、一ぱい書籍ほんを振ねじこ込んで歩あかせる人で……」

思わず三吉は、この姉の家で、父の旧友の一人に逢あった。背の低い、瘡やせぎすな、武士らしい威厳を帯びた、憂鬱と老年とで震えているような人を見た。三吉も狂死した父のことを考える年頃である。

主人の達雄は高い心の調子でいる時であった。中のある古い柱の下が日々の業務を執るところで、番頭や手代と机を並べて、

朝は八時頃から日の暮れるまで倦むことを知らずに働いた。沈香、麝香、人參、熊の胆、金箔などの仕入、遠国から来る薬の注文、小包の発送、その他達雄が監督すべきことは数々あった。包紙の印刷は何程用意してあるか、秋の行商の準備は何程出来たか、と達雄は気を配って、時には帳簿の整理のかたわら、自分でも包紙を折つたり、印紙を貼つたりして、店の奉公人を助け励ました。

そればかりでは無い。達雄は地方の紳士として、外部から持込んで来る相談にも預り、種々土地の為に尽さなければ成らない事も多かった。尤も、政党の争鬭などはなるべく避けている方で、祖先から伝わった業務の方に主に身を入れた。達雄の奮発と

勉強とは東京から来た三吉を驚かした位である。

三吉が着いて三日目にあたる頃、連つれの直樹は親戚の家へ遊びに行つた。その日は午後から達雄も仕事を休んで、奥座敷の方に居た。そこは家のものの居間にしてあるところで、襖ふすま一つ隔てて娘達の寐ねる部屋に続いている。「お仙や」とお種は茶戸棚の前に坐りながら呼んだ。お仙は次の新座敷に小机を控えて、余念もなく薬の包紙を折っていたが、その時面長な笑顔を出した。

「お前さんも御休みなさい。皆なで御茶を頂きましたよう」

とお種に言われて、お仙は母の側へ来て、近過ぎるほど顔を寄せた。母の許を得たということがこの娘に取つて何よりも嬉しかった。

三吉も入つて来た。

「貴方」とお種は夫の方を見て、「ちよつとまあ見てやつて下さい。三吉がそこへ来て坐つた様子は、どうしても父親さんですよ……手付てつきなどは兄弟中で彼があれ一番克よく似てますよ」  
「阿爺おやじもこんな不恰好ぶかつこうな手でしたかね」と三吉は笑いながら自分の手を眺める。

お種も笑つて、「父親さんが言うには、三吉は一番学問の好きな奴あいつで、彼奴あいつだけには俺おれの事業しごとを継つがせにやならん……何卒どうかして彼奴あいつだけは俺おれの子にしたいもんだなんて、よくそう言い言いたよ」

三吉は姉の顔を眺めた。「あの可畏こわい阿爺おやじが生きていて、私達



の為してることを見ようものなら、それこそ大変です。弓の折かなんかで打ぶたれるような目に逢あいます」

「しかし、お前さん達の仕事は何処どこへでも持つて行かれて都合が  
好よいね」とお種が笑った。

達雄は胡坐あぐらにした膝ひざを癬ゆずのように動ゆぶりながら、「近頃の若い人には、大分種々な物を書く人が出来ましたネ。文学——それも面白いが、定きまった収入が無いのは一番困りましたよ」

「言いわば、お前さん達のは、道楽商売」とお種も相あいづち槌づちを打つ。  
三吉は答えなかつた。

「正太もね、お前さん達の書いた物は好きで、よく読む」とお種は言葉ことばを續つけて、「やっぱり若い者は若い者同志で、何処か似た

ような処も有ろうから、なるべく彼にも読ませるあれようにしていますよ……ええええ、そりやあもう今の若い者が私達のような昔者の気では駄目です——そんなことを言つたつて、三吉、これでも若い者には負けない気だぞや——こうまあ私は思うから、なるべく正太の気分が開けて行くように……何かまたそういう物でも読ませたら、彼の為に成るだろうと思つて……」

「為に成るようなことは、先ずありません」

こう三吉が言つたので、お種は夫と顔を見合せて、  
苦にが笑わらいした。

「お仙、兄さんにも、御茶が入りましたからツて、そう言っ  
ていらッしやい」

こうお種は娘に言付けて、表座敷の方に居る正太を呼びにやっ  
た。

正太と三吉とは、年齢としが三つしか違わない。背は正太の方が隆たか  
い。そこへ来て三吉の傍に坐ると、叔父甥おいというよりか兄弟のよ  
うに見える。

正太が入つて来ると同時に、急に達雄は嚴格に成つた。そして、  
黙しまつて了つた。

正太もあまり口数を利かないで、何となく不満な、焦いらいら々らした、  
とはいえ若々しい眼付をしながら、周囲あたりを眺め廻した。

古い床の間の壁には、先祖の書いた物が幅広な軸に成って掛つている。それは竹翁ちくおうと言つて、橋本の薬を創はじめた先祖で、毎年の忌日には必ず好物の栗飯を供え祭るほど大切な人に思われている。その竹翁の精神が、何時いつまでも書いた筆に遺のこつて、こうして子孫に臨んでいるかのようにも見える。

この室内の空気は若い正太に何の興味をも起させなかつた。彼の眼には、すべてが窮屈で、陰気で、物憂ものういほど単調であつた。彼は親の側に静止じつとしていられないという風で、母が注ついで出した茶を飲んで、やがてまたぷいと部屋を出て行つて了つた。

達雄は嘆息して、

「三吉さん、お前さんの着いた日から私は聞いてみたい聞いてみ

たいと思つて、まだ言わずにいることが有るんですが……お前さんが持つているその時計ですわ……」

「これですか」と三吉は兵児帯へこおびの間から銀側時計を取出して、それを大きな卓つくえの上に置いた。

「極く古い時計でサ、裏にこんな彫のしてある——」

「実はその時計のことで……」と達雄は言淀よどんで、「正太を東京へ修業に出しました時に、私が特に注意して、金時計を一つくれてやったんです——まあ、そういう物でも持たしてやれば、普通の書生とも見られまいかと思ひまして——ネ。ところが一夏、彼あれが帰つて来た時に、他の時計をサゲてる。金時計はどうしたと私が聞きましたら、友達から是非貸してくれと言われて置いて来ま

した、そのかわり友達のを持って来ました、こう言うじゃありませんか。どうでしょう、その友達の時計が今度来たお前さんの帯の間に挟はさまつてる……」

三吉は笑出した。「一体これは宗そうさんの時計です。近頃私が宗さんから貰ったんです。多分正太さんも宗さんから借りて来たんでしよう」

達雄はお種と顔を見合せた。宗さんとは三吉が直ぐ上の兄にあたる宗蔵のことである。「どうも不思議だ、不思議だと思った」と達雄が言った。

「三吉の方が正直なと見えるテ」とお種も考深い眼付をする。

金側の時計が銀側の時計に変わったという事は、三吉にはさ程ほど

不思議でもなかった。「正直なと見えるテ」と言われる三吉にすら、それ位のことは若いものに有ありがち勝だと思われた。達雄はそうは思わなかった。

「どういう人に成つて行くかサ」とお種は更に吾子わがこのことを言出して、長い羅宇らうの煙管きせるで煙草たばこを吸付けた。「一体あれ彼は妙な気分の奴で、まだ私にも好く解らないが——為する事がどうも危あぶなくて危くて——」

「正太さんですか」と三吉も巻煙草を燻ふかしながら、「なにしろ、まだ若いんですもの。話をして見ると心こころもち地の好い人ですがね

え。どうかするとこう物凄ものすげいような感じのすることが有る。あそこは、僕は面白いところじゃないかと思ひますよ」

「実は、私も、そうも思つて見てる」

こう達雄が言つた。

「何卒どうかまあウマくやつて貰わないと——橋本の家に取つては大事な人だで」とお種は三吉の方を見て、「兄さんもこの節は彼のとばかり心配してますよ。吾家うちでも、御蔭で、大分商法が盛んに成つて、一頃から見ると倍も葉が売れる。この調子で行きさえすれば内輪うちわは楽なものなんですよ。他に何も心配は無い。唯、彼が……」と言いかけて、声を低くして、「近頃懇意にする娘が有るだテ」



「有りそうなことだ」と三吉は正太を弁護するように言う。

「お前さんは直にそうだ」とお種は叱つて見せて、「若いものの肩ばかり持つもんじゃ有りませんよ」

「やはりこの町の人ですか」と三吉が聞いた。

「ええ、そうですよ」とお種は受けて、「兄さんにしろ、私にしろ、どうもそこが気に入らん」

こういう話をして居る間、お仙は手持無沙汰てもちぶさたに起たつたり坐つたりして、時には親達の話の中で解つたと思うことが有る度に、独ひとり微笑ほほえんだりしていたが、つと母の傍へ寄つた。

「お仙ちゃん、御話が解りますかネ」とお種は母らしい調子で言つた。



三吉は戯れるように言った。

「叔父さんはああいうことを言う……」

とお仙は呆れて、笑い転げるように新座敷へ逃出した。

風呂が沸いたと言って、下婢のお春が告げに来た頃、先ず達雄は連日の疲労を忘れに行つた。

「お仙、ちやつと髪を結つて了わまいかや」とお種は、炉辺へ来て待っている髪結を呼んで、古風な鏡台だの櫛箱だのを新座敷の方へ取出した。

「三吉。すこし御免なさいよ」とお種は鏡の前に坐りながら言つ

た。「私は花が好きだで、今年も丹精して造りましたに見て下さい——夏菊がよく咲きましたでしょう」

三吉は庭に出て、大きな石と石の間を歩いたが、不ふと凶姉の後に立つ女髪結を見つけて不思議そうに眺めていた。髪結は種々てな手真似まねをしてお種に見せた。お種は笑いながら、庭に居る弟の方を見て、「この髪結さんは手真似で何でも話す。今東京から御客さんが来たそうだが、と言って私に話して聞かせるところだ——おし唾つばだが、りこう惻あはれ好こうなものだぞい」おしこう言い聞かせた。

深い屋根の下にばかり日を送っているお種は、この唾の髪結を通して、女でなければ穿せん鑿さくして来ないような町の出来事を知り得るのである。髪結は又、人の気の付かないことまで見て来て、

それを不自由な手真似で表わして見せる。その日も、親指を出したり、小指を出したり、終しまいに額のところへ角を生はやす真似をしたりして、世間話を伝えながら笑った。

日暮に近い頃から、達雄、三吉の二人は涼しい風の来る縁先へ煙草盆を持出した。大番頭の嘉助も談話はなしの仲間に加わった。そこへお仙やお春が台所の方から膳ぜんを運んで来た。

お種は嘉助の前にも膳を据えて、

「今日は旦那も骨休めだと仰おつしやるし、三吉も来ているし、何物なんにも無いが河魚で一杯出すで、お前もそこで御相伴ごしやうばんしよや」  
 こう言われて、嘉助は癖のように禿はげ頭あたまを押えた。

「さ、御酌致しましょう」

と嘉助は遠慮深い膝を進めた。この人は前垂をメ《し》めてはいるが、武術の心得も有るらしい体格で、大きな律義りちぎそうな手を出して、旦那や客に酒を勧めた。

何時いつの間にか話も若旦那のことに落ちて行つた。お種は台所の方にも気を配りながら、時々部屋を出て行くかと思うと、復また入つて来て、皆なと一緒に息子のことを心配した。

「いッそのこと、その娘を貰つてやったら可いじや有りませんか」  
三吉は書生流儀に言出した。

「そんな馬鹿なことが出来るもんですかね」とお種は嘲あざけるように言つて、「お前なんにさんは何事も知らないからそんなことを言うけれど」

「それに、お前さま」と嘉助は引取つて、紅あかく充血した眼で客の方を見て、「娘の親というものが氣に入りません……これは、まあ、私の邪推かも知しれませんが、どうも親が背後うしろに居て、娘の指さし指ずをするらしい……」

お種は何か思出したように、物に襲われるような眼付をしたが、それを口に出そうとはしなかつた。

「よしんば、そうでないと致したところで」と嘉助は言葉を継いで、「家の格が違います。どうして、お前さま、あんな家から橋本へ貰えるものかなし……」

暮れかかつて来た。屋根を越して来る山の影が、庭にもあり、一段高く斜に見える蔵の白壁にもあり、更に高い石垣の上に咲く夕顔かぼちや南瓜たななどの棚にもあつた。この家の先代が砲術の指南をした頃に用いた場所は、まだ耕地として残つていたが、その辺から小山の頂へかけて、夕日が映あつていた。

百姓の隠居も鋤くわを肩に掛けて、上の畠はたけの方から降りて来た。

夕飯時を報しせる寺の鐘が谷間に響き渡つた。達雄は、縁先から、自分の家に附いた果樹の多い傾斜を眺めて、一杯は客の為に酌くみ、一杯はよく働いてくれる大番頭の為に酌み、一杯は自分の健康の為に酌んだ。

「何卒どうかして、まあ、若旦那にも好いお嫁さんを……」と嘉助は旦那



那から差された盃さかずきを前に置いて、「早く好いところから貰つて上げて、一同安心いたしますように……これが何よりも御家の堅めで御座いますので」

「そのお嫁さんだテ」とお種も力を入れる。

「どうもこの町には無いナア」と達雄は眉まゆを動かして、快濶かいかつらしく笑つた。

その時、お種は指を折つて、心当りの娘を数えてみた。年頃になる子は多勢あつても、いざ町から貰うと成ると、適当な候補者は見当らなかつた。

「飯田の方の話よなし」とお種は嘉助の方を見て、「あれを一つお前に聞いて貰うぞい」

「ええ、あれは引受けた」と嘉助が言った。

三吉は聞ききとが咎めて、「飯田の方に候補者でも有るんですか」

「十二、まだそうハッキリした話では無いんですがね、すこしばかり心当りが有つて」と達雄は膝を動かす。

「聞き込んだ筋が好いもんですから」とお種も三吉に言い聞かせた。「今年の秋は、嘉助も彼地あつちへ行商に出掛けるで、序ついでに精くわしく様子を探つて貰うわい——吾家うちでお嫁さを貰うなんて、お前さん、それこそ大仕事なんですよ」

この人達は、子と子の結婚を考える前に、先ず家と家の結婚を考えなければ成らなかつた。

何時の間にかお仙も母の傍へ来て、皆なの話に耳を傾けていた。

やがて母が気が付いた頃は、お仙の姿が見えなかった。お種は起つて行つて、何気なく次の部屋を覗いて見た。

「お仙、そんなところで何をしてるや……」

娘は答えなかった。

「この娘は、まあ、妙な娘だぞい。お嫁さんの話を聞いて哀しく成るような者が何処にあらず」とお種は娘を慰撫めるように。

「お仙ちゃん、どうしました」こう三吉が縁側のところから聞いた。

お種は三吉の方を振返つて見て、「お仙はこれで極く涙脆いぞや。兄さんに何か言われても直に涙が出る……」

その晩、三吉は少量すこしばかりの酒に酔つたと言つて、表座敷の方へ横に成りに行き、嘉助も風呂を貰つて入りに裏口の方へ廻つた。奥座敷には達雄夫婦二人ぎりとなつた。まだ正太は町から歸つて来なかつた。

お種は立ちがけに、一寸ちよつと夫の顔を眺めて、「正太もあれで三吉叔父さんとは仲が好いぞなし——叔父さんには何でも話す様子だ」

「そうだろうナア。年齢としから言つても、丁度好い友達だからナア」と達雄が答える。

「貴方はどう思わさせるか知らんが……私は三吉の今度来たのが

彼の子の為めにも好からずと思つて……」

「俺も、まあそう思つてる」

この様な言葉を交換とりかわした。不図、お種は洋燈ランプの置いてある方へ寄つて、白い、神経質らしい手を腕の辺まで捲まくつて見て、蚤のみでも逃がしたように坐つていたところを捜す。

「痒かゆい痒かゆいと思つたら、こんなすそに食からいからかいて」とお種は単衣ひとえの裾すその方を掲からげながら捜してみた。

「そうどうも苦にしちや、えらい」と達雄は笑つた。

「一匹居ても、私は身体中ゾクゾクして来る」

こうお種は言つて、若い時のような忍こらえ耐しょうは無くなつたという風で、やがて笑いながら台所の方へ出て行つた。

三吉が東京から訪ねて来たことは、達雄に取つても嬉しかった。彼は親身しんみの兄弟というものが無い人で、日頃お種の弟達を實の兄弟のように頼もしく思っている。三吉が来た為に、種々いろいろ話が出る。話が出れば出るほど、種々な心こころもち地ちが引出される。子に対する達雄の心配も一層深く引出された形である。

平素潜んでいたようなことまで達雄の胸に浮んで来た。先代が亡くなつたのは、彼がまだ若かつた時のことで。その頃は嘉助同格の支配人が三人も詰切つて、それを葉くすりかた方となと称えて、先祖から伝わつた仕事は言うに及ばず、経済から、交際まで、一切そういう人達でこの橋本の家を堅めていた。彼もまた、青年の時代には、家の為に束縛いさぎよされることを潔しとしなかつたので、志を抱いだい

て国を出たものである。白髪のお母や妻子を車に載せて、再びこの山の中へ帰つて来るまでには、何程の波瀾を経たろう。長い間かかつて地盤を築き上げた先祖の事業は彼が半生の努力よりも根深かつた。先祖は失意の人の為には「隠れ家」を造つて置いてくれた。彼は家附の支配人の手から、退屈な事業を受取つてみて、はじめて先祖の畏敬すべきことを知つたのである。

「丁度正太が自分の若い時だ」と達雄は自分で自分に言った。

「いや、自分以上の空想を抱いて、この家を壊しかけているのだ」と思った。彼は、自分の子が自分の自由に成らないことを考えて、その晩は定時より早く、可憐に寝床へ入つた。家のものが皆な寝た頃、お種は雪洞を点して表座敷の方へ見に行つた。

三吉と直樹とは最早枕を並べて眠っていたが、まだ正太は帰らなかつた。お種は表庭から門のところへ出て、押せば潜り戸の開くようにして置いた。厳しい表庭の戸締も掛金だけ掛けずに置いたは、可愛い子の為であつた。

## 二

大森林に連続した谷間の町でも、さすがに暑い日は有つた。三吉は橋本の表座敷に籠つて、一夏かかつて若い思想を纏めようとしていた。姉は仕事に疲れた弟を慰めようとして、暇のある時は、この家に伝わる陶器、漆器、香具の類などを出して来て見



せた。ある日、お種は大きな鍵かぎを手にしなから、裏の土蔵の方へ弟を導いて行つた。

高い白壁の隣には、丁度物置蔵と反対の位置に、屋根の低い味み噌蔵そくらがある。姉はその前に立つて、大きな味噌桶おけを弟に覗のぞかせて、毎日食膳に上る手製の醤油たまりは、その中で造られることなどを話して、それから嚴重な金網張の戸の閉つた土蔵の内部なかへ三吉を案内した。二階は広く薄暗かつた。一方の窓から射し込む光線は沢たく山積さんんである本箱や古びた道具の類を照らして見せた。姉は今一つの窓をも開けて、そこにあるのは祖母おばあさんが嫁に來た時の長持、ここにゐるのは自分の長持、と弟に指して話し聞かせた。三吉は自由あそに橋本の蔵書を獮あそることを許された。

姉は出て行つた。三吉は本箱の前を彼方あちこち是方と見て廻つた。その時、彼は未だ自分の生れた家の焼けない前に一度帰省して阿爺おやじの蔵書を見たことを思出して、それをこの家のに比べてみた。このはそれ程豊富では無かつた。三吉の阿爺が心酔したような本もととおり居派の学説に関する著述だの、万葉や古事記の研究だの、和漢の史類だの、詩歌の集だの、そういうものは少なかつたが、そのかわり橋本の家に特有な武術、武道などのことを書いた写本が沢山ある。経書けいしよ、子類しるいもある。誰が集めたものか漢訳の旧約全書などもある。見て行くと、三吉の興味を引くような書目は少なかつた。窓に寄せて、大きな柳行李やなぎごうりの蓋ふたが取つてあつて、その中に達雄の筆で表題を書いたものが幾冊か取散ふるしてある。古い日記

だ。何気なく三吉はその一冊を取上げて見た。

直樹の父親の名なぞが出て来た。それは三吉が姉と一緒に東京で暮した頃の事実<sup>こと</sup>で、ところどころ拾って読んで行くうちに、少年時代の記憶が浮び揚<sup>あが</sup>つた。その頃は姉の住居<sup>すまい</sup>でもよく酒宴を催したものだ。直樹の父親が来て、「木曾のナカノリサン」などを歌い出せば、達雄は又、清<sup>すず</sup>しい、恍惚<sup>ほれぼれ</sup>とするような声で、時の流行<sup>はやりうた</sup>唄を聞かせたものだ。直樹の父親もよく細<sup>こまか</sup>い日記をつけた。これはそう細いという方でもないが、何処<sup>どこ</sup>か成島<sup>なるしまりゆ</sup>柳<sup>うほく</sup>北の感化を思わせる心の持方で、放<sup>ほしいまま</sup>肆<sup>おとこおんな</sup>な男女の臭<sup>におい</sup>気を嗅<sup>か</sup>ぐような気のことまで、包<sup>お</sup>まず掩<sup>おお</sup>わずに記しつけてある。思いあたる事実<sup>こと</sup>もある。

静かな蔵の窓の外には、熱い明るい空気を通して庭の草木も蒸されるように見える。三吉はその窓のところへ行つて、誰がこの柳行李の蓋を取て置いたかと想像した。あるいは正太がこの隠れた場処で、父の耽溺たんできの歴史を読みかけて置いたものではなからうか、と想つてみた。

重い戸を閉めて置いて、三吉は蔵の石階いしだんを下りた。前には葡萄ぶどう棚や井戸の屋根が冷しすずそうな蔭を成している。横にある高い石垣の側からは清水も落ちてゐる。心臟形をした雪ゆきのした下の葉もその周囲まわりに蔓延はびこっている。

この場所をえら択んで、お仙はたらい盥を前に控えながら、何かすす濯ぎ物を始めていた。下婢おんなのお春も井戸端に立つて、水を汲くんでいた。お春は、ちよつと見たところこう気むずかしそうな娘で、しよつちゆう平常店の若い番頭や手代の顔をにら睨み付けるような眼付をしていたが、しかしそれは彼女が普通の下女奉公と同じに見られまいとするほ矜持こりからであつた。こうして、お仙相手に立話をしている時などは、最早も年頃の娘らしさが隠されずにある。彼女とても、濃情な土地の女の血を分けた一人である。

三吉はお仙に言葉を掛けて、しばらく暫時そこに立っていた。丁度正太が、植木いじりでもしたという風で、つちまみ土塗れの手を洗いに来た。お春は言付けられて、つるべ釣瓶から直じかに若旦那の手へ水を掛けて、

すこし紅くなつた。お仙も無心に眺めていた。

手を洗つた後、正太は三吉叔父と一緒に成つた。二人は話し話し母屋の方へ歸つて行つた。

手桶を担いだお春は威勢よく二人の側を通つた。百姓の隠居も会釈して通つた。隠居の眼は正太に向つて特別な意味を語つた。

「若旦那様——お前さまは唯の若いものの氣でいると違ふぞなし……お前さまを頼りにする者が多勢あるぞなし……行く行くはお前様の厄介に成ろうと思つて、こうして働けるだけ働いている老と人しよりもここに一人居るぞなし……」とその無智な眼が言つた。

正太は一種の矜持ほこりを感じた。同時に、この隠居にまで拝むような眼で見られる自分の身をうるさ煩く思つた。

漠然ばくぜんとした反抗の心は絶えず彼の胸にあつた。「どうしてこ  
う家のものは皆な世話を焼きたがるだろう、どうしてこうヤイヤ  
イ言うだろう——もうすこし自分の自由にさせて置いて貰いたい」  
これが彼の願っていることで、一々自分のすることを監視するよ  
うな重苦しい空気には堪えられなかつた。

田舎風いなかの屋造やづくりのことで、裏口から狭い庭を通つて、表の方へ  
抜けられる。表座敷へ通う店頭みせさきの庭のところで、三吉、正太の  
二人は沢田老人の訪ねて来るのに逢あつた。

「沢田さんですか。やはり吾家うちの内職をしています——薬の紙を  
折つてます」

こう正太は三吉に話した。

直樹の叔父にあたるこの神経質な老人の眼は、又、こんなことを言った。「正太様——お前さまの祖母様おばあさまや母上様おつかさまは皆な立派な旧家から来ておいでる……大旦那は学問を為し過ぎたで、それで不経済なことを為さつせえたが、お前さまは算盤そろばんの方も好くやらんと不可いかんぞなし……お前さまの責任は重いぞなし……」

正太はこういう人々の眼から遁のがれたかった。

表座敷へ戻つて、向の山の傾斜がよく見えるようにと、三吉はすつかり障子を開け展ひろげた。正太も広い部屋の真中へ大きな一いっ閑張んぱりの机を持出した。こうして、一人ぎりで、楽しい雑談に耽ふけ



るにつけても、正太はこの叔父の何時<sup>いつ</sup>までも書生でいられるのを羨<sup>うらや</sup>ましく思った。叔父がここへ来て何を為ようと、何を考えようと、誰一人気を揉<sup>も</sup>む者も無い。それに引きかえて、正太は折角<sup>せつかく</sup>思い立った東京の遊学すら、中途で空<sup>むな</sup>しく引戻されて了った。やれ大旦那が失敗したから、若旦那には学問は無用だことの、やれ単<sup>ひとり</sup>独で都会に置くのは危いことの、種々な故障が薬方の衆から出た。「家などはどうでもいい」と思うことは屢<sup>しばしば</sup>々有ったのである。

この座敷から谷底の方に聞える木曾<sup>きそがわ</sup>川の音も、正太には何の新しい感じを起させなかつた。彼は森林の憂鬱<sup>しほ</sup>にも飽き果てた。

「こうして——一生——山の中に埋れて了<sup>しま</sup>うのかナア」それを考

えてみたばかりでも、彼には堪え難かった。どうかすると、彼は話の途中で耳を澄ました。そして、引入られるような眼付をして、熟じつと溪流の音に聞き入って。

お種が入って来た。

「ネブ茶を香ばしく入れましたから、持って来ました」とお種はもてなしが款待顔がおに言て、吾子わがこと弟の顔を見比べて、「正太や、叔父さんにも注ついで進あげとくれ」

この「ネブ茶」はある灌かんぼく木の葉から製したもので、三吉も子供の時分には克よく飲み慣れた飲料である。

「どうでした、吾家うちの蔵には三吉の見るような書物ほんが有りましたか」とお種が聞いた。

「ええ……有りました」と三吉は氣の無い返事をする。

お種は、二人が睦まじむつそうに語る様子を眺めて、やがて出て行つた。

若いもの同志の話は木曾少女おとめの美しいことに落ちて行つた。その時、三吉は姉から聞いた娘のことを言出して、正太の意中を叩いてみた。正太は、唯、あわれに思うというだけのことを泄もらした。彼の心では、そんな話を聞いて貰う前に、何故なぜに自分の恋が穢けがれて行くかを語りたかつたのである。

暫時しばらく二人は無言でいた。

「しかし、叔父さん——この町にも種いろいろ々な青年が有りますがね、どうも家にばかり居るような人は面白味が有りません……やっぱ

り働きもすれば遊びもする、そういう人の方が話せるようですね」  
こう正太が言出した。

香ばしい「ネブ茶」を飲み、巻煙草まきたばこを燻ふかしながら、叔父甥おいは話し続けた。正太の方は実業に志し、東京へ出た時は主に塗物染物のことを調べ、傍らかたわ絵画の知識をも得ようとしたものであったが、性来物うけいを感受うけいれる力に富むところから、三吉などの向いて行くこうとする方面にも興味を感じている。その日も、三吉の書きかけた草稿を机の上に展ひろげて、清すずしい、力のある父の達雄よに克よく似た声で読聞かせた。

東京で送った二年——殊ことにその間の冬休を三吉叔父と一緒に仙台で暮したことは、正太に取って忘れられなかった。東京から押掛けて行くと、丁度叔父は旅舎やじやの裏二階に下宿していて、相携えて人を訪ねたり、松島の方まで遊びに行ったりした。あの時も、仙台で、叔父の書いたものを見せて貰って、寂しい旅舎ランゲの洋燈の下でその草稿を読み聞かせながら、一緒に長い冬の夜を送ったことが有った。それを正太は言出さずにいられなかった。

「そうそう」と三吉も思出したように、「丁度岩沼の基督降誕祭クリスマスに招ばれて行った後へ、君が訪ねて来て……あんな田舎らしい基督降誕祭に遭遇であったことは僕も始めてでしたよ……信者が五日飯なぞを煮たいて御馳走ごちそうしてくれましたツけ。あの晩は長老の呉服屋

さんの家に泊つて、翌朝阿武隈川を見に行つて、それから汽車で仙台へ帰てみると、君が来ていた……」

「そうでしたね……あの二階から海の音なぞも聞えましたね」と正太は若々しい眼付をして言った。

「仙台は好かつたよ。葡萄島ぼたけはある、梨島あすこはある……読みたいと思う書籍ほんは何程いくらでも借りて来られる……彼処あすこへ行つて僕も夜が明けたような気がしたサ……あれまでというものは、君、死んでいたようなものだったからね」と言つて、三吉は深い溜息ためいきを吐ついて、「考えてみると、僕のような人間がよく今まで生きて来たよ  
うなものだ」

正太は叔父の顔を眺めた。

三吉は言葉を継いで、「彼処へ着いた晩から、僕は最早別の人だった。種々な物が活きて見えて来た。書く気も起った……」

「あの時叔父さんの書いたものは、吾家に蔵つてあります」

「しかし正太さん、お互にこれからですネ。僕なぞも未だ若いんですから、これから一つ歩き出してみようと思えますよ……」

こんな話をしているところへ直樹が入つて来た。直樹は中学に入つたばかりの青年で、折取つた野の花を提げて、草臥れたような顔付をしながら屋外から帰つて来た。

「直樹さん、何処へ？」と三吉が聞いてみた。

「ええ——ずっと河の岸を廻つて来ました」と直樹は答える。

その時、正太は床の間にある花瓶を持出して、直樹が持つて来

た百合だの撫子だの花で机の上を飾った。

「兄さん、山脇の姉さんがチト御遊びに被入つしやいつて——

ほんとう  
眞実に兄さんは遠慮深い人だつて」

こう直樹が自分の親戚からの言伝を三吉に告げた。三吉はあ

まり町の人を訪問する気が無かつた。

活気のある鈴の音が谷底の方で起つた。急に正太は輝くような  
眼付をして、その音のする方を見た。

「ア——御岳参りが着いたとみえるナ」

と正太は独語のように言った。高山の頂を極めようとする

人達が、威勢よく腰の鈴をチリンチリンチリンチリン言わせて、  
宿屋に着くことを楽しみにして来る様子は、活気が外部からこの谷



に<sup>あい</sup>間へ流れ込むように聞える。正太は聞耳を立てた。その音こそ彼が聞こうと思うものである。彼は縁側にまで出て聞いた。

祭の日は橋本でも一同仕事を休んだ。薬の看板を掛け、防火用の黒い異様な大団扇<sup>おおうちわ</sup>を具<sup>そな</sup>え付けてある表門のところには、時ならぬ紅白の花が掛かった。小僧達も新しい仕着<sup>しきせ</sup>に着更えて、晴々しい顔付をして、提<sup>ちようちん</sup>灯のかげを出たり入ったりした。

お種は表座敷へ来て、

「三吉、お前さんは羽織が有るまいがナ」

と弟の顔を眺めた。三吉もサツパリとした単衣<sup>ひとえ</sup>に着更えていた。

「羽織なんか要りません。これで沢山です」と三吉が言った。

「正太の紋付を貸すで——今に吾家の前を御輿が通るから、そうしたら兄さん達と一緒に出て見よや」

「借着をして祭を見るのも変なものですナア」

「何が変なものか。旅では、お前さん、それが普あたりまえ通だ」

「私はどうでも可よう御座んすが、姉さんが着た方が可いと思うなら、借りましょう——」

旅で祭に遇あつた直樹は、方々の親類から招よばれて、出て行つた。正太を始め、薬方の若衆も皆な遊びに出た。町の方が賑にぎやかなだけ、家の内は寂しい。

「姉さん」と三吉は、姉が羽織を出しに行く序ついでに、物を頼むとい

う風で、「この節私は夢を見て困りますが、からだ身体せいの故せいじやないか  
と思うんです……サフランでも有るなら、すこし私に飲ましてく  
れませんか」

「そんなことは造作ない。うち吾家にあるから、くれる」

「おつか母親さんが生きてる時分には、時々私に飲ましてくれましたッ  
け——女の薬だが、飲めッて」

「ええ、おとこ男子にも血が起るといふことは有るで」

こう言つて、お種は出て行つた。やがて橋本の紋の付いた夏羽  
織と、薬草の袋と、水とを持って来た。紅いサフランの花はな弁びらは、  
この家で薬の客に出す為に特に焼かした茶椀の中へ浸して、それ  
を弟に勧める。

「どんな夢を見るよ」と姉が聞いた。

「私の夢ですか」と三吉は顔に苦痛を帯びて、「友達の中には、景色の夢を見るなんて言う人も有りますがね、私は景色なぞを一度も見たことが無い。夢と言えば女が出て来る」

「馬鹿らしい！」と姉はあざけ嘲るように。

「いえ、姉さん、私は正直なところを話してるんです。だからこんな薬なぞを貰って飲むんです」

「お前さんの知ってる人かい」

「ところが、それが誰だか解らない。どう後で考えても、おぼえ記憶の無いような人が出て来るんです——多くは、素足で——やけど火傷でもしそうな、恐しい勢で。昨夜なぞは、りんごばたけ林檎畠のようなところへ

追詰められて、樹と樹の間へ私の身体が挟はさまつて、どうにも逃げ場を失つて了つた……もうすこしで其奴そいつに捕まるかしらん……と思つたら目が覚さめました。汗はビツシヨリ……」

「お前さん達の見る夢は、どうせそんなものだ」

と姉は復また嘲るように笑つた。

御輿おんなれんの近づいたことを、お仙しんが報しせに來た。女おんな連れんは門の外

まで出た。そこから家々の屋根、町の中央を流れる木曾川みおろが下み瞰おろされる。三吉は長過ぎるような羽織を借りて着て、達雄と一緒に崖がけの下へ降りた。

御輿の通り過ぎた後、お種は娘におんな下婢を付けて祭を見せにやり、自分は門の内へ引返した。店口の玄関のところには、手代の幸作が大きな薬の看板にもた凭れながら、尺八を吹いて遊んでいたが、何時いつの間にかこれも出て行つた。広い家の内にはお種一人残つた。急にそこいら周囲がしんかん闐寂として来た。寺院のようおてらにひとけ人氣が無かつた。お種はろばた炉辺に坐つてひと独りで静かに留守居をした。この祭には、近在の若い男おとこおんな女は言うに及ばず、遠い村々のだんな旦那衆まで集つて、町は人で埋められるのが例で、その熱狂した群集の氣勢ばかりでも、じつと静止していられないような思をさせる。こういう時にも、お種は家を守るものと定きめて、それを自分の務めのように心得てい

た。

実家の父——小泉忠寛の名は、時につけ事に触れ、お種の胸に浮んだ。お種や三吉の生れた小泉の家は、橋本の家とは十里ほど離れて、丁度この谿谷たにの尽きようとするところに在あった。その家でお種は娘の時代を送った。父の忠寛は体格の大きな、足袋たびも凶ず無なしを穿はいた程の人で、よく肩が凝ると言つては、庭先に牡丹ぼたんの植えてある書院へ呼ばれて、そこでお種が叩かせられたもので、その間に父の教えたこと、話したことは、お種に取つて長く忘れられないものと成った。そればかりではない、父は娘が手習の手ににまで、貞操の美しいことや、献身の女の徳であることや、隣の人までも愛せよということや、それから勤勉、克己、儉約、誠

実、篤行などの訓誨くんかいを書いて、それをお種に習わせたものであつた。

こういう阿爺おやじを持つて嫁かたづいて来た人の腹おなかに正太が出来た。お種は又、夫の達雄が心配するとは別の方で、自分の子が自分の自由にも成らないことを可嘆なげかわしく思った。彼女は、炉辺で、正太のことばかり案じていた。

「宗助——幸助——宗助——幸助」

と御輿を担いで通る人々の掛声を真似まねながら、一人の小僧が庭口へ入つて来た。この小僧は、祭の為に逆上のぼせて了しまつたような眼付をして、隠居が汲くんで置いた水を柄杓ひしゃくでガブガブ飲んだ。

三吉も帰つて来た。お種は祝の強飯こわめしだの煮染にしめだのを出して、



それを炉辺で振舞っていると、そこへ正太が氣息いきをはずませて入つて来た。

「母親おつかさん、何か飲む物を頂戴ちようだい。咽喉のどが乾いて仕様が無い」と正太は若々しい眼付をして、「今ネ、御輿ごこしの飾りを取つて了つたところだ。鳳凰ほうおうも下した。これからが祭礼まつりだ。ウンと一つ今年あばは暴れ廻まわつてくれるぞ」

「まあ、騒さわぎですネ。正太、お前まへも強飯おこわを食えや」とお種ねが言つた。

「叔父さん、御覧ごらんでしたか」と正太は三吉の方を見て、「どうです、田舎いんやの祭は。変かつてましよう。殊ことに是処ここのは荒神あらがみさま様さまで通とつていますから、あの大きな御輿ごこしを町中ちやう転ころがして歩くまんです。終しまいに、

神社の立木へ持つてツて、輿を担ぐ棒までへシ折つて了う。その為はに毎年白木で新調するんです——エライことをやりますよ。髭ひげの生はえた人まで頬冠もで揉みもに出るんですからネ」

乾いた咽喉うるおを霑うるおした後、復た正太は出て行つた。

「宗助——幸助——宗助——幸助」

と小僧が手てぬぐい拭ぬぐを首くびに巻付けて出て行くのを見ると、三吉も姉の傍わきに静止じつとしていられないような気がした。

夜に入つて、谷底の町は歡樂の世界と化した。花やかに光る提灯の影には、祭を見ようとする男女の群が集つて、狭い通を潮の

ように往来した。押しつ押されつする御輿の地を打つ響、争い叫ぶ若者の声なぞは、人々の胸を波打つようにさせる。王滝川の岸に添うて二里も三里もある道を歌いながら通つて来る幾組かの娘達は、いずれも連に離れまいとし、人に踏まれまいとして、この群集の中を互に手を引合つて歩いた。中には雑踏ひとごみに紛れて知らない男を罵るものも有つた。慾に目の無い町の商人は、簪かんざしを押付け、飲食のみくいする物を売り、多くの労働の報酬むくいを一晚なげうに擲なげうたせる算段をした。町の中央にある広い暗い場処では踊も始まつた。

祭ありさまの光景を見て廻つた後、一しきりは三吉も御輿に取付いて、はだし跣足しりはしよりに尻端折で、人と同じように「宗助——幸助」と叫びながら押ししてみたが、やがて額ぶに流れる汗を拭きつつ橋本の家の方へ

帰つて来た。足を洗つて、三吉は涼しい風の来る表座敷へ行つた。そこで畳の上に毛脛けずねを投出した。

「三吉帰つたかい」

こう言いながら、お種も団扇うちわを持つて入つて来た。

「私も横に成るわい。今夜は二人で話さまいかや」

と復たお種が言つて、弟の側に寝転ねころんだ。東京にある小泉の家

のことは自然と姉の話に上つた。相続人あととりの実も今度はよくやつて

くれればいいがということ、次の森彦からも暫時しばらくたよ便りが無いこ

と、宗蔵の病氣もどうかということ、それからそれへと姉の話は

弟達の噂うわさに移つて、結局吾子ごごのことに落ちて行つた。お種は三吉

の考えないようなことまで考えて、種々いろいろと正太の為に取越苦勞

をしていた。

「若いものことですもの、お前さん、どんな間違がないとも限りませんよ——もし、子供でも出来たら。それを私は心配してやる」

こうお種は言つて、土地の風俗を蔑視さげすむような眼付をした。樂しそうな御輿の響は大切な若い子息むすこを放ほしいまま縦縦な世界の方へと誘うように聞える……お種は正太のことを思つてみた。誰と一緒に、何処を歩いている、と思つてみた。そして、何の思慮も無い甘い私語ささやきには、これ程心配している親の力ですら敵かなわないか、と考えた。

「私が彼あれに言つて聞かせて、父親おとつさんも女のことで度々失敗しくじり

が有つたから、それをお前は見習わないように、世間から後うしろゆ指びを差されないようにツて——ネ、種いろいろ々彼に言うんだけれど……ええええ、彼はもう父親さんのワルいことを何もかも知つてますよ」

三吉は黙つて姉の言うことを聞いていた。お種は更に嘆息して、「旦那もね、お前さんの知つてる通り、好い人物ひとなんですよ。気分は温厚すなおですし、奉公人にまで優しくして……それにお前さん、この節は非常な勉強で、人望はますます集つて来ましたサ。唯、親としてのシメシがつかない。真ほんとう実に吾子の前では一言もないよ。うなことばかり仕出来しでかしたんですからね。旦那も今ではすつかり後悔なすつて、ああして何事なんにも言わずに働いてる。旦那の心こころも

地ちは私によく解る。真実に、その方の失敗しくじりさえなかつたら、

旦那にせよ、正太にせよ……私は惜しいと思えますよ」

お種は、気の置けない弟の前ですら、夫の噂うわさすることを羞はずするという風であつた。夫から受けた深い苦痛——その心を他人に訴えるということとは、父の教訓おしえが許さなかつた。

「代々橋本家の病気だから仕方ない」

とお種は独ひとりごと語ことのように言つて、それぎり、夫の噂はしなかつた。

ゴットン、ゴットンという御輿こころがの転ころがされる音は、遅くまで谷底の方で、地響のように聞えていた。

直樹は一月ほどしか逗留<sup>とうりゆう</sup>しなかつた。植物の好きなこの中学生は、東京への土産<sup>みやげ</sup>にと行って、石斛<sup>せつこく</sup>、うるい、鷺草<sup>さぎそう</sup>、その他深い山の中でなければ見られないような珍しい草だの、香のある花だのの見本を集めて、盆前に橋本の家を発<sup>た</sup>つて行つた。三吉は自分の仕事の纏<sup>まと</sup>まるまで残つた。

旧暦の盆が来た。橋本では、先代からの例として、仏式でなく家の「御霊<sup>みたま</sup>」を祭つた。お種は序<sup>ついで</sup>に小泉の母の二年をも記念する積りであつた。年を経<sup>と</sup>るにつれて、余計に彼女はこういうことを大切にするように成つた。

墓参りの為に、お種は三吉を案内して、めずらしく家を出た。



お仙は母に言付けられた総菜そうざいの仕度をしようとして、台所の板の間に俎板まないたを控えて、夕顔の皮を剥いた。干瓢かんぴょうに造つても可い程の青い大きなのが最早裏の畠もとうには沢山生なつていた。

「お春、お前の髪は好く似合う」

とお仙は、流ながし許もとに立つて働いている下婢おんなの方を見て、話しかけた。

「そうかなし」とお春は振向いて、嬉しそうな微笑えみを見せた。

「貴方あんたの島田も恰好かつこうが好く出来た」

お仙も嬉しそうに笑つて、やがて夕顔を適當の厚さに切ろうと試みた。幾度か庖丁ほうちようを宛行あてがつて、当惑したという顔付で、終しまいには口を「ホウ、ホウ」言わせた。復た、お仙は庖丁を取直した。

何程の厚さに切れれば、大略おおよそ同じ程そろに揃えられるか、その見当がお仙には付きかねた。薄く切つてみたり、厚く切つてみたりした。彼女の手は震えて来た。

お春はそれとも気付かずに、何となく沈着おちつかないという様子をして、別なことを考えながら働いていた。何もかもこの娘には楽しかった。新しい着物に新しい前垂を掛けて働くということも楽しかった。晚には暇が出て、叔母の家へ遊びに行かれるということも楽しかった。

墓参りに行った人達が帰つて来た。お種は直に娘の様子を看み取つた。お仙の指からはすこし血が流れていた。

「大方こんなことだらうと思つた」とお種は言つた。「お仙ちゃ

ん、母親おつかさんが御手伝しますよ——お前さんに御手本を置いて行かなかつたのは、私が悪かつた」

お仙は途方に暮れたという顔付をしている。

「これ、袂たもとぐそ糞くそでも付けさんしよ」とお種は氣を揉もんで、「折せつかく角今日は髪まで結つて、皆な面白く遊ぼうという日だに、指なぞを切つては大事おおごとだぞや」

お春はお仙の傍へ寄つた。お種は三吉の方を見て、

「ええええ、これだから眼が離はなされない……真ほん実とうにこういうところは極ごく子供だ……そう言えば、お前さん、今年の春もね、正太のお友達が寄つて吾家うちで歌留多かるたをしたことが有つた。山瀬さんも来た。あの人は正太とは仲好だから、お仙を側そばへ呼んで、貴方あなたも

お仲間でお取りなさいなッて——ネ。山瀬さんがそう言つて下さつた。するとお仙が山瀬さんの膝ひざに凭もたれて……まあ、無邪気など言つて無邪気な……兄さんだから好いの、お友達だから悪いの、そんな区別はすこしも無いようだ。罪の無い者だぞや」こう話し聞かせた。

その晩は、若いものにとつて、一年のうちの最も楽しい時の一つであつた。夕方から橋本の家でも皆な盆踊を見に行くことを許された。涼しい夏の夜の空気は祭の夜以上の楽しさを思わせる。暗いが、星はある。恋しい風の吹く寺の境内の方へ自然と人の足は向いて行つた。

叔母の家に帰ることを許されたお春も、人に誘われて、この光あ

りさま  
 景を見に行つた。大きな輪を作つて、足拍子揃そろえて、歌いなが  
 ら廻つて歩く男おとこ女おんなの群。他処よそから来ている工女達は多くその  
 中に混つて踊つた。頬冠ほのかりした若者は又、幾いくたり人かお春の左右を  
 通り過ぎた。彼女は言うに言われぬ恐怖おそれを感じた。丁度そこに若  
 旦那も来ていた。お春は若旦那に手を引いて貰つて、漸ようやくこの混  
 雑とごみから遁のがれた。

九月に入つて、三吉は一夏かかった仕事を終つた。お種から言  
 えば二番目の弟にあたる森彦の貰われて行つた家——この養家も  
 姓はやはり小泉で、姉きょうだい弟だいの生れた家から見ると二里ほど手前

にある——その老人から橋本へ便りがあつた。「三吉も最早東京へ帰るそうだが、わざわざ是方こちらへ廻るには及ばん、直に帰れ、その方がりようだめ両為だ」こんなことが書いてあつた。

「両為とは、老人も書いてくれた」

こう達雄は、三吉にその手紙を見せて、笑つた。この老人の儉約なことは、封筒や巻紙を見ても知れた。

いよいよ三吉の発つて行くべき日が近づいた。復た何時いつ来られるものやら解らないから、と言つて、達雄は酷ひどく名残なごりを惜んだ。

三吉が表座敷で書いた物をも声を出して通読してみた。薬の方の多忙いそがしいところを見て貰つたのが、何より東京への土産だ、とも話した。

「三吉さん、来て御覧なさい。君に御馳走ごちそうしようと思つて頼んで置いた物が、漸く手に入りましたから」

と達雄は炉辺へ三吉を呼んで言つた。三吉も帰る仕度やら、土地の人の訪問を受けるやらで、心はあわただしかつた。

「三吉」と姉も名残を惜むという風で、「お前さんに食べさせてもやりたいし、持たせてもやりたいと思つて、今三人掛りで、この蜂はちの子を抜くところだ。見よや、これが巣だ。えらい大きな巣を作つたもんじゃないか」

五層ばかりある地蜂の巣は、漆の柱を取離して、そこに置いてあつた。お種はお仙やお春と一緒に、子は子、親に成りかけた蜂は蜂で、一々巢の穴から抜取つていた。この地蜂は、蜜蜂などに

比べるとずっと小さく、土地の者の珍重する食料である。三吉も少年の時代には、よく人に随ついて、この巢を探しに歩いたものである。

「母親さん、写真屋が来ましたから、着物を着更えて下さい」  
こう正太がそこへ来て呼んだ。

「写真屋が来た？ それは大多おおいそがし忙だ。お仙——蜂の子はこうして置いて、ちやつと着更えまいかや。お春、お前も仕度するが可い」とお種は言った。

「嘉助——皆な写すで来いよ」達雄は店の方を見て呼んだ。

記念の為、奥座敷に面した庭で、一同写真を撮とることに成った。大番頭から小僧に至るまで、思い思いの場処に集った。達雄は、



先祖の竹翁が植えたという満天星どうだんの樹を後にして立つた。

「女衆は前へ出るが可い」

と達雄に言われて、お種、お仙、お春の三人は腰掛けた。

「叔父さん、貴方は御客様ですから、もうすこし中央まんなかへ出て下さい」

こう正太が三吉の方を見て言った。三吉は野菊の花の咲いた大きな石の側へ動いた。

白い、熱を帯びた山雲のちぎれが、皆なの頭の上を通り過ぎた。どうかすると日光が烈はげしく落ちて来て、撮影を妨げる。急に嘉助は空を仰いで、何か思い付いたように自分の場処を離れた。

「嘉助、何処へ行くなし」とお種は腰掛けたままで聞いた。

「そこを動かない方がいいよ——今、大きな雲がやって来た。あの影に成ったところで、早速撮つて貰おう」と正太も注意する。

「いえ——ナニ——私はすこし注文が有るで」

と言つて、嘉助は皆なの見ている前を通つて、一番日影に成り  
そんな場処を択んだ。丁度旦那と大番頭とは並んだ。待まち設もうけた  
雲が来た。若い手代の幸作、同じく嘉助の悴せがれの市太郎、皆みなな撮うつつ  
た。

三吉が出発の日は、達雄夫婦を始め、正太、お仙まで、朝のう  
ちに奥座敷へ集つた。三吉も夏服に着更えて、最も早う秋しゅう海かい棠どうな

どの咲出した裏庭を皆なと一緒に眺めながら、旅の脚絆きやはんを当てた。ここへ来がけに酷ひどく馬車で揺られたと言つて、彼は背中のある部分だけ薄く削けずり取られたような上着を着ていた。

三吉がこの山の中で書いたものは——達雄夫婦の賜物たまもののよう  
に——手荷物の中に納めてあつた。彼の心は暗い悲惨な過去の追  
想から離れかけていた。その若い思想かんがえを、彼は静かなところで  
纏まとめてみたに過ぎなかつた。

通いで来る嘉助親子も、東京の客が発つというので、その朝は  
定時いづもより早く橋を渡つて来た。

朝飯の後、一同炉辺で別離わかれの茶を飲だ。姉は名残が尽きないとい  
う風で、

「でも、よく来てくれた。何時でも来られそうなものだが、なかなか思うようにはいきません」

「どうして、それどこじやない」と嘉助も引取つて、「三吉様はこれで何度郷里へ帰らツせるなし」

「僕ですか、ずっと前に老祖母さんの死んだ時に一度、母親さんの葬式の時に一度——今度で三度目です」と三吉が言う。

「彼は八歳の時分に郷里を出たツきりよなし」とお種は嘉助の方を見て。

「これで、旧の家でも焼けずに在ると、帰る機会が多いんだがナア」と達雄も快濶らしく笑つた。

前の晩のうちに頼んで置いた乗合馬車の馬丁が、その時、庭

口へ声を掛けに来た。

「叔父さん、馬車が来ました」と正太が言つて、叔父の手荷物を提げながら、一步先へ出て行つた。

「では、私はここで御免蒙りますから——」とお種は炉辺で弟に別離を告げた。

「皆さんに宜敷——よろしく 実にも御無沙汰するがツて、宜敷言つておくれや——お前さんもまあ折角御無事で——」

挨拶もそこそこに、三吉はお仙やお春などにも別れて、橋本の家を出た。達雄はそこまで見送ると言つて、三吉と一緒に石段を降りた。

崖下には乗合馬車が待つていた。車の中には二三の客もあつ

た。この車はお六櫛ぐしを売る宿しゆくあたりまでしか乗せないで、遠く行こうとする旅人は其処そこで一つ山を越えて、更に他の車へ乗替えなければ成らなかつた。

「直樹さんと来た時は沓掛くつかけから歩きましたが、途中で虻あぶに付かれて困りましたツけ」

「ええ、蠅はえだの、蝸ぶよだの……そういうものは木曾路きそじの名物です。産馬地うまごこの故せいでしょうね」

こんな言葉を、三吉と正太とは車の上と下とで取換とりかわした。

ノンキな田舎のことで、馬車は容易に出なかつた。三吉は車の周囲まわりに立って見送っている達雄や嘉助や若い手代達にも話しかける時はあつた。待つても待つても他に乗合客が見えそうもないの

で、馬<sup>べつとう</sup>丁はちよつと口笛を吹いて、それから手綱<sup>たづな</sup>を執つた。車は崖について、朝日の映<sup>あ</sup>つた道路を滑<sup>すべ</sup>り始めた。二月ばかり一緒にいた人達の顔は次第に三吉から遠く成つた。

## 三

弟の三吉が帰るといふ報<sup>しらせ</sup>知を、実は東京の住居<sup>すまい</sup>の方で受取つた。小泉の実と橋本の達雄とは、義理ある兄弟の中でも殊<sup>こと</sup>に相許している仲で、旧<sup>ふる</sup>い家を相続したことも似ているし、地方の「旦那衆」として知られたことも似ているし、年<sup>とし</sup>齡から言つてもそう沢山違つていなかつた。

実は、達雄のように武士として、又薬の家の主人あるじとしての阿爺おやじを持たなかつたが、そのかわりに、一村の父として、大地主としての阿爺を持った。父の忠寛は一生を煩悶はんもんに終つたような人で、思い余つては故郷を飛出して行つて国事の為に奔走するという風であつたから、実が十七の年には最早家を任せられる程の境涯にあつた。彼は少壮としわかな孝子で、又可傷いたましい犠牲者であつた。父の亡くなる頃は、彼も地方に居て、郡會議員、県會議員などに選ばれ、多くの尊敬を払われたものであつたが、その後都会へ出て種々な事業たずさわに携るようになつてから、失敗の生涯ばかり続いた。製氷を手始めとして、後から後から大きな穴が開いた。

不図ふとした身の蹉跌つまずきから、彼も入獄の苦痛なを嘗めて来た人であ



る。赤煉瓦れんがの大きな門の前には、弟の宗蔵や三吉が迎えに来ていて、久し振で娑婆しゃばの空気を呼吸した時の心こころ地もちは、未だ忘れられずにある。日光の渴かわき……楽しい朝露……思わず嬉しさのあまりに、白い足袋たびはだし跣足で草の中を飛び廻った。三吉がくれた巻煙草まきたばこも一息に吸い尽した。千円くれると言ったら、誰かそれでも暗い処へ一日来る気は有るか、この評ひょう定じょうが囚人の間で始まった時、一人として御免を蒙こうむると答えない者はなかった。その娑婆で、彼は新しい事業を経営しつつあるのである。

直樹の父親もまた同郷から出て来た事業家であつた。この人と実兄弟とは、長い間、親戚のように往いつたり来たりした。直樹の父親の旦那だんなは、伝馬町てんまちょうの「大将」と言つて、紺暖簾こんのれんの影で采さ

配いはいを振るような人であつたが、その「大将」が自然と実の旦那でもあつた。旦那は、実の開けた穴を埋めさせようとして、更に大きく注つぎこ込んでいた。

格子戸の填はまつた、玄関のところはまに小泉商店とした看板の掛けてある家の奥で、実は狭い庭の盆栽に水をくれた。以前の失敗に懲りて、いかなる場合にも着物は木綿で通すという主義であつた。

彼の胸には種々なことがある。故郷の広い屋敷跡——山——畠——田——林——すべてそういう人手に渡つて了しまつたものは、是非とも回復せねばならぬ。祖先に対しても、又自分の名誉の為にも。それから嵩かさなり嵩かさなつた多くの負債の仕末をせねば成らぬ。

新しく起つて来た三吉が結婚の話——それも良縁と思われるか

ら、弟に勧めて、なるべく纏まとまるように運ばねばならぬ。こう思  
い耽ふけつているところへ、弟が旅から帰つて来た。

「只今ただいま」

と三吉は玄関のところから日に焼けた顔を出した。

もし正太に適当な嫁でも有つたら、こんなことまで頼まれて帰  
つて来た三吉の眼には、いかにも都の町まちなか中の住居が窮屈すまいに映つ  
た。玄関の次の部屋には、病気でブラブラしている宗蔵兄がいる。  
片隅かたすみへ寄せて乳呑児ちのみごが寝かしてある。縁側えんがわのところには、姪めいの  
お俊が遊んでいる。その次の長火鉢ながひばちの置いてある部屋は勝手に

続いて、そこには嫂あによめのお倉と二十はたちばかりに成る下女とが出たり入ったりして働いている。突当りの窓の外は直ぐ細い路地で、簾すだれ越しに隣の家の側面も見える。

夕飯時に近かった。実は長火鉢の側に膳ぜんを控えて、先ずオシキセをやりながら、三吉から橋本はしもとの家の様子を簡単に聴取きぎとった。

「木曾の姉さんからの御土産おみやげです」

とお倉はオズオズとした調子で言つて、三吉が持つて来た蜂の子の煎いり付けたのを皿に載せて出した。

実が家長としての威厳いけんは何時いつまでも変らなかつた。彼は、家の外では極きわめて円滑な人として通つていたが、家の者むかに對つては厳格過ぎる位。丁度往時むかし故郷の広い楽しい炉辺ろべたで、ややもすると嫌いや

味やみなことを言う老祖母おばあさんを前に置いて、碌ろくろく々口も利きかずに食つた若夫婦の時代と同じように、何時まで経つてもそう打解けた様子を妻に見せなかつた。

「お種さんも御変りは御座いませんか」

こうお倉は三吉に尋ねながら、弟や娘の為にも膳を用意した。

宗蔵は三吉と相さしむかい対あぐらに胡坐にやつた。「どうも胡坐をかかな

いと、食つたような気がしないネ——へえ、久し振で田舎いなかの御馳ごち走そうに成るかナ」

こんなことを言つて、細く瘠やせた左の手で肉叉ホオクや匙さじを持添えながら食つた。宗蔵は箸はしが持てなかつた。で、こういうものを買つて宛行あてがわれている。

「宗さん、不相変あいかわらずいけますね」と三吉が戯れて言った。

「不相変いけますねとは、失敬な」と宗蔵は叱るように。

「ええええ、いけるどころじゃない」とお倉は引取つて、「病人のくせに、宗さんの食べるには驚いちまう」

宗蔵は兄の前をも憚はばからないという風で、食客同様の人とも見え

なかつた。それがまた実には小癩こしゃくに触さわるかして、病人なら病人

らしくしろという眼付をしたが、口に出して何も言おうとはしなかつた。平素ふだんから実は宗蔵とあまり言葉も交さなかつた。唯――

「一家の団欒だんらん、一家の団欒」この声が絶えず実の心の底に響いていた。

食後に、三吉は番茶を飲みながら、旅の話始めた。実は娘の

方を見て、

「俊、お前の習った画を三吉叔父さんにお目に懸けないか」

こう言われて、お俊は奥座敷の方から画手本だの画草紙だのを  
持つて来た。

「お蔭様で、彼女あれも先生の御宅へ通うように成りましたよ。日曜  
々々にネ」とお倉が横から。

「へえ、蘭から習わせるネ」と三吉も開けてみて、「西洋画とは  
大分方やりかた法が違うナ——お俊ちゃんすきは好だから、必きつと描けるよう  
に成りましたよう」

「娘には反かえつてこの方が好い」と宗蔵も言った。「なに、女の  
画家えかきに成らなくたって可いいんだから」

実は娘の習った画を嬉しそうに眺めて、やがて町を散歩して来ると言つて独りひとで出て行つた。彼は弟からシミジミ旅の話などを聞こうとしなかつた。弟は話せないものと成つていた。

夫の前では言おうと思うことも言い得ないでいるお倉は、実が散歩に出て行つた後、宗蔵や三吉の談話はなしの仲間に加わつた。この三人は、実が長く家を留守にした間、互に艱難かんなんを嘗なめ尽したという心の結むすびつき合あが有る。弱いお倉、病身の宗蔵は、僅わずかに三吉を力にして、生命いのちを継つないで来たようなものだった。

「姉さんも白く成りましたね」



と三吉は嫂あによめの額ながを眺めた。お倉は髪を染めてはいるが、生際はえぎわのあたりはすこし褪さめて、灰色に凋ちようらく落して行くさまが最早隠されずにある。

「吾やど夫もね、染めるのも可いが、俺おれの見ないところで染めてくれ——なんて」と言つて、お倉は笑つて、「今からこんなお婆ばあさんに成つては、真実ほんとに心細い……私はまだお嫁さんに来た時の気分でいるのに……」

「いや、全く姉さんはお嫁に來た時の気分だ——感心だ」と宗蔵が眼で笑いながら。

「人を馬鹿にしなさんな」

とお倉はいくらか国くなま訛まりの残つた調子で言つた。この嫂は酷ひど

く宗蔵を忌嫌いみきらっていたが、でも話相手には成る。

「それはそうと、三吉さん」と宗蔵は無感覺に成った右の手を左で癖のように揉もみながら、「君の留守に大芝居サ。八王子の方の豪家という触ふれ込こみ込で、取巻が多勢随ついて、兄さんの事業しごとを見に来た男がある。なにしろ、君、触込が触込だから、是方こつちでも、朝晩のように宿舎やどやへ詰めて、話は料理屋でする、見物には案内する、酒だ、芸妓げいしやだ——そりやあもう御機嫌ごきげんの取るだけ取ったと思ひ給え。ところが、それが豪家の旦那でも何でもない。散々御取持をさせて置いて、ぷいと引揚げて行つて了しまった。兄さんも不覺だつたネ。稲垣いながきまで付いていてサ。加おまけに、君、その旦那を紹介した男が、旅費が無くなつたと言つて、吾家うちへ転ころがり込んで来る：

…その男は可哀想かわいそうだとしたところで、旅費まで持たして、発たして遣るなんて……ツ……御話にも何も成りやしないやね」

「真ほんとう実に、あんな馬鹿々々しい目に遇あつたことは無い——考えただばかりでも業ごうが煎いれる」と嫂も言った。

「僕は、君、悪にくまれ口ぐちを利くのも厭いやだと思ふから、黙つて見ていたがネ」と宗蔵は病身らしい不安な眼付をして、「この調子で進んで行つたら、小泉の家は今にどうなるだろうと思ふよ」

「例の車の方はどんな具合ですか」こう三吉が聞いた。

「なんでも、未だ工場で試験中だということですが、事業が大きい過ぎるんですもの」と嫂が言う。

「借財が大きいから自然こういうことに成つて来る」と宗蔵も考

えて、「なにしろまあ、ウマクやって貰わないことには……僕は兄さんの為に心配する……復た同じ事を繰返すように成る……留守居は、君、散々仕飽きたからね」

宗蔵は嚙返しというを為るのが癖で、一度食った物を復た口の中へ戻して、何やら甘そうに口を動かしながら話した。

では、どうすれば可いか、ということに成ると、事業家でない宗蔵や商売一つしたことの無いお倉には、何とも言ってみようが無かった。で、宗蔵は復た物事が贅沢に流れて来たの、道具を並べ過ぎるの、ああいう火鉢は余計な物だの、と細かいことを数

え立てた。嫂は嫂で、どうもこの節下女がすこしメカシ過ぎると  
いうようなことまで心配して三吉に話した。

「三吉さん、貴方あなたからよく兄さんに話して下さい」とお倉は言っ  
た。「私が何を聞いたツて、まるで相手にしないんですもの——  
事業の方のことなんか、何事なんにも話して聞かせないんですもの」

「道具だつてもそうだ」と宗蔵は思出したように、「奥の床の間  
を見給え、文晁ぶんちようのイカモノが掛かつてる。僕ならば友達ともの書  
いた物でも可いからホンモノを掛けて楽むネ」こう言つて、何も  
かも不平で堪たえられないような、病人らしい、可傷いたましい眼付をし  
た。「僕に言わせると、ここの家の遣方やりかたは丁度あの文晁だ……  
皆な虚偽うそだ……虚偽の生活くらしだ……」

あまり宗蔵が無遠慮な悪口をつき始めたので、お倉は夫の重荷を憐むあわれような口調に成つて行つた。

「そう宗さんのように坊さんみたようなこと言つたつて……何も交際つきあいの道具ですもの……もともと有つて始めた事業じゃないんですもの……贅沢だ、贅沢だと言う人から、すこし考えてくれないくちや——こんな御菜おかずじゃ食われないの、何のツて」と言つてお倉は三吉の方を見て、「ねえ三吉さん、兄さんにお刺身を取つたつて、家の者に附けない時は有りまさあね」

「食わないのは、損だから……」

こう宗蔵は捨鉢すてばちの本性を顕あらわして、左の手で巻煙草を吸付けた。

その時、「三吉さん、御帰りだそうですね」と声を掛けながら、格子戸を開けて入って来た人があった。この人は稲垣と言つて、近くに家を借りて、実の事業を助けている。

「今ね、家へ歸つて、飯を一ぱいやつてそれから出て来ました」と稲垣は煙草入を取出した。「三吉さんが御帰りなすつたと言うから、それじあ一つ見て来ようと思ひまして——今日は工場へ行く、銀行を廻るネ、おおいそがし 大多忙」

「どうも毎日御苦勞様で御座います」とお倉が言う。

「いえ、姉さんの前ですけれど」と稲垣は元氣よく、「これで車が一つガタリと動いて御覽なさい、それこそ大變な話ですぜ——万や二万の話じゃ有りませぬ。私なぞは、どうお金を使用つかおう

かと思つて、今からそれを心配してる」

「ほんと真実に稲垣さんは御話がウマイから」とお倉は笑つた。

「まあ、君なぞはそんな夢を見ていたまえ」と宗蔵も笑つて、

「時に、稲垣君、この頃はエライ芝居を打つたネ」

「え……八王子の……あの話は最早もしツこなし」と稲垣は手を振る。

「実は、今、あの話を三吉さんにしましたところですよ」とお倉は力を入れて、「何卒どうぞまあ事業しぎの方も好い具合にまいりますと……」

「姉さん、そんな御心配は……決して……実兄さんという人がちやんと付いてます」



この稲垣の調子は、何処どこまでも実に信頼しているように聞えた。それにお倉は稍々やや力を得た。

娘のお俊は奥座敷の方へ行つて独りひとで何かしていたが、その時母の傍へ来た。この娘は、髪も未だそう黒くならない年頃で、鬢びんのあたりは殊ことに薄かった。毎朝びなんかずら美男葛ときつで梳付けて貰つて、それから学校へ行き行きしていた。

「お俊ちゃん、毎晩画を御習いですか」と稲垣はお俊の方を見て、「此頃こないだ習つたのを見て、驚いちまいました。どうしてああうまく描けるんでしょう」

「可笑おかしいんですよ」とお倉も娘の顔を眺めながら、「田舎娘だなんて言われるのが、どの位厭だか知れませんか——それを言われ

ようものなら、プリプリ怒つて了います」

「よくツてよ」とお俊は母の身体を動ゆすぶるようにする。

「私の許とこの娘もね」と稲垣はそれを言出さずにいられなかった。

「お俊ちゃん画をお習いなさるといふから、西洋音楽でも習わせようかと思ひまして……ピアノでも……ええ、三味線しやみせんや踊を仕込むよりもその方が何となく高尚ですから……」

稲垣の話は毎いつでも時自分の娘のことに落ちて行つた。それがこの人の癖であつた。

「どれ程稲垣は娘が可愛いか知れない」と宗蔵は稲垣の出で行つた後で言つた。「あの男の御世辞と来たら、堪こたえられないようなことを言うが……しかし、正直な男サ」

宗蔵と三吉との年齢としの相違ちがひは、三吉と正太との相違であつた。この兄弟の生涯は、喧嘩けんかと、食物くいものの奪合と、山の中の荒い遊戯あそびとで始まつたやうなもので。実に引連れられて東京へ遊学に出た頃は、未だ互に小学校へ通う程の少年であつた。丁度それは二番目の兄の森彦が山林事件の総代として始めて上京して、当時流行はやつた狍虎らっこの帽子を冠りながら奔走した頃のこと。その後、宗蔵の方は学校からある紙問屋へ移つた。そこに勤めている間、よく三吉も洗濯物を抱かかえて訪ねて行くと、盲目めくらじま縞の前垂を掛けた宗蔵がニコニコして出て来て、蕙こもづつみ包の荷物ものの置いてある店の横

で、互に蔵の壁に倚より凭かかりながら、少年らしい言葉を取換とりかした。

「宗様、宗様」と村中の者に言われて育つて来た奉公人の眼中には、大店おおだなの番頭もあつたものではなかつた。何か気に喰くわぬことを言われた口惜くやしまぎれに、十露盤そろばんで番頭の頭をブン擲なぐつたのは、宗蔵が年季奉公の最後の日であつた。流浪はそれから始まつた。

横浜あたりで逢あつたある少婦おんなから今の病氣を受けたという彼の血氣さか壯かんな時代——その頃から、不自由な手足を提げて再び身内の懐ふところへ歸つて来るまで、その間どういふ暗い生涯を送つたかということとは、兄弟ですらよく知らない。母がまだ壯健たつしやでいる時、

「宗蔵の身体には梅の花が咲いた」などと戯どれて、何卒どうかして宗蔵の面倒を見て死にたい、と言いとおした。彼も今では、「三吉さ

ん」とか、「オイ、君」とか話しかけて、弟より外に心を訴えるものの無い人である。

三吉が帰った翌日、あくるひ宗蔵は一夏の間の病苦を聞いて貰おうと

思つて、先ず弟の旅の獲物えものから尋ねた。三吉は橋本の表座敷で木

曾川の音を聞きながら書いた物を出して、宗蔵に見せた。一くさ

り、宗蔵は声を出して読んでみた。そして、「兄弟中で文学の解

るものは、君と僕だけだよ」という心こころもち地を眼で言わせて、や

がて部屋の片隅かたすみに置いてある本箱の方へ骨と皮ばかりのような

足を運んだ。

床の間には、父忠寛と同時代の人で、しかも同村に生れた画家えかき

の遺した筆のこが古風な軸に成つて掛つている。鳥を飼う支那風の人

物の画である。その質素な色いろどり彩といかにも余念なく餌をくれて  
いる人物の容子ようすとは、田舎にあつた小泉の家に適ふさわわしいものであ  
る。

宗蔵は三吉が留守の間に書溜かきためた和歌の草稿を取出して、それ  
を弟の前に展ひろげた。

「三吉さんとはすこし時代が違うが、僕はまた一夏かかつて、こ  
ういうものを作りましたよ。一つ批評して貰おう。君は木曾のよ  
うな涼しい処に居たから好いサ——僕のことを考えてみ給え、こ  
んな蒸暑い座敷で、汗をダラダラ流して……今年の夏は苦しかつ  
たからね」

こう言つて、自分の書いた歌を弟に読み聞かせた。三吉は、こ

の兄の歌そのものより、箸はしも持てないような手で筆を持添えて、それを口に銜くわえて、ぶるぶる震えてまでも猶腹なおなかの中にあることを言表わそうとしたその労苦を思いやった。廃残の生涯とは言いながら、何か為せずには宗蔵もいられなかつた。彼は病人に似合わな  
い精力を有もつていた。手足は最早枯れかかつて来ても、胴のあたりは大木の幹のように強かつた。病氣しても人一倍食うという宗蔵の憂愁うれいを遣るものは、僅かにこの和歌である。読み聞かせているうちに、痛憤とも、悔悟とも、冷笑とも、名の付けようの無い光を帯びた彼の眼から——ワンと口を開いたような大きな眼から、絶間とめどもなく涙が流れて来た。

「つくづく君の留守に考えたよ」と宗蔵は手拭てぬぐいを取出して、汗でも出たように顔中拭ふきまわ廻まわした。「今年の夏ほど僕も種いろいろ々なことを思つたことはないよ。アア」

「そんなに苦しかつたんですかね」と三吉も宗蔵の顔を眺ながめた。

「木曾に居ても随分暑い日は有りました——東京から見ると朝晩は大変な相違ちがひでしたが」

「いや、暑いにも何にも。加おまけに風通しは悪いと来てる。僕などはあの窓のところ横に成つてサ、こう熟じつと身体を動かさずにいたこともあつた。そうすると、君、阿爺おやしのことが胸に浮んで来る……母親おつかさんのことも出て来る……」



冷い壁の下の方へ寄せて、隅すみのところに小窓が切つてある。その小窓の側が宗蔵の病びょうく軀を横える場処である。

宗蔵は言葉を継いだ。「阿爺と言えば、阿爺の書いた物を大分君の留守に調べたよ。それから僕の持つてる書籍ほんで、君の参考になるだろうと思うようなものも、可かな成有るよ。ああいうものはいずれ君の方へ遣ろう。君に見て貰おう」

部屋の前は、山茶花さざんかなどの植えてある狭い庭で、明けても暮れでも宗蔵の眺める世界はこれより外は無かつた。以前には稲垣あたりへよく話しに出掛けたものだが、それすら煩うるさく思うように成つた。彼の許ところへと言つて別に訪ねて来る人も無かつた。世間との交りは全く絶え果てた形である。

町の響が聞える……

宗蔵は聞入つて、「三吉さん、君だからこんな話をするんだが、僕だつて、君、そう皆なから厄介者に思われて、ここの家に居たく無い。ことしの夏は僕もつくづく考えた……三四日ばかり何物なんにも食わずにいてみたことも有つた……しかし人間は妙なものさね、死のうと思つたツて時が来なければ容易に死ねる訳のものでは無いね……」

こんなことを、さもさもあたりまえ尋常あたらの話のように宗蔵が言出した。まるで茶でも飲み飯でも食うと同じように。

「どうかすると、『宗さんは御変りも御座いませんか』なんて、いかにも親切らしく言つてくれる人がある。あれは君、『へえ未

だ生きてますか』というと同じことだ。僕の兄弟は、皆な——僕が早く死ねば可いいと思つて待つてる。ははははは。食わしてくれれば食うし、食わしてくれなければそれまでサ」

復また例の調子が始まつた、と三吉は思つた。

この小泉の家の内の空気は、三吉に取つて堪えがたく思われた。格子戸こうしどを開けて、空を見に出ると、ついそこが町の角にあたる。

本郷から湯島へ通う可かなり成広い道路が左右ひらに展ひらけている。

橋本から写真の着いた日は、実は用よう達たしに出た家になかつたが、その他のものは宗蔵の部屋に集まつて眺めた。稲垣の細君は

亭主と言合つたとかで、平素いっそもに似合わない元気の無い顔をして来ていた。めずらしい写真が来た為に、何時いつの間にかこの細君も其方へ釣込まれた。

「まあ、それでも、橋本の姉さんは父親おとつさんに克よく肖にて来ましたこと」とお倉が思わず言出した。

宗蔵も眺め入って、「成なるほど程、阿爺にソツクリだ」

「姉さんはそんなコワイ顔じゃ有りませんがね——こうして見ると、阿爺が出て来たようです」と三吉も言った。

お種の写真顔は、沈ちんうつ鬱うつな、厳肅な忠寛の容貌おもぼせをそのまま見るように撮とれた。三吉の眼にも、木曾で毎日一緒に居た姉の笑顔を見るような気がしなかった。

「達雄さんもフケましたね」と復たお倉が言った。

「おばさん、御覧なさい」とお倉は稲垣の細君に指して見せて、

「達雄さんと姉さんとはおないどし同年齡の夫婦なんですよ」

「へえ、木曾の姉さんはこういう方ですか」と細君も横から。

「正太さんはすこし下を向き過ぎましたね。お仙ちゃんが一番よく撮れました」とお倉が言う。

「どうしても、無心だで」こう宗蔵はつけた附添した。

三吉は、達雄の傍にいる大番頭が特に日蔭の場所をえら択んだことを言つて笑つた。嘉助のはげあたま禿頭は余計に光つて撮れた。大きな石の多い庭、横手に高く見える蔵の白壁、日の映つたあた傾斜の一部

——この写真に入った光景ありさまだけでも、田園生活の静かさを思わ

せる。

「こういう処で暮したら、さぞ暢のんき気で宜よう御座んしょうね——お金でも有つて」と稲垣の細君が言った。「何卒どうか、まあ皆さんに早く儲もうけて頂いて……」

「真実ほんとに、今のような生活くらしじゃ仕様が有りません……まるで浮いてるんですもの……」

こうお倉も嘆息した。

ふるさと

故郷ふるさとにあつた小泉の家——その焼けない前のことは、何時までもお倉に取つて忘れられなかつた。橋本の写真を見るにつけても、彼女はそれを言出さずにいられなかつた。三吉は又またたこの嫂まの話こゝろを聞いて、旧ふるい旧ふるい記憶を引出されるような気がした。門の

内には古い椿つばきの樹が有つて、よくその実で油を絞つたものだ。大名を泊める為に設けたとかいう玄関の次には、母あにや嫂よめの機はたを織る場所に使用つかつた板の間もあつた。広い部屋がいくつか有つて、そこから美濃みのの平野が遠く絵のように眺められた。阿爺おやじの書院の前には松、牡丹ぼたんなども有つた。寒くなると、毎朝家のものが集つて、土地の習慣として焼たての芋焼餅いもやきもちに大根おろしを添えて、その息の出るやつをフウフウ言つて食い、夜に成れば顔ほての熱ほてるような火を焚たいて、百姓しじの爺ぢが草履ぞうりを作りながら、奥山で狐きつね火びの燃える話などをした、そういう楽しい炉辺もあつた。

小泉の家の昔を説出した嫂は、更にずっと古いことまで覚えていて、それを弟達に話し聞かせた。嫂に言わせると、幾百年の前、故郷の山村を開拓したものは兄弟の先祖で、その昔は小泉の家と、問屋と、峠のお頭かしらと、この三軒しかなかった。谷を耕地に宛あてたこと、山の傾斜を村落に択んだこと、村民の為に寺や薬師堂を建こんりゅう立りゅうしたこと、すべて先祖の設計に成ったものであつた。土地の大半は殆ほとんど小泉の所有と言つても可い位で、それを住む人に割さき与えて、次第に山村の形を成した。お倉くらが嫁かたづいて来た頃ですら、村の者が来て、「旦那、小屋を作るで、林の木をすこしおくんなんしよや」と言えば、「オオ、持つて行けや」とこの調子で、毎年の元旦には村民一同小泉の門前に集つて先ず年始を言入れた



ものであった。その時は、祝の餅、酒を振舞った。この餅を搗つくだけにも、小泉では二晩も三晩もかかつて、出入りの者がその度に集つて来た。「アイ、目出度いのい」——それが元日村の衆への挨拶あいさつで、お倉は胸を突出しながら、その時の父や夫の鷹揚おうような態度を真似まねて見せた。

この「アイ、目出度いのい」は弟達を笑わせた。

「真実ほんとに、有る物は皆な分けてくれて了つたようなものですよ」とお倉は思出したように、「それが旧むかしからの習慣で……小泉の家はそういうものと成つていましたから……吾夫やどもね、それも未だ少壮わかい時に、どうしてもこうでも小泉の旦那に出て貰わなければ、村が治まらないなんて言われて、村長にまで引張り出されたこと

が有りましたよ。あの時だつて、村の為に自分の物まで持出してサ……父親おとつさんは又、癩かんの起る度に家を飛出す。峠の爺を頼んで連れて来て貰うたつて、お金でしょう。何なんたび度にか山や林を売りました。所詮とてもこれではヤリキレないと言つて、それから吾夫やどが郡役所などへ勤めるように成つたんです。事業に手を出し始めてからだつても、そうですよ。一度でも自分に得したことは無い……何時いつでも損ばかり……苦しいもんですから種々な人を使用つかう氣に成る、そうしちや他の分ひとまで皆な自分で背負込んで了う……それを思うと、私は吾夫やどが氣の毒にも成つてサ」

思わず嫂は弟達や稲垣の細君を前に置いて話し込んだ。

「そうだ——自分に得したことの無い人だ」と三吉も言つてみた。

その日は宗蔵も珍しく機嫌よく、身体の不自由を忘れて、嫂の物語に聞<sup>きき</sup>惚<sup>ぼ</sup>れていた。実が刑余の人であるにも関<sup>か</sup>わらず、こういう昔の話が出ると、弟達は兄に対して特別な尊敬の心を持った。

主人の実は屋外<sup>そと</sup>から帰つて来た。続いて稲垣も入つて来た。夫の声<sup>こゑ</sup>が格子戸のところ<sup>ところ</sup>で聞えたので、急に稲垣の細君は勝手の方へ隠れて、やがて娘のことを案じ顔に裏口からコソコソ出て行つた。

「家内は御宅へ参りませんでしたか」と稲垣は縁側から顔を出して尋ねた。

「ええ、今し方まで……」とお倉は笑いながら答える。

「オイ、稲垣君、君は細君を掃出<sup>はきだ</sup>したなんて——今、細君が愁<sup>い</sup>つ

訴けに来たぜ」と宗蔵も心やすだてに。

「いえ——ナニ——」と稲垣は苦にが笑わらいして、正直な、気の短か

そうな調子で、「少しばかり衝突してネ……彼女あいつは口惜くやし紛まぎれこうにがい笄がいを折ちまやがった……馬鹿な……何処の家にもよくあるやつだが……」

「子供こどもが有るんで持ったものですよ」とお倉は慰め顔に言つて、寂えみしみような微笑を見せた。

木曾の姉からの写真を見た後、実は奥座敷へ稲垣を呼んで、銀行の帳簿を受取ったり、用向の話をしたりした。

稲垣は出て行つた。実は更に三吉を呼んで、弟の為に結婚の話を始めた。

三吉も結婚期に達していた。彼の友達の中には、最早子供のある人も有り、妻を迎えたばかりの人も有り、婚約の定まつた人も有つた。大島先生という人の勧めから始まつて、彼の前にも結婚の問題が起つて来た。その縁談を実が引取て、大島先生と自分との交渉に移したのである。

三吉の過去は悲惨で、他の兄弟の知らないような月日を送つたことが多かつた。実が一度失敗した為に、長い留守を引受けたのも彼が少壮な時からで、その間幾多の艱難を通り越した。ある時は死んでも足りないと思われる程、心の暗い時すらあつた。

僅かに夜が明けたかと思う頃は、辛酸を共にした母が亡くなつた。彼には考えなければ成らないことが多かつた。

大島先生から話のあつた人は、六七年前、丁度十五位の娘の時のことを三吉も幾分か知っており、嫂は又、その頃房州の方で一夏一緒に居たことも有つて、大凡氣心は分つていたが、なにしろ三吉のような貧しい思をして来た人ではなかつた。彼は負債も無いかわりに、財産も無い。再三彼は辞退してみた。しかし大島先生の方では、一書生に娘を嫁かせようという先方の親の量見をも能く知っているとのことで、「万事俺が引受けた」と実はまた呑込顔でいる。こんな訳で、三吉はこの縁談を兄に一任した。「お雪さんなら、必と好かろうと思ひますよ」とお倉もそこへ来

て、大島先生から話のあつた人の名を言つて、この縁談に賛成の意を表した。

「なにしろ、大島先生の話では、先方さきの父親おとつさんが可愛がつてる娘こだそうだ」と実も言つた。「俺はまあ見ないから知らんが、父親さんに気に入る位なら必ず好かろう」

「私は能く知つてる」とお倉は引取て、

「脚かっけ気で房州の方へ行きました時に、あの娘こと、それからもう一人同おないどしぐらい年齢位な娘と、学校の先生に連れられて来てしまして一月程一緒に居ましたもの——尤もつともあの頃は年もいかないし、御友達と一緒に貝を拾つて、大騒ぎするような時でしたがね——あの娘なら、私が請合う」

「それに、大島先生があゝの娘の家へ行つて泊つてたことも有るそ  
うだ」と復また実が言つた。「その時話が出たものだろう。父親さ  
んという人が又余程變つてゐるらしいナ」

こう実は種いろいろ々と先方の噂うわさをして、「三吉も、それでもお嫁さ  
んを貰うように成つたかナア——早いものだ」などと言つて笑つ  
た。実が前垂掛あぐらで胡坐あぐらにやつてゐる側には、大きな桐きりの机が置い  
てあつて、その深い抽ひきだし斗だしの中に平常いつも小使が入れてある。お倉は  
夫の背後うしろへ廻つて要いるだけの錢の音をさせて、やがて用事ありげ  
に勝手の方へ出て行つた。

「宗さんを措おいて、僕が家を持つのも變なものですネ」と三吉は  
言出した。



「あんな者はダチカン」と実は思わず国の言葉を出した。「どれ程俺が彼あれに言つて聞かせて、貴様は最早死んだ者だ、そう思つておとな温順しくしておれ、悟さとを開いたような気分でおれツて、平常しよつちゆう言うんだが……それが彼には解らない」

「どうしてあんな風に成つちまつたものですかナア」

「放蕩ほうとうの報酬むくいサ」

「余程質たちの悪い婦女おんなにでも衝突ぶつつたものでしようカナア」

「皆な自分から求めたことだ。それを彼が思つたら、もうすこし閉口しておらんけりや成らん。土台間違つてる……多勢兄弟が有ると、必きつとああいくずう屑くずが一人位は出て来る……何処どこの家にもある」

宗蔵の話が出ると、実は口唇くちびるを嚙かんで、ああいう我儘わがままな、

手数の掛る、他所よそから病気を背負つて転がり込んで来たような兄弟は、自分の重荷に堪えられないという語気を泄もらした。そればかりではない、実が宗蔵を嫌い始めたのは、一度宗蔵が落魄らくはくした姿に成つて故郷の方へ歸つて行つた時からであつた。その頃は母とお倉とで家の留守をしていた。お倉は未だ若かつた。

「兄弟に憎まれれば、それだけ損だがナア」と実は嘆息するよう  
に言つた。「いずれ宗蔵の為には、誰か世話する人でも見つけて、  
其方そっちへ預けて了おうと思う——別にでもするより外に仕様のない  
人間だ」

三吉も書生ではいられなくなつた。家を持つ準備したくをする為には、定きまつた収入のある道を取らなければ成らなかつた。彼は学校教師の口でも探すように余儀なくされた。

ある日、実は弟に見せる物が有ると言つて、例の奥座敷へ三吉を呼んだ。

「三吉さん——私もすこし兄さんに御話したいことが有る。御手間は取らせませんから、先へ私に話させて下さいな」

こう稲垣の細君が来て言つて、三吉と一緒に実の居る方へ行つた。実は直に細君の用事ありげな顔付きを看みて取つた。

稲垣の細君は何遍か言い淀よどんだ。「そりやもう、皆さんの成さる事業ことですから、私が何を言おうでは有りませんが……何時まで

待つたら験けんが見えるというものでしょう。どうも吾夫やどの話ばかりでは私に安心が出来なくて……」

「ああ、車の方の話ですか」と実はコンコン咳せきをした後で言った。「ちやんと技師に頼んで有りますからね。そんな心配しなくても、大丈夫」

「いえ——吾夫やどでも、小泉さんに御心配を掛けては済まない、そのかわり儲もうけさして頂く時には——なんて、そう言い暮くしましてね。実際吾夫やども苦しいもんですから、田舎から出て来た母親おつかさんを欺だますやら、泣いて見せるやら、大芝居をやらかしているんですよ」

「お金の要ることが有りましたら、稲垣さんにもそう言って置き

ましたが——銀行に預けて有りますからね」

「そう言つて頂けば私も難ありがた有たいんですけれど……でも、何んとか前途さきの明りが見えないことには……何処まで行けばこの事業しごとが物に成るものやら……」と言つて、細君は不安な眼付をして、

「私がこんなことを言いに来たなんて、吾夫に知れようものなら、それこそ大叱責おおしかられ——殿方と違つて女というものはとかくこういうことが氣に成るもんですよ」

稲垣の細君は実の機嫌そこを損ねまいとして、そう煩うるさくは言わなかつた。お俊の噂、自分の娘のことなどを少し言つて、やがてお倉の居る方へ起たつて行つた。

実の机の上には、水引を掛けるばかりにした祝の品だの、奉書

に認め<sup>したた</sup>た書付だのが置いてあつた。兄は先方へ贈るように用意した結納<sup>ゆいのう</sup>の印を開けて弟に見せた。

「どうだ——大島先生から届けて貰うようにと思つて、こういう帯地を見立てて来た——縹<sup>しゅちん</sup>珍だ」

「こんな物でなくつても可かつたでしょうに」と三吉は言つてみた。

「兄貴が附いてて、これ位のことが出来ないでどうする——俺の体面<sup>かか</sup>に関わる」と実の眼が言つた。

三吉は兄に金を費<sup>つか</sup>わせることを心苦しく思つた。結婚<sup>したく</sup>の準備もなるべく簡単にしたい、借金してまで体裁をつくろう必要は無い、と思つた。小泉実はそれでは済まされなかつた。

お俊も小学校の卒業に間近く成って、これから何処の高等女学校へ入れたら可よかろうなどと相談の始まる頃には、三吉の前にも二つの途みちが展ひらけていた。一つは西京の方に教師の口が有った。一つは往時むかし英語を学んだ先生から自分の学校へ来てくれないかとの手紙で、是方は寂しい田舎ではあり、月給も少かった。しかし三吉は後の方を択んだ。

春の新学期の始まる前、三吉は任地へ向けて出発することに成った。仙台の方より東京へ帰るから、この田舎行の話があるまで——足掛二年ばかり、三吉も兄の家族と一緒に暮してみた。復た彼は旅の準備したくにいそがしかった。彼は小泉の家から離れようとした。別に彼は彼だけの新しい粗末な家を作ろうと思ひ立った。

## 四

三吉は発<sup>た</sup>つて行つた。一月ばかり経つて、実は大島先生からの電報を手にした。名倉の親達は娘を連れて、船に乗込む、とある。名倉とは、大島先生が取持とうとする娘の生家<sup>さと</sup>である。

「来る来るとは言つても、この電報を見ないうちは安心が出来なかつた。先<sup>ま</sup>ず好かつた——実に俺<sup>おれ</sup>は心配したよ」

こう実はお倉を奥座敷へ呼んで言つて、早速稲垣をも呼びにやつた。稲垣は飛んで来た。

「へえ、名倉さんでは最早<sup>も</sup>御発<sup>ち</sup>に成つたんですか。船やら——



汽車やら——遠方をやつて来るなんて容易じや有りません」

と稲垣も膝を進める。賑かな笑声は急に家の内に溢れて来た。

実の机の上には、何処の料理店で式を挙げて、料理は幾品、凡そ幾人前、酒が幾合ずつ、半玉が幾人、こう事細かに書いた物が用意してあつた。

「時に、銚子を持つ役ですが」と実は稲垣の方を見て、「君の許の娘を借りて、俊と、二人出そうと思いましたがね、それも面倒だし……いっそ雛妓を頼むことにしました」

「その方が世話なくて好い」とお倉が言葉を添える。「雄蝶、雌蝶だなんて、娘達に教えるばかりでも大変ですよ」

「いや、そうして頂けば難有い」と稲垣も言った。「実は吾家

でもその事で気を揉もんでいました。それから式へ出るのは、私だけにして下さい。簡単。簡単。皆そろ揃そろつて押出すのは、大もに儲もうけた時のことにしましょう——ねえ、姉さん」

「真ほん実に、そうですよ」とお倉ほほえは微笑ほほえんで、「私なんか出たくも、碌ろくな紋付も持たない」

「まあ、姉さんのように仰おつしやるものじゃ有りません」と言つて、稲垣は手を振つて、「出たいと思えば、何程いくらでも出る方法は有りませんがね——隣の娘なんか借着で見合をしましたあね、御覧なさい、それをまた損料で貸して歩く女も居る——そういう世の中ですけれど、時節というものも有りますからね」

「簡単。簡単」と実も力を入れて命令するように言つた。

稲垣は使に出て行つた。料理屋へは打合せに行く、三吉の方へは電報を打つ、この人も多忙いそがしい思いをした。その電報が行くと直ぐ三吉も出て来る手筈てはずに成つていた。

「宗蔵は暫時しばらく稲垣さんの方へ行つておれや」

と兄に言われて、宗蔵も不承々々に自分の部屋を離れた。彼は、不自由な脚あしを引摺ひきずりながら、稲垣の家の方へ移されて行つた。

婚礼の日は、朝早く実も起きて庭の隅々すみずみまで掃除した。家の

内も奇麗に取片付けた。奥座敷に並べてある諸道具は、丁寧に鳥

毛の塵ちりほらい払いをかけて、机の上から箆たんす茶戸ちやとどな棚まで、自分の気

に入つたように飾つてみた。火鉢ひばちの周圍まわりには座蒲団ざぶとんを置いた。煙た

草盆ばこぼん、巻煙草入、灰皿なども用意した。こうして、独りひとで茶を

入れて、香の薫かおりに満ちた室内を眺め廻した時は、名倉の家の人達  
 が何時いつ来て見ても好いと思つた。床の間に飾つた孔雀くじやくの羽の色  
ろどり彩は殊ことに彼の心を歡よろこばせた。

弟の森彦からも、三吉の結婚を祝つて来た。その手紙には、自  
 分は今旅舎住居やじやずまいの境遇であるから、式に出ることだけは見合せる、  
 万事兄上の方で宜敷よろしく、三吉にも宜敷、としてあつた。

「貴方、俊の下駄げたを買つて来ました——見てやって下さい」  
 こう言つて、お倉は娘と一緒に買物から歸つて来た。

「どれ、見せろ」と実は高い表付の赤く塗つた下駄を引取つた。

「こんな下駄を穿はかして、式に連れて行かれるものか。これは、  
 お前、雛妓おしやくなぞの穿くような下駄だ」

「だって、『母親おつかさん、これが好い、これが好い』ツて、あの娘が聞かないんですもの」とお倉が言う。

「親が附いて行つて……こんなものはダチカン……鈴の音のしなやかな、塗つて無いのが好い。取替えて来い」と実は叱るように言つた。

「私も、そうも思つたけれど」とお倉は苦にが笑わらいしながら。

「母親さん、取替えて来ましようよ」と娘は母の袂たもとを引いた。

生なまめ、殖ふせ、小泉の家と共に栄えよ——この喜よろこ悦びは実が胸に満ち溢れた。彼は時の経つのを待兼ねた。遠方から着いた名倉の母、兄などは、先まず旅やど舎やで待つということ、実と稲垣とは約束の刻限に其方へ向けて家を出た。

丁度、お倉の實の姉のお杉も、手伝いながら来て、掛っている頃であつた。このお杉の他に、稲垣の細君もやって来て、二人してお俊の為に晴の衣裳を着せるやら、帯を〆《しめ》させるやうした。直樹の老祖母おばあさんも紋付を着てやって来た。目出度めでたい、目出度、という挨拶は其処そこにも此処ここにも取換とりかわされた。田舎いなかの方から引返して来た三吉は、この人達と一緒に、料理屋を指して出掛けた。日暮に近かつた。

一同出て行つた後、家に残つた人達は散乱ちらかつた物を片付けるやら、ざつと掃除をするやらした。その晩は平常いつもより洋燈ランプの数を多

く点けて、薄暗い玄関までも明るくした。急に家の内は改まったように成った。

「今晚は」

と稲垣の娘も入って来て、母親と一緒に成った。お杉、お倉なども長火鉢の周圍まわりに集った。

稲垣の細君は起たつて行つて、次の部屋に掛けてある柱時計を眺ながめて、それから復また娘の側へ戻った。

「最早それでも皆さんは料理屋の方へ被入いらしつたでしよつか」と稲垣の細君が言つてみた。

「どうして、おばさん、未だナカナカですよ」とお倉は笑つて、

「名倉さんの旅舎やじやで御酒が出るんですもの。散さんざん々あすこ彼処で祝つて、

それからでなければ——」

「丁度今頃は御酒の最中だ」とお杉も言った。

「名倉さんの方では母親おつかさんと兄さんと附いていらしつたんですツてね。必きつとまた吾家うちの阿爺おやしが喋舌しゃべつていましようよ。遠方から来た御客様をつかまえて、ああだとか、こうだとかツて——しかし、母親さんも御大抵じや有りませんね、御嫁さんの仕度から何から一人で御世話を成さるんじや……」

こう稲垣の細君が言うのと、娘は母に倚より凭かかりながら、結婚ということを想像してみるような眼付をしていた。

部屋々々の洋燈は静かに燃とほつた。お倉は一つの洋燈の向うに見える丸蓋まるがさの置洋燈の灯を眺めて、



「私なぞも小泉へ嫁かたづいて来る時は——真実ほんとに、まあ、昔話のよう  
に成つて了しまつた——最早親の家にも別れるのかと思つて、ちよつ  
と敷居を跨またぐと……貴方あなた、涙がボロボロと零こぼれて……」

稲垣の細君も思出したように、「誰でもそうですよ、あんな哀かな  
しいことは有りませんよ」

「もう一度私もあんな涙を零してみたい——」とお杉も笑つて、  
乾いた口唇を濡うるすようにした。「アアアア、こんなお婆さんに成  
つちや終おしまい……年を拾うばかりで……」

「厭いやだよ、この娘こは——ブルブル震えてサ」と稲垣の細君は娘の  
顔を眺めて言つた。

「何だか小母おばさんの身体まで震えて来た」

こうお杉は細君の手から娘を抱取るようにして笑った。

静かな夜であった。上野の鐘は寂しんとした空気に響いて聞えて来た。留守居の女達は、楽しい雑談に耽ふけりながら、皆なの帰りを待っていた。

柱時計が十時を打つ頃に成つて、一同車で帰つて来た。急に家の内は人で混雑ごたごたした。

「どうも名倉さんの母親おつかさんには感心した。シツカリしたものだ」  
こう実と稲垣とは互に同じようなことを言った。復た酒が始まった。その時、三吉の妻は家の人々や稲垣の細君などに引合ひあわされた。

「お俊ちゃん、叔母さんが一人増えたことね」と稲垣の娘が言っ

た。

「ええ、そうよ、お雪叔母さんよ」とお俊も笑った。

「稲垣さん、種々いろいろ御尽力で難有ありがとう御座いました」と実は更に盃を差した。

「酒はもう沢山」と稲垣は手を振って、「今夜のように私も頂いたことは有りません」

「こんな嬉しいことは無い」と実は繰返し言つた。「私一人でも今夜は飲み明かさなくちや成らん」

「三吉——宗蔵はお前の方へ頼む。今度田舎へ行く序ついでに、是非一

緒に連れてツてくれ」

こう実は、婚礼のあつた翌日、三吉に向つて茶話のように言出した。

巢を造るか造らないに最早もうこういう難題が持上ろうとは、三吉も思いがけなかつた。お杉やお倉ですら持もて余あましている宗蔵だ。

その病人の世話が、嫁かたづいて来たばかりのお雪に届くであろうか、おぼつか覚束なかつた。実の頼みは、茶話のようで、その実無理にも強しいるような力を持っていた。とにかく、三吉は田舎へ発つまでに返事をすることにした。

一方に学校を控えていたので、そう三吉もユツクリする余裕は無かつた。不取敢とりあえず、森彦、宗蔵の二人の兄に妻を引合せて行き

たいと思つた。

名倉の母達が泊っている宿からは、柳行李やなぎごうりが幾個いくつも届いた。

「まあ、大変な荷物だ」と稲垣も来て言つて、仮にそこへ積重ねてくれた。

稲垣の家は近かつた。三吉はお雪を連れて、その方に移されていた宗蔵を訪ねた。この病人の兄は例の縮ちぢかまつたような手を揉もんで、「遠方から御苦労様」という眼付をして、弟の妻に挨拶あいさつした。

「宗さんには逢あつた。これから森彦さんの許ところだ」と三吉は稲垣の家を出てから言つた。

「その兄さんは何を為なさる方ですか」こうお雪が聞いた。

長いこと森彦は朝鮮の方に行っていた。東亜の形勢ということに眼を着けて、その間種々な方面の人に知己の出来たことや、時には貿易事業に手を出したことなどは、大体の輪廓だけしか身内の者の間に知られていなかった。それから帰って来て、以前尽力した故郷の山林事件の為に、有志者を代表して奔走を続けている。この兄は、一平民として、地方の為に働きつつあるとは言える。しかし、何——屋とか、何——者とか、一口に話せないような人であった。

「まあ、俺おれと一緒に行って、逢ってみるが可い」

三吉はこんな風に言ってみた。

森彦の旅舎やどやへは、お俊も三吉夫婦に伴われて行った。二階の座

敷には熊の毛皮などが敷いてあつて、窓に寄せて、机、碁盤ごばんの類が置いてある。片隅かたすみに支那鞆かばんが出してある。室内の心こころもち地ちよく整頓せいとんされた光景さまを見ても、長く旅舎住居をした人ということが分る。

「よく来てくれた。私は兄貴ところの許へ手紙を遣やつて置いたが、名倉さんにもお目に懸からなくて失礼しました。今日は一つ、皆なに西洋料理でも御馳走ごちそうしよう」こう森彦は言つて、茶盆を取出して置いて手を鳴らした。

「何か御用で御座いますか」と宿の内儀かみさんが入つて来た。

「ヤ、内儀おかみさん、これが弟の嫁です」と森彦はお雪を紹介した。

「時に、何か甘い菓子を取りに遣やつて下さい」

「では、僕も巻煙草を頼もう」と三吉が言った。

「三吉はえらく煙草を燻ふかすように成ったナ」と森彦はすこし顔をシカめた。この兄は煙草も酒もやらなかつた。

昼食ひるには、四人で連立つて旅舎を出た。森彦は弟達をある洋食屋の静かな二階へ案内した。そこで故郷の方に留守居する自分の家族うわさの噂をした。

森彦にも遇あわせた。三吉は更に、妻の友達にも、と思つて、二人おんなの婦人の知しりびとを紹介しようとした。お雪も逢つてみたいと言う。で、順にそういう人達の家を訪問することにした。



暮れてから、三吉は曾根そねという家の方へお雪を連れて行つた。

曾根は、お雪が学校時代の友達の叔母にあたる人で、姉の家族と一緒に暮っていた。細長い陶器せとものの火鉢を各自めいめいに出すのがこの家の習慣に成っていた。その晩はある音楽者の客もあつて、火鉢が何個いくつも出た。ここはすべてが取片付けてあつて、あまり部屋を飾る物も置いて無い。子供のある家で、時々泣出す声も聞える。六つばかりに成る、色の白い、髪を垂下げた娘が、曾根の傍へ来て、三吉夫婦に御辞儀をした。

「まあ、可愛らしいお娘こさんですね」

とお雪が言うと、娘は神経質らしい容しな子をして、やがてキマリが悪そうに出て行つた。

お雪から見ると、曾根は年とし長うえだった。お雪の眼には、憂鬱ゆううつな、氣心の知れない、隠そう隠そうとして深く自分を包んでいるような、まだまだ若く見える女が映った。曾根は最早いろいろな境涯を通り越して来たような人であった。言葉も少なかつた。

客もあつたので、夫婦は長くも居なかつた。小泉の兄の家へ帰つてから、三吉はこんな風に妻に尋ねてみた。

「どうだね、あの人達は」

「そうですね……」

とお雪は返事に窮こまつた。交際つきあつて見た上でなければ、彼女には何とも言つてみようが無かつた。

翌あくるひ日の午後、三吉達は東京を発つことにした。買物やら、荷

造やら、いそがしい思をした。その時、三吉は実の居るところへ行つて、一と先まず宗蔵の世話を断ことわつた。

「あれはすこし無理だった——俺の方が無理だった」

と実は笑いながら点頭うなずいた。

名倉の母や兄からは、停車場ステーションまでは見送らないと言つて、お

雪の許へ箆筒を買う金を二十円ほど届けて来た。別離わかれの言葉が取と

換りかわされた。三時頃には、夫婦は上野の停車場へ荷物と一緒に着いた。多くの旅客も集つて来ていた。

暗くなつて三吉夫婦は自分等の新しい家に着いた。汽車の都合

で、途中に一晩泊つて、猶なほさ程旅を急がなかつた為に、復た午後から乗つて来た。その日のうちに着きさえすれば可い、こういう積りであつたので。お雪は汽車を降りるから自分の家の庭に入るまで、暗い、知らない道を夫に連れられて来た。

庭を上ると、直ぐそこは三尺四方ばかりの炉ろばたを切つた部屋で、炉ろばた辺には年若な書生が待つていた。この書生は三吉が教えに行く学校の生徒であつた。

「明日は月曜ですから、最早それでも御歸りに成る頃かと思つて、御待ち申していました」と書生はお雪に挨拶した後で言つた。

「大分ユツクリやつて来ました」と三吉も炉くつろ辺に寛いだ。

お雪は眺ながめ廻しながら、

「へえ、こういうところですか」

と言つて、書生に菓子などを出して勧めた。先ず眼につくものは、炉に近い戸棚、暗い煤すすけた壁、大きな、粗末な食卓……

「ここは士族屋敷の跡なんだそうだ」と三吉は妻に言い聞かせた。「後の方に旧もとの入口があるがね、そこは今物置ものぢに成てる。僕等が入つて来たところは、先に住んだ人が新規こしらに造えた入口だ。どうも、酷ひどい住方をして行つたものサ。壁を張る、畳を取替える——漸ようやくこれだけに家らしくしたところだ。この炉も僕が来てから造り直した」

書生は物置部屋の方から奥の洋燈ランプを点つけて出て来た。三吉はそれを受取つて、真暗な台所の方へ妻を連れて行て見せた。広い板

たのま  
間、立て働くように出来た ながしもと流許、それからいかにも新世帯らしい粗末な道具しかお雪の目に入らなかつた。台所の横手には煤けた戸があつた。三吉はそれを開けて、そこに炭、薪、ボヤなどの入れてあることを言つて、洋燈を高く差揚げて見せたが、お雪には暗くてよく見えなかつた。

「ここをお前の部屋にするが好い」

と三吉が洋燈を持つて案内したは、炉辺の次にある八畳の間で、高い天井、茶色の壁紙で貼はつた床の間などがお雪の眼についた。奥には、これと同じ大きな部屋があつて、そこには本や机が置いてある。その隣に書生の部屋がある。割合に広い住居ではあつたが、なにしろ田舎臭い処であつた。

停車場前で頼んで置いた荷物も届いた。夫婦は未だ汽車で動ゆすら  
れているような気がした。途中から一緒に汽車に乗り込んで来た  
夫婦ものらしい人達は、未だ二人の前に腰掛けて二人の方を見て、  
何か私ささや語き合っているらしくも思われた。あの細君の大きな目――  
あの亭主の弱々しい、力のない眼――そういうものは考えたば  
かりでも羞しゆうち恥ちの念を起させた。二人は人に見られて旅すること  
を羞はじた。どうかすると互に顔を見ることすら避けたかった。

戸の透すきま間まが明るく成った。お雪は台所の方へ行つて働いた。裏  
口を開けて屋外そとへ出てみると、新鮮な朝の空気は彼女に蘇いきかえ生る

ような力を与えた。その清々せいせいとした空気はお雪が吸ったことの無いようなものであった。

一晩知らずに眠った家は隣と二軒つづきの藁葺わらぶきの屋根であった。暗くて分らなかつた家の周囲まわりもお雪の眼前めのまえに展ひらけた。彼女は、桑くわばたけ 畠はたけの向に見える人家や樹木の間から、遠く連つづいた山々を望むことの出来るような処へ来ていた。ゴットン、ゴットンと煩うるせく耳についたは、水車の音であった。

裏には細い流もあつた。胡頹子ぐみの樹の下で、お雪は腰を曲かがめて、冷い水を手に掬すくつた。隣の竹藪たけやぶの方から草を押し落して落ちて来る水は、見ているうちに石の間を流れて行く。こういう処で顔を洗うということすら、お雪にはめずらしかった。



例の書生は手桶ておけを提さげて、表の方から裏口へ廻まわつて来た。飲水を汲くむ為には、唐松からまつの枝で囲かこつた垣根の間を通とつて、共同の掘井戸まで行いかなければ成ならなかつた。

前の晩に見たよりは、家の内の住み荒あされた光景ありさまも余計に目についた。生家さとを見慣れた眼で、部屋々々を眺めると、未だそこい四辺よを飾る程の道具一つ出来ていなかつた。

書生はよくお雪の手伝いをした。不慣な彼女が勝手に働いてる間に、奥の方の庭までも掃除を済すました。バケツを提さげて、その縁側へお雪が雑巾掛ぞうきんかけに行いつてみると、丁度躑躅つづじの花の盛りである。土塀どべいに近く咲いた紫と、林檎りんごの根のところに蹲踞うずくまつたような白とが、互に映り合あひ合あひ、何となくこの屋根の下を幽静しずかな棲居すまい

らしく見せた。土塀の外にもカチャカチャ鍋なべを洗う音などがした。向の高い白壁には朝日が映あつて来た。

飯の用意も出来た。お雪は自分の手で造つたものを炉辺の食卓の上に並べて、夫にも食わせ、自分でも食つた。書生も楽しく笑いながら食つた。世帯を持つて初めての朝、味噌汁みそじるも粗末わんな椀わんで飲のんだ。お雪が生家さとの知しりびびと人から祝つてくれたもので、荷物の中へ入れて持つて来た黒塗の箸箱はしばこなどは、この食卓に向きそうも無かつた。

やがて三吉や書生が学校へ行く時が来た。質素な田舎のことで、着て出る物も垢あかさえ着いていなければそれで間に合つた。お雪は夫の為に大きな弁当箱を包んだ。こんな風にして、彼女は新婚の

生涯を始めた。奉公人を多勢使つて贅沢ぜいたくに暮して来た日までのことに比べると、すべて新たに習うようなものである。とはいえ、お雪は壮健しょうけんな身体を持っていた。彼女は夫を助けて働けるだけ働こうと思つた。

鍛冶屋かじやに注文して置いた鋤くわが出来た頃から、三吉は学校から帰ると直ぐそれを手にして、裏の畠の方へ出た。彼は家の持主から桑畠の一部を仕切つて借りた。そこは垣根に添うた、石塊いしころの多い、荒れた地所で、野菜畠として耕す前には先ず堅い土から掘起して掛らなければ成らなかつた。

俗に鉄道草と称とえる仕末に負えない雑草が垣根すみの隅すみに一ぱい枯残しっていた。それを抜取るだけでも、三吉はウンザリして了しまった。その他の雑草で最早も根深く蔓延はびこっているのも有った。青々とした芽は、其処そこにも、是処ここにも、頭もちあを擡もちあげていた。

勞苦する人達の姿が三吉の眼に映り初めたのは、橋本の姉の家へ行く頃からであつた。木曾に居る時も、幾分いくらか彼はその心こころ地ちを紙むかに對むかつて書いた。こうして僅かばかりの地所でも、實際自分で鋤とを執とつて耕としてみるところは、初めてである。不慣な三吉は直に疲れた。彼の手足は頭腦あたまの中で考えたように動かなかつた。時々彼はウンと腰を延ばして、土の着いた重い鋤とに身体を持たせ凭かけて、青い空気を呼吸した。

マブしい日が落ちて来た。三吉は眼鏡めがねの上から頬冠ほのかりして、復た働き始めた。

「どうも、好く御精が出ます」

と声を掛けて、クスクス笑いながら垣根の外から覗のぞいて通る人があつた。学校の小使だ。この男の家では小作をして、小使かたわの傍ら相応の年貢を納めている。いずれ三吉はこの男に相談して、畠の手伝いを頼もうと思つた。野菜の種も分けて貰おうと思つた。

翌あくるひ日も、学校から帰ると直ぐ三吉は畠へ出た。

お雪は垣根と桑畠の間を通つて、三吉の働いている処へ来た。書生も後から随ついて来た。

「オイ、そんなところに立って見ていないで、ちと手伝いをしろ」

と三吉が言た。

「御手伝いに来たんですよ」とお雪は笑つた。

「お前達はその石塊いしころを片付けナ」と三吉は言付けて、「子供のうちから働きつけた者でなくちや駄目だね——所詮とてもこの調子じゃ、俺も百姓には成れそうも無いナ」

三吉は笑つて、一度掘起した土を復た掘返した。大な石塊が幾いく個も幾個も出て來た。

お雪も手拭を冠り、尻端を折つて、書生と一緒に手伝い始めた。石塊は箆ざるに入れて、水の流の方へ運んだ。掘起した雑草の根は畠の隅に積重ねてあつた。その容易に死なない、土の着いた、重いやつを、何度にか持運んで捨てに行くことすら、お雪には

一仕事であつた。三人は日光を浴びながら一緒に成つて根氣に働いた。

「頬冠りも好う御座んすが、眼鏡が似合いません」

こうお雪は夫の方を見て、軽く笑うように言つた。書生も立つて見ていた。三吉も苦にがわらい笑して、土の着いた手で額の汗を拭ぬぐつた。

清い流で鍬を洗つて、入口の庭のところに腰掛けながら、一服やつた時は、三吉も楽しい疲労つかれを覚えた。お雪も足を洗つて入つて来た。激しく女の労働する土地で、麻の袋を首に掛けながら桑

畠へ通う人達が会釈して通る。お雪は家を持つ早々こうして女も働けば働けるものかということを知った。

嫁かたづいて来たばかりで、まだ娘らしい風俗がお雪の身の辺まわりに残っていた。彼女の風俗は、豊かな生家さとの生活を思わせるようなもので、貧しい三吉の妻には似合わなかった。紅あかく燃えるような帯揚などは、畠に出て石塊いしころを運ぶという人の色彩いろではなかった。

三吉はお雪の風俗から改めさせたいと思った。彼は若い妻を教育するような調子で、高い帯揚の心しんは減らせ、色はもつと質素なものえらを択べ、金の指輪も二つは過ぎたものだ、何でも身の辺まわりを飾る物は蔵しまって置けという風で、この夫の言うことはお雪に取って堪え難いようなことばかりであった。



「今から浅黄の帯揚なぞがゞ《し》められるもんですか」とお雪はナサケないという眼付をした。「今からこんな物を廃せなんて——若い時にゞなければゞる時はありやしません」

とはいえ、お雪は夫の言葉に従った。彼女は今までの飾を脱ぎ去つて、田舎教師の妻らしく装うことにした。「よくよく困つた時でなければ出すなツて、阿爺おとつさんに言われて貰つて来たんですが……」と言つて、百円ばかりの金の包まで夫の前に置いた。お雪は又、附添つけたして、仮令たとい倒のたれじに死するとも一旦嫁とついだ以上は親の家へ帰るな、と堅く父親に言い含められて来たことなどを話した。凜然りんとした名倉の父の気魄きはく、慈悲——そういうものは、お雪の言葉を通して略ほぼ三吉に想像された。

「若布わかめは宜よう御座んすかねえ」と門口に立つて声を掛ける女が幾いくたり人もあつた。遠く越後の方から来る若い内かみさん儀や娘達の群だ。その健気けなげな旅姿を眺めた時は、お雪も旅らしい思に打たれた。蛙の鳴声も水車の音に交つて、南向の障子に響いて来る……ガタガタ荷馬車の通る音も聞える……

この三吉の家は旧ふるい街道の裏手にあつて、古風な町々に連続つづいたような位置にある。お雪は一度三吉に連れられて、樹木の多い谷たにあい間を通つて、校長という人の家に案内された時、城跡に近い桑畠の向に建物の窓を望んだ。それが夫の通う学校であつた。三吉はその道を取ることもあり、日によつては裏の流について、停車場前の新しい道路を横に切れて、それから桑畠だの石垣だの

の間を折れ曲つて鉄道の踏切のところへ出ると、そこで一里も二里も通つて来る生徒の群に逢つて、一緒にアカシヤの生おい茂つた学校の表門の前へ出ることもある。お雪は夫の話によつて、自分等の住む家が大きな山の上の傾斜の中途にあることを知つた。幾十里隔てて、橋本の姉と同じ国に来ていような気がしない、と夫は言つたが、お雪にはまだその方角さえも判はつきり然しなかつた。

裏の畠には、学校の小使に習つて、豆、馬鈴薯じゃがいも、その他作り易やすい野菜から種を播まいた。葱ねぎ苗なえを売りに来る百姓があつた。三吉の家では、それも買つて植えた。

お雪が三吉の許へ嫁いて来るについては種々な物が一緒に附纏つて来た。「未来のWと思つていたが、君が嫁いて失望した……いずれその内に訪ねて行く……」こんなことを女名前にして書いて寄す人も有つた。お雪はそれを三吉に見せて、こういう手紙には迷惑すると言つた。三吉は好奇心を以て讀でみた。放擲して置いた。どうかするとお雪は不思議な沈黙の状態に陥ることにも有つた。何か家の遣方に就いて、夫から叱られるようなことでも有ると、お雪は二日も三日も沈んで了う。眼に一ぱい涙を溜めていることも有る。こういう時には三吉の方から折れて出て、どうしても弱いものには敵わないという風で、種々に細君の機嫌を取つた。

「水豆腐というものもナカナカ好いものだね……ウマイ……ウマイ……今日の菜さいは好く出来た……」

こう三吉の方で言うとお雪も氣を取直して、夫と一緒に楽しく食うという風であった。尤もこの沈黙はそう長くは続かなかつた。一度その状態ありさまを通り越すと、彼女は平素いつものお雪に復かえつた。そして、晴々しい眼付をして、復た根氣よく働いた。お雪は夫の境涯をさ程苦にしているでもなかつた。

お雪の部屋には、生家さとから持つて来た道具なども置かれた。大きな定紋の付いた唐皮からかわの箱には、娘の時代を思わせるような琴つめの爪つめ、それから可愛らしい小さな男おとこ女おんなの人形なども入れてあった。親戚や知人からはそれぞれ品物やら手紙やらで祝よこつて寄し

た。三吉が妻の友達にと紹介した二人の婦人からも来た。

「曾根さんは曾根さんらしい細い字で書いて来たネ」と三吉が言  
て笑った。

「ほんと真実に皆さんは御上手なんですなえ」とお雪も眺めた。

名倉の店に勤めている人で、お雪が義理ある兄の親戚にあたる  
勉からも、お雪へ宛あてて祝の手紙が来た。これは又、若い商人ら  
しい達者な筆で書いてあつた。

こんな風にして、三吉夫婦の若い生涯は混まじり始めた。やがて裏  
の畠に播いた菘さやえんどう豆も貝割葉かいわれぼを持ち上げ、馬鈴薯も芽を出す頃  
は、いくらかずつ新しい家の形を成して行つた。お雪は住居の近  
くに、二人の小母さんの助言者をも得た。一人は壁一重隔とて隣

家なりに住む細君で、この小母さんは病身の夫と多勢の子供とを控えていた。小母さん達はかわるがわる来て、時の総菜が出来たと言つてはくれたり、世帯持の経験を話して聞かせたりするように成つた。

## 五

東京の学校が暑中休暇に成る頃には、お雪が妹のお福も三吉の家へやつて来た。お福は、お雪の直ぐ下にあたる妹で、多勢の姉き ようだい妹を離れて、一人東京の学校の寄宿舎に入られている。名倉の母の許を得て、一夏を姉の許ところに送ろうとして来たのである。

三吉が通っている学校は、私人の経営から町の事業に移りかけているような時で、夏休というものもお福の学校の半分しかなかった。お福の学校では二月の余も休んだ。裏の畠はたけの野菜も勢よく延びて、馬鈴薯じゃがいもの花などが盛んに白く咲く頃には、漸くようや三吉も暇のある身に成った。

三吉は新あらたに妹が一人増ふえたことをめずらしく思った。読書の余暇には、彼も家のものの相手に成って、この妹を款待もてなそうとした。お雪は写真の箱を持出した。

名倉の大きな家族の面影おもかげはこの箱の中に納められてあつた。風通しの好い南向の部屋で、お雪姉妹は集つて眺ながめた。養子して名倉の家を続ついだ一番年長うえの姉、※という店を持って分れて出た



次の姉、こういう人達の写真も出て来る度たびに、お雪は妹と生家さとの  
噂うわさをした。お福の下にまだ妹が二人あつた。その写真も出て来た。  
姉達の子供を一緒に撮とつたのもあつた。この写真の中には、お雪  
が乳母と並んで撮つた極く幼い時から、娘時代に肥つた絶頂かと  
思われる頃まで、その時その時の変遷うつりかわりを見せるようなものが  
あつた。中には、東京の学校に居る頃、友達と二人洋傘こうもりを持っ  
て写したもので、顔のところだけ搔かきむし撈むしつて取つたのもあつた。

三吉の方の写真も出て来た。お雪は妹に指して見せて、この帽  
子を横に冠つたのは三吉が東京へ出たばかりの時、その横に前垂  
を掛けているのが宗蔵、中まんなか央なかに腰掛けて帽子を冠かぶっている少年  
が橋本の正太、これが達雄、これが実、後に襟えりまき巻まきをして立つた

のが森彦などと話して聞かせた。

「どうです、この兄さんは可愛らしいでしょう」

と三吉もそこへ来て、自分がまだ少年の頃、郷里くりにから出て来た幼友達と浅草の公園で撮ったという古い写真を出して、お福に見せた。

「まあ、これが兄さん？」とお福は眺めて、「これは可愛らしいが、何だか其方そっちはコワイようねえ」

お雪も笑った。お福がコワイようだと言ったは、三吉の学校を卒業する頃の写真で、熟じゅつと物を視みつめたような眼付に撮れていた。

お雪が持って来た写真の中には、女の友達ばかりでなく、男の知しりびと人から貰ったのも有った。名だけ三吉も聞いたことの有る人

のもあり、全く知らない青年の面影おもかげもあつた。

「勉強さんねえ」

とお福は名倉の店に勤めている人のを幾枚か取出して眺めた。

「福ちゃん」

とお雪は妹を呼んだ。返事が無かつた。お福はよく上り端あがはなの壁の側や物置部屋の風通しの好いところをえらひんで、独りひとで読書よみかきするといふ風であつたが、何処どこにも姿が見えなかつた。

「福ちゃん」

と復またお雪は呼んで探してみた。

南向の部屋の外は垣根に近い濡縁ぬれえんで、そこから別に囲われた畠の方が見える。深い桑の葉の蔭に成つて、妹の居る処は分らなかつたが、返事だけは聞える。

お雪は入口の庭から裏の方へ廻つて、生い茂つた桑畠の間を通つて、莢豌豆さやえんどうの花の垂れたところへ出た。高い枯枝に纏まとい着いた蔓つるからは、青々とした莢が最早も沢山に下つていた。

「福ちゃん、福ちゃんツて、探してるのに——そんなところに居たの」——こうお雪が声を掛けた。

お福は畠の間から姉の方を見て、「今ね——」ちよつと一寸裏へ出て見たら、あんまり好く生なつてるもんだから。すこし取つて行つて進あげようと思つて」

「そう……好く生ったことね」と言ってお雪も摘取りながら、

「福ちゃん、此こないだ頃姉さんと約束したものの……あれを書いておく

れナ。母親おつかさんの許ところへ手紙を出すんだから——」

「姉さん、そんなに急がなくなつて可いいわ」

「だって、どうせ出す序ついでだもの」

「それもそうね」と言ってお福は姉の傍へ寄つた。

妹は自分で摘取つた莢を姉の前垂の中へあけて、やがて畠を出て行つた。お雪はそこに残つていた。

桑の葉を押分けて、復たお雪が入口の庭の方へ戻つて行つた頃は、未だ妹は引込んで書いていた。お雪は炉辺の食卓の上に豆の莢を置いて、一つずつその両端を摘切つた。

お福は下書を持って静かな物置部屋の方から出て来た。

「姉さん、これで可くツて？」とお福は書いたものを姉に見せて言った。

「もうすこし丁寧にお書きな」とお雪が言った。

「だって、どう書いて好いか解らないんですもの」と妹は首を傾げて、娘らしい微笑を見せた。

お福は姉の勧めに従って、勉と結婚することを堅く約束する、それを楽しみにして卒業の日を待つ、という意味を認めて、お雪に渡した。お雪は名倉の母へ宛てた手紙の中へこの妹に書かせたものを同封して送ることにした。

名倉の母からは、お福が行って世話に成るといふ手紙と一緒に、

菓子の入った小包が届いた。遠く離れた母の手紙を読むことは、お雪に取って何よりの楽しみであった。お雪はその返事を書いたのである。序に妹のことをも書き加えたのである。

お雪の許へ宛てて勉からは度々たびたび文通が有る。復たお雪は受取った。彼女は勉から来る手紙の置場所に困った。

ある日、三吉は勉からお雪へ宛てた手紙を他の郵便と一緒に受取った。

「勉さんからはよく手紙が来るネ」

こう三吉はお雪を呼んで言つて、何気なくその手紙を妻の手に

渡した。

どういう事柄が書かれてあるにもせよ、それを聞こうともしなかつた程、三吉は人の心を頼んでいた。こういう文通の意味を略ほぼ彼も想像しないではなかつた。しかし、それに驚かされる年頃でもなかつた。彼は、自分が種々なところを通り越して来たように、妻もまた種々なところを通り越して、そして嫁かたづいて来たものと思つていた。お雪も最早二十二に成る。こうして種々な手紙が新しい家まで舞込んで来るのは、別に三吉には不思議でもなかつた。唯、妻が自己おのれの周囲まわりを見過みあやまらないで、従順すなおに働いてくれさえすればそれで可い、こう思つた。彼には心を勞しなれば成らないことが他に沢山有つた。



畠の野菜にもそれぞれ手入れをすべき時節であった。三吉はくわを携えて、成長した葱ねぎなどを見に行つた。百姓の言葉でいう「サク」は最早何度かくれた。見廻る度に延びている葱の根元へは更に深く土を掛けて、それから馬鈴薯の手入を始めた。土を掘ってみると、可成かなり大きな可愛らしいやつがいくつ幾個となく出て来た。

「ホウ、ホウ」

と三吉は喜んで眺ながめた。

裏の流で取れただけの馬鈴薯を洗つて、三吉は台所の方へ持つて行つて見せた。お雪もめずらしそうに眺めた。新薯は塩しお茹ゆにして、食卓の上に置かれた。家のものはその周囲まわりに集つて、自分の手で造つたものを楽しそうに食つたり、茶を飲んだりした。

その晩、三吉はお福や書生を奥の部屋へ呼んで、骨牌トランプの相手に成った。黄ばんだ洋燈ランプの光は女王だの兵卒だのの像を面白そうに映して見せた。お福はよく勝つ方で、兄や若い書生には負けずに争った。お雪も暫しばらく時仲間入をしたが、やがてすこし頭が痛いと言つて、その席を離れた。

炉辺ろばたの洋燈は寂しそうに照していた。何となくお雪は身体だるが倦くもあつた。毎月あるべき筈はずのものも無かつた。尤もっとも、さ程氣に留めてはいなかつたので、炉辺ろばたで独り横ひとに成つてみた。

奥の部屋では楽しい笑声が起つた。一勝負済んだと見えた。復た骨牌が始まつた。頭の軽い痛みも忘れた頃、お雪は食卓の上に巻紙ひろを展ひげた。彼女は勉ひへの返事を書いた。つい家のことに追わ

れて、いそがしく日を送っている……この頃の御無沙汰も心よりする訳では無いと書いた。妹との結婚を承諾してくれて、自分も嬉しく思うと書いた。恋しき勉強へ……絶望の雪子より、と書いた。

この返事をお雪は翌あくるひ日まで出さずに置いた。折を見て、封筒の宛名だけ認しためて、肩さきに先方から指してよこした町名番地を書いた。表面おもてだつて交換とりかわす手紙では無かつたからで。お雪は封筒の裏に自分の名も書かずに置いた。筆筒たんすの上にそれを置いたまま、妹を連れて、鉄道の踏切からずつとまだ向の崖がけ下したにある温泉へ

入浴はいりに行つた。

ふと、この裏の白い手紙が三吉の目に着いた。不思議に思つて、開けてみた。一度読んだ。気を沈着おちつけて繰返してみた。彼は自分で抑えることもどうすることも出来ない力のままに動いた。知らないでいる間は格別、一度こういう物が眼に触れた以上は、事の真相を突留めずにいられなかつたのである。つと筆筒の引出を開けてみた。針箱も探してみた。櫛箱くしばこの髻かもしまで搔廻かきまわしてみた。台所の方へも行つてみた。暗い入口の隅すみには、空いた炭俵の中へ紙屑かみくずを溜ためるようにしてあつた。三吉は裏口の柿の樹の下へその炭俵をあけた。隣の人に見られはせぬか、女連おんなれんは最早も帰りはせぬか、と周囲あたりを見廻したり、震えたりした。

勉が手紙の片きれはその中から出て来た。その時、三吉はこの人の熱い情を読んだ。若々しい、心の好きそうな、そして気の利きいた勉の人となりまでも略ほぼ想像された。温泉に行つた人達の帰りは近づいたらしく思われた。読んだ手紙は元の通りにして、妻が帰つて来て見ても、ちゃんと箆こもり笥の上あに在るようにして置いた。

お雪とお福の二人は洋傘こうもりを持って入つて来た。お雪は温泉場の前に展ひらげた林檎りんご島ぼたけ、青々と続いた田、谷の向に見える村落、それから山々の眺望の好かつたことなどを、妹と語り合つて、復た洗濯物を取込むやら、夕飯の仕度に掛るやらした。

やがて家のものは食卓の周まわり圍に集つた。お雪は三吉と相さしむかい対たいに坐つて、楽しそうに笑いながら食つた。彼女の眼は柔順と満足

とで輝いていた。時々三吉は妻の顔を眺めたが、すこしも変わった様子は無かった。三吉は平素いづものように食えなかつた。

一夜眠らずに三吉は考えた。翌あくるひ日に成つてみると、お雪や勉強とりかわが交換した言葉で眼に触れただけのものは暗記そらんして了つた程、彼の心は傷いたみ易やすく成つていた。家を出て、夕方にボンヤリ帰つて来た。

夫の好きな新しい野菜を料理して、帰りを待っていたお雪は、家あつのものを蒐めて夕飯にしようとした。土地で「雪割ゆきわれ」と称となえるは、莢さや豌豆えんどうのことで、その実の入った豆を豚あぶらの脂あぶらでいためて、

それにお雪は塩を添えたものを別に夫の皿へつけた。彼女は夫の喜ぶ顔を見たいと思つた。

「頂戴ちようだい」

とお福や書生は食い始めた。三吉は悪い顔色をして、折角お雪が用意したものを味おうともしなかつた。

「今日は碌ろくに召上らないじや有りませんか……」

と言つて、お雪は萎しおれた。

その晩、三吉は遅くまで机に対つて、書籍ほんを開けて見たが、彼が探そうと思うようなものは見当らなかつた。復た夜通し考え続けた。名倉の母へ手紙でも書こうか、お雪の親しい友達に相談しようか、と思ひ迷つた。

錯乱した頭脳あたまは二晩ばかり眠らなかつた為に、余計に疲れた。彼はお雪と勉の愛を心にあわれにも思つた。ブラリと家を出て、復た日の暮れる頃まで彷徨うろついた三吉は、離縁という思想かんがえを持つて歸つて来た。もし出来ることなら、自分が改めて媒ばい妁しやくの勞を執つて、二人を添わせるように尽力しよう、こんなことまで考へて来た。

家出——漂泊——死——過去つたことは三吉の胸の中を往いつたり来たりした。「自分は未だ若い——この世の中には自分の知らないことが沢山ある」この思想かんがえから、一度破つて出た旧ふるい家へ死すべき生命いのちも捨てずに戻つて来た。その時から彼はこの世の艱か難なんを進んで嘗なめようとした。艱難は直に来た。兄の入獄、家の



破産、姉の病氣、母の死……彼は知らなくても可いようなことばかり知った。一縷いちるの望は新しい家にあつた。そこで自分は自分だけの生涯を開こうと思つた。東京を発つた時、稲垣が世帯持の話をして、「面白いのは百日ばかりの間ですよ」と言つて聞かせたが、丁度その百日に成るか成らないかの頃、最早自分の家を壊そうとは三吉も思いがけなかつた。

倒のたれじに

死すするとも帰るなど堅く言つてよこしたという名倉の父の家へ、果してお雪が帰り得るであろうか。それすら疑問であつた。お雪は既に入籍したものである。法律上の解釈は自分等の離縁を認めるであろうか。それも覚おぼつか束なかつた。三吉はある町に住む弁護士ちえの智慧を借りようかとまで迷つた。蚊屋かやの内へ入つて

考えた。夏の夜は短かかった。

三吉は家を出た。彼の足は往時<sup>むかし</sup>自分の先生であつたという学校の校長の住居<sup>すまい</sup>の方へ向いた。古い屋敷風の門を入れて、裏口へ廻つてみると、向の燕<sup>からすむぎ</sup>麦を植えた岡の上に立ってしきりと指図<sup>さしず</sup>をしてゐる人がある。その人が校長だ。先生は三吉を見つけて、岡を下りて来た。先生の家では学校の小使<sup>かなり</sup>を使って可成<sup>かなり</sup>大きな百姓ほど野菜を作つていた。

師はやがて昔の弟子<sup>でし</sup>を花畠に近い静かな書齋<sup>さか</sup>の方へ導いた。最早入歯<sup>わかもの</sup>をする程の年ではあつたが、氣象の壮<sup>さか</sup>んなことは壮<sup>わかもの</sup>年に

も劣らなかつた。長い立派な髯ひげは余程白く成りかけていた。この阿爺おとさんとも言いたいような、親しげな人の顔を眺めて、三吉は意見を聞いてみようとした。他に相談ひとすべき事柄では無いと思つたが、この先生だけには簡単に話して、どう自分の離縁つひに就つて考えるかを尋ねた。先生は三吉の為に媒妁との労を執とつてくれた大島先生のそのまた先生でもある。

雅致のある書齋の壁には、先生が若い時の肖像と、一番最初の細君の肖像とが、額にして並べて掛けてあつた。

「そんなことは駄目です」と先生は昔の弟子の話ききごとを聴取きつた後で言つた。「我輩のことを考えてみ給え——我輩などは、君、三度も家内を貰つた……最初の結婚……そういう若い時の記憶は、最

早二度とは得られないね。どうしても一番最初に貰った家内が一番良いような気がするね。それを失うほど人間として不幸なことは無い。これはまあ極く正直な御話なんです……」

三吉は黙って先生の話を聞いていた。先生は往時戦争にまで出たことのある大きな手で、種々いろいろな手真似てまねをして、

「君なぞも、もつと年をとつてみ給え、必きつと我輩の言うことで思い当ることが有るから……我輩はソクラテスで感心はししてることが有る。ソクラテスの細君と言えば、君、有名な箸はしにも棒にも掛らないような女だ……それをジツと辛抱した……一生辛抱した……ナカナカあの真似はできないね……あそこが我輩はあの哲学者の高いところじゃないかと思うね」

先生の話は宗教家のような口調を帯びて来た。そして、種々なところへ飛んで、自分の述懐に成つたり、アメリカ亜米利加時代の楽しい追想に成つたりする。

「亜米利加の婦人などは、そこへ行くと上手なものだ。以前に相愛の人でも、自分の夫に紹介して、奇麗に交際して行く——*The is my lover*」なんて……それは君、サツパリしたものサ。日本の女もああいかんけりや面白くないね」

訪ねて来た客があつたので、先生は他の話に移つた。

「まあ、小泉さん、よく考えてご覧なさい」という言葉を聞いて、三吉は旧師の門を出た。ひとあし一歩家の方へ踏出してみると復た堪え難い心に復かえつた。三吉は自分の家の草屋根を見るのも苦しいよう

な気がした。

家にはお雪が待つていた。何処どこまでも夫を頼みにして、機嫌きげんを損そこねまいとしているような、若い妻の笑顔は、余計に三吉の心を苦めた。

燈火あかりの点く頃まで、三吉は自分の部屋に倒れていた。

「オイ、手拭てぬぐいを絞しぼって持つて来てくれ」

こう夫から言付けられて、お雪は一度流なが許がしもとへ行つて、戻つて来た。あおのけに畳の上に倒れている夫の胸は浪打なみうつように見えた。

「まあ、どうなすつたんですか」

と言つて、お雪は夫の胸の上へ冷い手拭あてがを宛行あてがつた。

翌晩、三吉は机むかに対つて紙を展ひろげた。遅くまで書いた。書生は部屋の洋燈ランプを消し、お福も寢床へ入りに行つたが、未だ三吉は書いていた。

「お雪、すこしお前に読んで聞かせるものが有る……俺おれが済むまで、お前も起きておいで」

こう妻を呼んで言つた。お雪は炉辺で独ひとり解ほどき物ものをしていた。小さな夏の虫は何処から来るともなく洋燈ランプの周圍まわりに集つた。

お雪が鳴らしていた鋏はさみを休めた頃は、十二時近かつた。お福や書生は最早前後も知らずに熟睡している頃であつた。

「何ですか」

とお雪は不思議そうに夫の机の傍へ来た。

「こういうものを書いた、この手紙はお前にもよく聞いて貰わんけりや成らん」

と言つて、三吉は洋燈を机の真中に置直した。彼は平氣を装おうとしたが、その実周章あわてて了つたという眼付をしていた。声も度を失つて、読み始めるから震えた。とはいえ、彼はなるべく静かに、解り易やすく読もうとした。

お雪は耳そぼだを敲たたてた。

「甚はなはだ唐突ながら一筆申上候そうろう……かねてより御噂うわさ、蔭乍ながら承り居り候。さて、未だ御目にかからずとは申しながら腹藏なく思う



ところを書き記し候。此手紙、決して悪しき心を持ちて申上ぐるには候わず。何卒々々心静かに御覧下されたく候……」

お雪は鋭く夫の顔を眺めて、復た耳を澄ました。

「実は、君より妻へ宛てたる御書面、また妻より君へ宛てたる手紙、不図したることより生の目に触れ、一方には君の御境遇をも審にし、一方には……妻の心情をも酌取りし次第に候……」

お雪は耳の根元までも紅く成つた。まだ世帯慣れない手で顔を掩うようにして、机に倚りながら聞いた。

「斯く申す生こそは幾多の辛酸にも遭遇しいささか人の情を知り申し候……されば世にありふれたる卑しき行のよう一概に君の涙を退くるものとのみ思召さば、それは未だ生を知らざるにて候

……否……否……」

どうかすると三吉の声は沈み震えて、お雪によく聞取れないことがあった。

「斯く君の悲かなしみ哀くを汲み、お雪の心情をも察するに、添い遂げらるる縁えにしとも思われねば、一旦は結びたる夫婦の契ちぎりを解き、今迄までを

悲しき夢とあきらめ、せめては是世このよに君とお雪と及ばず乍ら自身

媒ばいしやく灼やくの労を執つて、改めて君に娶めあわせんものと決心致し、昨夜、

一昨夜、殆ど眠らずして其方法そのを考え申候……ここに一つの困難

というは、君も知り給う名倉の父の氣質に候。彼是かれこれを考うれば、

生が苦心は水の泡あわにして、反かえつて君の名を辱はずかしむる不幸の決果を来

さんかとも危まれ候……」

暫時しばらく、部屋の内は寂しんとして、声が無かつた。

「ああ君と、お雪と、生と——三人の關係を決して軽きこととも思われず候。世間幾多の青年の中には、君と同じ境遇に苦む人も多からん。新しき家庭を作りて始めて結婚の生涯を履ふむものの中には、あるいは又生と同じ疑問に迷うものもあらん。斯かることを書き連ね、身の恥を忘れ、愚かしき悲嘆なげきを包むいとまの暇いとまもなきは、ひとえに君とお雪とを救わんと願ねがひに外ならず候。あわれむべきはお雪に候。君もし真にお雪を思うの厚なき情なさけもあらば、願ねがわくは友として生に交らんことを許し給え……三人の新しき交際——これぞ生が君に書き送る願ねがひなれば。今後吾家庭の友として、喜んで君を迎えんと思ひ立ち候。思うに君は春秋に富まるるの身、生とて

も同じ。一旦の悲哀よりして互に終生を棄つるなく、他日手を執りて今日を追想し、胸襟きょうきんを披ひらいて相語るの折もあらば、これに過ぎたる幸はあらずと存じ候……」

この勉へ宛てた手紙を読んで了つた時、三吉は何か事業しごとでも済ましたように、深い溜息ためいきを吐ついた。お雪は畳の上に突伏つつぶしたまま、やや暫時しばらくの間は頭を揚げ得なかつた。

「オイ、そんなことをしていたって仕様が無い。この手紙は皆なの寝てるうちに出して了おう」

と三吉は慰撫なだめるように言つて、そこに泣倒れたお雪を助け起した。郵便函ポストは共同の掘井戸近くに在つた。三吉は妻を連れて、その手紙を出しながら一緒にそこいらを歩いて来ようと思つた。

お福や書生の眼を覚ませまいとして、夫婦は盗むように家の内を歩いた。表の戸を開けてみると、屋外そとは昼間のように明るかった。燐りんのような月の光は敷居の直ぐ側まで射して来ていた。

裏の流は隣の竹藪たけやぶのところで一度石の間を落ちて、三吉の家の方へ来て復た落ちてゐる。水草を越して流れるほど勢の増した小川の岸に腰を曲かがめて、三吉は寝惚ねぼけた顔を洗った。そして、十  
一時頃に朝飯と昼飯とを一緒に済ました。彼は可恐おそろしい夢から覚  
めたように、家の内を眺め廻した。

口では思うように言えないからと言って、お雪が手紙風に書い

た物を夫の許へ持って来た頃は、書生も水泳およぎに行つて居なかつた。お雪が三吉に見てくれというは、種々いろいろや止むを得ない事情から心配を掛けて済まなかつた、自分は最早どうでも可いというようなそんな量見で嫁いて来たものでは無い、自分は自分相応の希望を有もつて親の家を離れて来た、という意味が認めてある。猶なほ、勉へ宛てて最後の断りの手紙を書いたから、それだけは許してくれ、としてある。

「なにも、俺は断れと言つてあんな手紙を書いたんじゃない。お前なんかそう取るからダメだ」と三吉は言つてみた。「福ちゃん、の旦那さんに成ろうという人じゃないか……行く行くは吾儕われわれの弟じゃないか……」

お雪は答えなかつた。

冷<sup>すず</sup>しい風の来るところを扨<sup>す</sup>んで、お福は昼寝の夢を貪<sup>むさぼ</sup>っていた。

南向の部屋の柱に倚<sup>より</sup>凭<sup>かか</sup>りながら、三吉はお雪から身<sup>み</sup>上<sup>のうえ</sup>の話<sup>を</sup>を

聴取ろうと思つた。夫婦は不思議な顔を合せた——今まで合せたことのない顔を合せた——結婚する前には、互に遠くの方でばかり眺めていたような顔を……

「勉強さんとお前とはどういう關係に成つていたのかネ」三吉は何気なく言出した。

「どういふとは？」とお雪はすこし顔を紅めて。

「家の方でサ。そういうことはズンズン話して聞かせる方が可い」

その時、三吉は妻の口から、勉強と彼女とは親が認めたま柄であ

ること、夫婦約束を結ばせたではないが親達の間だけにそういう話のあつたこと、店の番頭に邪魔するものが有つて、あること無いこと言い触らして、その為に勉の方の話は破れたことなどを聞いた。

済んだことは済んだこと、こう妻は言い消して了おうとした。夫はそれでは済まされなかつた。

寂しい心が三吉の胸の中につけて来た。その心は、女をいたわるといふことにかけて、自分もまた他の男に劣るものではないといふことを示させようとした。その日、三吉は種々と細君のきげん機嫌を取つた。機嫌を取りながら、もだ悶えた。



間もなく勉から返事が来た。一通は三吉へ宛て、一通はお雪へ宛ててあった。お雪へ宛てては、「自分の為に君にまで迷惑を掛けて気の毒なことをした、君に咎むべきことは一つも無い、何卒自分にかわって君から詫をしてくれよ」という意味が書いてある。お雪はその手紙を読んで泣いた。

月を越えて、三吉の家では一人の珍客を迎えた。三吉は停車場まで行って、背の高い、胡麻塩ごましおの鬚ひげの生えた、質素な服装みなりをした老人を旅客の群の中に見つけた。この老人が名倉の父であった。

「まあ、阿父おとつさん……」

とお雪も門に出て迎えた。

名倉の父は、二人の姉娘に養子して、今では最早余生を楽しく送る隠居である。強い烈しいはげ氣象、實際的な性質、正直な心——そういうものはこの老人の鋼鉄のような額に刻み付けてあつた。一代の中に幾棟いくむねかの家を建て、大きな建築を起したという人だけあつて、ありあまる精力は老いたからだ体軀を静止じつとさせて置かなかつた。愛する娘のお雪が、どういうわかもの壮年と一緒はるばるに、どういう家を持ったか、それを見ようとして、遙々はるばる遠いところを出掛けて来たのであつた。

「先ずこれで安心しました」

と老人はホツと息を吐くように言つた。

南向の部屋の柱には、新しい時計が懸つた。そして音がし出し

た。若夫婦へ贈る為に、わざわざ老人が東京から買って提さげて来たのである。これは母から、これは名倉の姉から、これは※の姉から、と種々な土産物みやげものがそこへ取出された。

煤すすけた田舎風の屋の内うちなかを見て廻った後、老人は奥の庭の見える座敷に粗末な膳ぜんを控えた。お雪やお福のいそいと立働くさまを眺めたり、水車の音を聞いたりしながら、手酌でちびりちびりやつた。

「何卒どうぞもうすこしも関かまわずに置いて下さい。私はこの方が勝手なてづくりんで御座いますから」

と老人が言った。何がなくともお雪の手製てづくりのもので、この酒に酔うことを楽しみにして来たことなどを話した。

三吉は炉辺へお雪を呼んで、

「何かもうすこし阿爺さんに御馳走する物はないかい」

「あれで沢山です」とお雪が言う。

「こんな田舎じゃ何物も進げるようなものが無い。罐詰でも買

いにやろうか」

「宜う御座んすよ。それに、阿爺さんは後から何か持って行つたつて、頂きやしません」

幼少の時父に別れた三吉は、こういう老人が訪ねて来たことを珍しく嬉しく思った。父というものは彼がよく知らないようなもので有つた。三吉が何時までも亡くなつた忠寛を畏れているように、お雪やお福は又、この老人を畏れた。

名倉の父は二週間ばかり逗留とうりゆうして、東京の学校の方へ帰るお福を送りながら、一緒に三吉の家を発たつて行つた。この老人は橋本の姉や小泉の兄の方に無いようなものを後へ残して行つた。そして、亡くなつた忠寛が手本を残しておいた家の外ほかに、全く別の技師が全く別の意匠で作つた家もある、ということ三吉に思わせた。「こんな書籍ほんを並べて置いたつて、売ると成れば紙屑かみくずの値段ねだんだ」——こう言うほど商人しょうにん氣質かたぎの父ではあつたが、しかし三吉はこの老人の豪健な氣象を認めずにはいられなかつた。翌年の五月には、三吉夫婦はお房という女の児この親であつた。

書生は最早居なかつた。手の無い家のことで、お雪は七夜の翌日から起きて、子供の襁褓を洗つた。その年の初夏ほど、三吉も寂しい旅情を経験したことは無かつた。奥の庭には古い林檎の樹があつて、軒に近い枝からは可憐の花が垂下つた。蜜蜂も来て楽しい羽の音をさせた。すべての物の象は、始めて家を持った当時の光景に復つて来た。

「俺の家は旅舎だ——お前は旅舎の内儀さんだ」

「では、貴方は何ですか」

「俺か。俺はお前に食物をこしらえて貰つたり、着物を洗濯して貰つたりする旅の客サ」

「そんなことを言われると心細い」

「しかし、こうして三度々々御飯を頂いてるかと思うと、ありがた難有  
 いような気もするネ」

こんな言葉を夫婦はとりかわ交換した。

ヒヨイヒヨイヒヨイヒヨイと夕方から鳴出す蛙の声は余計に旅情をそそるように聞える。それを聞くと、三吉は堪え難いような目付をして、家の内を歩き廻った。

新婚の当時のことは未だ三吉の眼にあつた。東京を発つて自分の家の方へ向おうとする旅の途中——岡——躑躅つづじ——日の光の色——何もかも、これから新しい生涯に入ろうとするその希望で輝かないものは無かつた。洋燈ランプの影で書籍ほんを読みながら聞いた未だ娘のような妻の呼吸——それも三吉の耳にあつた。彼は女という

ものを知りたいと思うことが深かったかわりに、失望することも大きかったのである。

どうかすると、三吉は往時<sup>むかし</sup>の漂泊時代の心に突然帰ることが有った。お雪が勝手をする間、子供を預けられて、それを抱きながら家の内を歩いている時、急に子も置き、妻も置いて、自分の家を出て了おうかしらん、こんな風に胸を突いて湧<sup>わ</sup>き上つて来ることも有った。

「好い児だ——好い児だ——ねんねしな——」

眠たい子守歌をお房に歌ってやりながら三吉は自分の声に耳を澄ました。お雪はよく働いた。



裏の畠には、前の年に試みた野菜の外に茄子なす、黄瓜きゅうりなどを作り、垣根には南かぼちや瓜つるの蔓はを這はわせた。ある夕方、三吉が竹たけぼうき箒きを持って、家の門口を掃除したり、草むしりをしたりしていると、そこへ来て風呂敷包を背負った旅姿の人が立った。

橋本の大番頭、嘉助が行商の序ついでに訪ねて来たのであった。毎年の例で、遠く越後路から廻まわつて来たという。この番頭の日ひに焼けた額かぶたや、薬くすりを入れた籠かごの荷物あがを上あり端はなのところへ卸おろした様子は、いかに旅の苦痛くるしみに耐たえて、それに又慣ならされているかということことを思おもわせる。嘉助は草鞋わらじの紐ひもを解といて上あつた。

「是方こちらでも子供衆こどもぐらが出来できさつせえて、御新造ごしんぞうさんも手てが有あらつせ

まいで、寄るだけは寄れ、御厄介には成るな——こう姉様あねさまから言付かつて来ました」と嘉助が言った。

「まあ、そんなことを言わなくても可い。是非泊つて行つて下さい、姉さんの家の話も種いろいろ々伺いたい」

と三吉は引留めて、一年に一度ずつ宿をすることに定きめていたと言つた。お雪も勝手の方から飛んで来た。

嘉助は橋本の家を出て最早足掛二月に成るといふ。この長い行商の旅は、ずっと以前から仕来しきたつたことで、橋本の薬といえば三吉が住む町のあたりまで弘まっていた。燈火あかりの点く頃から、お雪も嘉助の話はなしを聞こうとして、子供を抱かかきながら夫の傍へ来た。

「女のお見さんかなし。子供衆こどもぐらの持薬じやくには極く好いで、すこし置

いていかず」

こう嘉助が言つて、土産がわりに橋本の薬を取出した。

「貴方のところでもお嫁さんがいらしたそうで……」とお雪は正太の細君のことを言つた。「豊世さんでしたね」と三吉も引取つて、「吾家うちへも手紙を貰いましたが、なかなか達者に好く書いてありましたツけ」

「ええ、まあ、御蔭様で好いお嫁さんを見つけました。あれ位のお嫁さんは探したつてそう沢山たんと無い積りだ。大旦那始め皆な大悦びよなし……」

と言つて、嘉助は禿はげ頭あたまを撫なでた。正太が結婚について、いかに壮さかんな式を挙げたかといふことは、この番頭の話で略想像ほぼさ

れた。

「嘉助さんが褒める位だから、余程好いお嫁さんに相違ないぜ」

「正太さんも御仕合ですこと」

こんな言葉を、三吉夫婦は番頭の聞いていないところで交換した。

翌朝早く嘉助は別離を告げて発った。その朝露を踏んで出て行く甲斐々々しい後姿は、余計に寂しい思を三吉の胸に残した。

三吉は東京の方の空を眺めて、種々な友達から来る音信を待ち侘びる人と成った。学校がひける、門を出る、家へ帰ると先ず郵便のことを尋ねる。毎日顔を突合せている同僚の教師の外には、語るべき友も無かった。

お雪の友達にもと思つて三吉が紹介した一人の婦人からは、結婚の報知しらせが来た。三吉は又曾根からも山の上へ避暑に行こうと思つた。うといふ手紙を受取つた。

## 六

ステーション  
停車場の方で汽車の音がする。

山の上の空気を通して、その音は南向の障子に響いて来た。それは隅田川すみだがわを往復する川蒸汽の音に彷彿そっくりで、どうかするとあの川岸に近い都会の空で聞くような気を起させる。よく聞けばやはり山の上の汽車だ。三吉はそれを家のものに言つて、丁度離れ

た島に住む人が港へ入る船の報知しらせでも聞くように、濡縁ぬれえんの外まで出て耳を立てた。新聞にせよ、手紙にせよ、新しい書籍ほんの入った小包にせよ、何か一緒に置いて行くものはその音より外に無かった。三吉は曾根から来た手紙のことを胸に浮べた。最早も山の上に来てゐるかしらん、とも思つた。

曾根が一夏を送りたいと言つて寄よこしたは、三吉夫婦が住む町とは五里ばかり離れたところにある避暑地である。同じ山つづきの高原の上で、夏は人の集る場所である。

東京へ行つた学生達はポツポツ帰省する頃のことであつた。三吉の家へは、復またお福がやつて来ていた。

丁度三吉も半日しか学校のない日で、外出する用意をして、炉

辺で昼飯ひるをやった。

「何処どちらへ？」とお雪は給仕しながら尋ねてみた。

「曾根さんが来てるか行つて見て来ようと思う」こう三吉は答え  
た。

「最早いらしたんでしようか」とお雪は夫の顔を眺める。

「居るか居ないか解らんがね、まあ遊びがてら行つて見て来る」

三吉が曾根を妻に紹介して、二人の女の間を結び付けようとしたのは、家庭の友として恥かしからぬ人と思つたからで。曾根は音楽に一生を托たくしているような婦人で、三吉が向いて行こうとする方面にも深く興味を有もつていた。言わば、三吉には、自分を知つてくれる人の一人と思われた。この思かんがえ想が彼を喜ばせた。

しかし、お雪はあまり喜ばないという風であつた。三吉が曾根のことを言つて、彼女の身内が悲惨な最期を遂げた時に、それをひと独りで仕末したという話をして、「どうして、お前なかなかシツカリモノだぜ」などと言つて聞かせると、「その話を聞くのはこれで三度目です」とか何とかお雪の方では笑つて、「最早もう沢山」という眼付をする。お雪は曾根を知ろうとしなかつた。どうしてこう女同志は友達に成れないものかしらん、と三吉は嘆息することも有つた。

三吉は妻の狭い考えを笑つた。そして、男とか女とかということを離れて、もつと種々な人を知りたいと思つた。

「何卒どうぞ、御逢あいでしたら宜敷よろしく」



こういう妻の言葉を聞捨てて、三吉は出て行つた。暑い日であつた。

曾根の宿を探しめぐんで、到頭三吉は分らず仕舞に自分の家の方へ引返した。ギラギラするような日光を通して見た避暑地の光ありさま  
景は、三吉の心を沈着おちつかせなかつた。彼は種々な物の象かたちを眼に浮べながら歸つて来た——ところどころに新築された別荘、赤く塗つた窓、蕃牡丹キャベツばたけ畠……それから古い駅路の両側にある並木、その蔭を往来する避暑客、金色な髪の子供を連れて歩く乳母……

三吉は又、はじめて曾根を知つた当時のことを想おもいながら歸つ

て来る人であつた。多勢若い男や女の居る部屋で、ふと曾根は三吉の傍へ来て、亡くなつた友達のことを尋ねた。机の上には、短い曲の譜があつた。「神の意のままに」という題で、男おとこ女おんなの別離わかれを歌つたものだつた。メンデルソオンの曲だ。その一節を、曾根は極く小さい震えるような声で歌つて聞かせた。音楽者の癖で、曾根が手の指は無心に洋琴ピアノの鍵盤に触れるように動いた。これはそう旧いふることでも無かつた。急に、三吉はこの人と親しみを増すように成つた。十年一日のような男同士の交際とは違つて、何故なぜかこう友情を急がせるようなところもあつた。

垣根はに這はわせた南かぼちゃ瓜は最早盛んに咲く頃であつた。その大きな黄色い花に添うて、三吉は往来の方から入つて来た。家には珍

しい客が待っていた。

「直樹さん——」思わず三吉は微笑ほほえんで言った。

「兄さんのお留守へやつて参りました」と直樹も出て迎えた。

この中学生は、三吉と一緒に木曾路きそじを旅した頃から比べると、見違えるほど成人していた。丁寧な口の利ききようからして、いかにも都会に育った青年らしい。丁度この直樹位の年頃の生徒を毎日学校で相手にしている三吉には、余計にその相違が眼についた。直樹は父の許を得て、暑中休暇を三吉の家で送ろうとして来たのである。

日頃親身の弟のように思う人がこうして一緒に成ったということは、三吉を喜ばせたばかりでは無かった。「姉さん、姉さん」

と呼ばれるお雪も心から喜んで、この青年を迎えた。退屈でいるお福も好い話相手を得た。遽にわかに三吉の家では賑にぎやかに成った。

翌日から、直樹は殆ほとんど家の人であつた。子供を可愛がることも、この青年の天性に近かつた。お福は、娘でありながら、直樹のようには子供を好かなかつた。

「房ふうちゃん、房ふうちゃん」と言つて、子供を背中に乗せて、家の内を歩く直樹の様子を眺ながめると、三吉は昔時むかし自分が直樹の家に書生した時代のことを思出さずにいられなかつた。

「僕も、ああして、よく直樹さんを背負つて歩いたものだ」

と三吉は妻に話した。直樹は生れ落ちるから、三吉の手に抱かれた人である。

「曾根さんが先刻訪ねていらつしやいましたよ」とお雪は入口の庭のところ<sup>さつき</sup>で張物をしながら言った。

屋外<sup>そと</sup>から入つて来た三吉は、妻の顔を眺めた。何時<sup>いつ</sup>山の上へ着いたとも、何処<sup>どこ</sup>へ宿を取つたとも、判然<sup>はつきり</sup>知らせて寄<sup>よこ</sup>さないような曾根が、こうして自分等の家へ訪ねて来たということは、酷<sup>ひど</sup>く三吉を驚かした。

「あの」とお雪は張物する手を留めて、「そこいらまで見物に被<sup>い</sup>入<sup>ら</sup>しつた序<sup>ついで</sup>に御寄んなすつたんですツて」

「お前も又、待たして置けば好いのに——折角来たものを」

「だつて御上りなさらないんですもの。お連つれの方がお有んなさるからツて」

「へえ、誰か一緒に来たのかい」

「女の方が二人ばかり、流の処しやがに蹲踞しゃがんでいらつしやいました」

「姉さん」とお福は上りあが框がまちのところあがに腰掛あがけながら、「あの連の

方は必きつと耶蘇ヤソですよ」

「どうして耶蘇ということが分るの」とお雪は妹の方を見た。

「衣服きものの風や束髪きもので分りますわ」とお福が言った。

「復た寄るとは言わなかつたかい」と三吉は妻に尋ねた。

「ええ、被入いらつしやりたいような様子でしたよ」とお雪は妙に力

を入れて、「なんでも、停車場前の茶屋に寄つていらつしやるん

ですッて」

「行つて見て来るかな」

こう三吉は言捨てて、停車場の方を指して急いだ。

茶屋には、曾根が二人の連と一緒に休んでいた。連の一人は曾根の身内にあたる婦人で、艶つやの無い束髪や窠やつやつ々しいほど質素な服装などが早く夫に別れたらしい不幸な生涯を語っていた。今一人は肥え太った、口数のすくない女学生であった。いずれもすこし歩き疲れたという風で、時刻過ぎてからお腹なかをこしらえようとしていた。三吉は休茶屋にあるものを取寄せて、この人達をもてなした。

「何卒どうぞおかまい下さいますな。私共は持つて参りました……」

と言つて、年長の婦人は寂しそうに笑つた。山歩きでもする  
ように、宿から用意して来た握飯がそこへ取出された。肥つた女  
学生は黙つて食つた。

やがて、三吉はこの人達を城跡の方へ案内した。桑畠の間を通  
つて、鉄道の踏切を越すと、そこに大きな額の掛つた門がある。  
四人は熱い日の映つた赤土の崖がけに添うて、坂道を上つた。高い松  
だの、アカシヤだのの蔭を落している石垣の側へ出た。

どうかすると、連の二人はズンズン先へ歩いて行つて了しまつた。  
曾根は深張の洋傘こうもりに日を避けながら、三吉と一緒に連の後を追  
つた。

大きな石を積み上げた古い城跡には、可憐な薔薇ばらの花などが咲



乱れていた。荒廃した石段を上つて、天主台のところへ出ると、長い傾斜の眺望が四人の眼めのまえ前に展ひらけた。

三吉はその傾斜の裾すその方を指して見せて、林に続く村落の向にはある風景画家の住居もあることなどを語り聞かせた。曾根は眼を細くして、

「私もこうして人の知らない処へでも来ていたらばと思います」と眺め入りながら沈み萎しおれた。

松林の間を通して、深い谷の一部も下瞰みおろされる。そこから、谷底を流れる千曲川ちくまがわも見える。

夕立を帯びた雲の群は山の方角を指して松林の上を急いだ。遽に然わかザアと降つて来た。三吉は天主台近くにある茶屋の二階へ客を案内した。広い座敷へ上つて、そこで茶だの菓くだもの物だのを取り寄せながら、一緒に降つて来る雨を眺めた。廊下の欄てすりから手の届くほど近いところには、合ねむ歡木や藤が暗く掩おほ冠かぶさつていた。雫しずくは葉を伝つて流れた。

冷ひやひや々とした空気は三吉が心の内部なかまでも侵入はいつて来た。どうかすると彼は、家の方を思出したような眼付をしながら、夏梨をむく曾根の手を眺めていた、曾根が連の寡婦やもめは宗教の伝道に従事していることなどを三吉に語つた。こういう薄命な、とはいえ独りで立つて行こうとするほど意志の堅い婦人は、まだ外にも、曾

根の周囲まわりにあつた。曾根は女の力で支えられたささような家族の中に居て、又、女の力で支えられたような芸術たずさわに携つていた。時とすると、彼女の言うことは、岩の間を曲り折くねつて出て来る水のように冷たかつた。

間もなく夏の雨は通り過ぎた。三吉は客と一緒にこの眺望の好い二階を下りた。四人は高い石垣について、元来た城跡の道を歩いて行つた。

雨がかかると鶯うぐいの象かみたちあらわが顕れるように言い伝えられた大きな石の傍へ来掛る頃は、復た連の二人がサツサと歩き出した。二人の後姿は突出た石垣の蔭に成つた。

曾根は草木の勢に堪たえ難いような眼付をして、

「山の上へ参りましたら病氣も癒るだろう、海よりは山の方が好い——なんて懇意な医者に言われるもんですから、人様も憐んで連れて来て下すつたんですけれど……やっぱり駄目です……」

独身でいる曾根の懊惱は、何とも名のつけようの無いもので有つた。彼女は医者 of 言葉をすら頼めないという語気で話した。

「尤も、僅か一週間ばかりの故だとは言いますけれど……」と復た曾根は愁わしげに言つた。

「貴方のはどういふ病氣なんですか」と三吉は尋ねて、歩きながら巻煙草に火を点けた。

「我の持病です」と曾根は答えた。

暫時二人は黙つて歩いた。目映しい日の光は城跡の草の上に

落ちていた。

「あんまり考え過ぎるんでしよう」

と三吉は嘲るあざけように笑って、やがて連の人達に追付いた。

城門を出たところで、曾根は二人の婦人と一緒に世話に成った礼を述べた。鉄道草の生い茂おった踏切のところを越して、岡の蔭へ出ると、砂まじりの道がある。そこで曾根は三吉に別れて、疲れた足を停車場の方へ運んだ。

「曾根さんも相変らずの調子だなア」

こう三吉は口の中で言ってみて、家を指して帰って行った。

お雪は屋外そとに出して置いた張物板を取込んでいた。そこへ夫が帰つて来た。曾根のことは二人の話に上つた。

「ほん真実に、曾根さんはお若いんですねえ……」とお雪は乾いた張物を集めながら言った。

「女の年齢としというものは分らんものサ」と三吉も入口の庭に立つて、「俺おれは二十五六だろうと思うんだ」

「まさか。あんなにお若くつて——二十二三位にしか見えないんですもの」

「ひとり独身ひとりでいるものは何時までもああサ」

「それに、あんなに派手にしていらつしやるんですもの」

「そうさナア。あの人にはああいう物は似合わない」

「紫と白の荒い縞しまの帯などをしめて……あんな若い服装なりをして……」

「あの人ののはツクルと不可いけない。洒瀟さつぱりとした平素ふだんの服装なりの方が可い。縮緬ちりめんの三枚重かなんかで撮とった写真を見たが、腰から下なぞは見られたものじゃなかった。なにしろ、ああいう気紛きまぐれな人だから、種々な服装をしてみるんだらうよ……ある婦人おんながあの人を評した言葉が好い、他ひとが右と言えば左、他が白と言えば黒いつて言うような人だトサ」

「恹好りこうそうな方ですねえ。私もああいう恹好りこうな人に成つてみたい——一日でも可いから……ああ、ああ、私の気が利かないのは性分だ……私はその事ばかり考えているんですけれど……」

こう言つて、お雪は萎しおれた。

直樹とお福とは部屋の方で無心に口笛を吹きかわしていた。

その晩、三吉は直樹やお福を集めて、冷すずしい風の来るところで話相手に成つた。

「さあ、三人でかわりばんこに一ツずつ話そうじゃ有りませんか」と直樹が言出した。「私が話したらば、その次にお福さん、それから兄さん」

「それじゃ泥棒廻りだわ」とお福が混まぜ反かえす。

「そんなら、兄さんから貴方」

「私は出来ません。話すことが無いんですもの」

こう若い人達が楽しそうに言い争つた。雑談は何時の間にか骨ト



ランプ  
牌の遊に変わった。

「姉さんもお入りなさいよ」と直樹はお雪の方を見て勧めるように言った。

「私は止よめます」とお雪は子供の傍で横に成る。

「何故？」と直樹はツマラなさそうに。

「今夜は何だか心こころもち地ちが悪いんですもの——」と言って、お雪は小さな手をシャブっている子供の顔を眺めた。

無邪気な学生時代を思わせるような笑声が起った。「ああ、ツライなあ、運が悪いなあ」などと戯れて、直樹が手に持った札を数える若々しい声を聞くと、何時もお雪は噴飯ふきださずにいられないのであるが、その晩は一緒に遊ぼうともしなかった。急にお房は

反返そりかえつて、鼻を鳴らしたり、足で蹴けつたりした。お雪は肥え太つた子供の首のあたりへ線香の粉にしたのを付けた。お房は怒つて、泣いた。乳房を咬くわえさせて、お雪は沈んで了つた。

田舎いなかの盆過いなかに、復た曾根は三吉の家を訪ねた。その時は一人でやつて来た。水車の音も都会の人にはめずらしかつた。暫時しばらく彼女は家の門口に立つて、垣根のところから南瓜なの生り下つたような侘わびしい棲居すまいのさまを眺めた。

お雪は裏の柿の樹の下へ洗せんたく濯物が乾いたかを見に出た。直樹は遊びに出て居なかつた。

「曾根さん——」

とお雪は女の客を見つけて、直に家の内へ案内した。

寂しくしている三吉も喜んで迎えた。曾根が一人で訪ねて来たということは、ある目に見えない混雑を三吉の家の内へ持もちきた来した。曾根は、戸の間隙すきまからでも入って来て、何時の間にか三吉の前に坐っている人のようであつた。

「お雪、鮎すしでも取りにやっておくれ。それから、お前も話しに来るが可い」と三吉は妻の居る処へ来て言った。

「私なんか……」とお雪はすねる。

「そう言うものじゃないよ。ああいう人の話も聞くものだよ」

こう言つて置いて、三吉は客の方へ戻つた。

庭に咲いた松葉牡丹ぼたん、凌霄葉蘭のうぜんらんなどの花の見える奥の部屋で、三吉は大きな机の上へ煙草盆を載せた。音楽や文学の話が始まった。蜂はちと蟻ありと蜘蛛くもの生活に関する話なども出た。

「こういう田舎で御座いますから、何にも御構い申すことが出来ません」

とお雪は、子供を抱きながら、取寄せたものを持運んで来た。

「まあ、房ふうちゃん御座いますか」

と曾根なつかは可懐なつかしげに言つて、お雪の手から子供を借りて抱いてみた。膝ひざの上に載せて、頬ほおを推当おしあてるようにもしてみた。お房ふうは見慣れない他よその叔母おばさんを恐れたか、声を揚げて泣叫ぶ。土産みやげにと用意して来た翫おもちゃ具ぐを曾根が取出して、それを見せても、聞入

れない。お雪はこの光景ありさまを見ていたが、やがてお房を抱取つて、  
炉辺の方へ行つて了つた。

暫時しばらく、曾根は耳を澄まして、お房の泣声を聞いていた。

「昨晚は——私は眠られませんでした」

と曾根が言つて、避暑地の霧に悩まされていることなどを話出した。彼女は、何かこうシツカリと捉つかまる物でも無なければ、自分の弱い体からだ躯からだまで今に何処へか持つて行かれて了うような眼付をした。「日記といえば」と曾根は又思出したように、「私も日記をつけてみましたけれど……不平なようなことばかりで、面白くないのものですから、大晦日おおみそかの晩に焼いて了いました。そして、元日に遺言状を書きました。ああ狂きちがい……私のようなものが世の中に居る

のは間違なんで御座いますよ……」

深く<sup>さへさへ</sup>泣<sup>な</sup>々とした彼女の黒瞳<sup>くろめ</sup>は自然と出て来る涙の為に輝いた。

その日、曾根は興奮した精神<sup>こころ</sup>の状態<sup>ありさま</sup>にあった。どうかすると、<sup>かなしみ</sup>悲哀の底から浮び上ったように笑って、男というものを嘲るような語気で話した。

お雪はこの仲間入に呼出されても、直に勝手の方へ行つて、妹を相手に洗濯物を取込むやら、霧を吹いて畳むやらしていた。曾根が礼を述べて、別れて帰る時、お雪は炉辺で<sup>あいさつ</sup>挨拶した。

「まあ、宜しいじや御座いませんか……もつと御<sup>ごゆっくり</sup>緩なすつたら<sup>いかが</sup>奈何で御座います……」

と客を引留めるように言ったが、曾根は汽車の時間が来たから

と断つて、出た。三吉はお雪に言付けて、停車場まで見送らせることにした。

お雪が子供を背負いながら引返して来てみると、机の下に、「お雪さまへ、千代」とした土産が置いてあった。千代とは曾根の名だ。

「曾根さんは黙ってこういうことをして行く人だ」と三吉が笑った。

お雪はその紙に包んだ女持の帕子ハンケチを眺めながら、「汽車が後おくれて、大分停車場で待ちましたよ——三十分の余も」

「何か話が出たかネ」と三吉は聞いてみた。

「曾根さんが私のことを、『大變貴方は顔色が悪い』なんて……」

何となく家の内はガランとして来た。三吉夫婦は互に顔も見合せずに、黙って食卓にむか対うことすら有った。

むずかしい顔付をして考え込んでばかりいるような夫の様子は、お雪の小さな胸を苦しめた。このきげん機嫌の取りにくい夫の言うことは、又、彼女に合点の行かないことが多かつた。夫はお房が可愛くて成らないという風で、「この児ほつぺたの頬は俺おっかの母親おっかさんに彷彿そっくりだ」などと言っているかと思えば、突だしぬけ然にお雪に向つてこんなことを言出す。

「房ちゃんほんとは眞実に俺の児かねえ」



「馬鹿な……自分の児でなくて、そんなら誰の児です」

こういう馬鹿らしい問答ほど、お雪の気を傷めることは無かつた。

「一体、お前はこういう積りで俺の家へ嫁かたづいて来た……」

「どういう積りなんて、そんな無理なことを……」

「いつそ俺は旅にでも出て了おうかしらん——どうかすると、そういう気が起つて来て仕方ない」

「まあ、どうしてそんな氣に成るんでしようねえ」

お雪はもう呆あきれて了う。「他所よそから帰つて来ると、自分の家ほ

ど好い処は無ないなんて、よく言うじや有りませんか——真ほん実に、

貴方は氣が変り易やすいんですねえ」こうも並べてみる。お雪には、

夫が戯れて言うとはどうしても思われなかつた。それは、唯考えてみたばかりでも、彼女の心をムシヤクシヤさせた。

熱い日が射<sup>あた</sup>つて来た。三吉の家では、前の年と同じように、鴨<sup>か</sup>居<sup>もい</sup>から鴨居へ細引を渡した。お雪が生家<sup>さと</sup>から持つて来たもので、

この田舎では着る時の無いような着物が虫干する為に掛けられた。

結婚の時に用いた夫の羽織袴<sup>はおりはかま</sup>、それから彼女の身に纏<sup>まと</sup>うた長<sup>なが</sup>

襦袢<sup>ゆばん</sup>の類まで、吹通る風の為に静かに動いた。小泉の兄の方が

ら送った結納<sup>ゆいのう</sup>の印の帯などは、未だ一度も締たことが無くて、

そっくり新しいまま眼<sup>めのまえ</sup>前に垂下つた。

「ああ、ああ、着物も何も要<sup>い</sup>らなくなつちやつた」

と言つて、お雪は深い溜息<sup>ためいき</sup>を吐<sup>つ</sup>いた。

子供は名倉の母から貰ったネルの単衣ひとえを着せて、そこに寐ねかしてあつた。

「それ、うまうま」

とお雪は煩うるさそうに横に成つて、添乳そえちをしながら復た自分の着物ものを眺めた。

午睡ひるねから覚さめた時の彼女は顔の半面と腰骨のあたりを射し入る光線に照らされていた。彼女はすこし逆上のぼせたような眼付をして身を起した。額も光つた。こういう癩かんしゃく癩癩の起きた時は、平常ふだんより余計に立働くのがお雪の癖で、虫干した物を片付けるやら、黙もくつて拭掃除ふきそうじをするやらした。彼女は夫や客の為に食事の用意をして置いて、一緒に食おうともしなかつた。裏の流の水草に寄

螢は、桑畠の間を通つて、南向の部屋に近い垣根の外まで迷つて来た。お雪は濡縁のところ立つて、何の目的もなく空を眺めた。隣のおばさんは鎌を腰に差して畠の方から帰つて来る。桑を背負つた男もその後から会釈して通る……

「一筆しめし上げまいらせ。さてとや暑さきびしく候ところ、皆様にひとふでは奈何御暮しなされ候や。私よりも一向音信いたさず候えども、御許よりも御便り無おんもと之候故、日々御案じ申上げ候。御蔭さまでて当方は一同無事に日を送り居り候。御安心被くだされ下たく候。私こと、毎日々々そこここと手伝見舞にまいり、いそがしく、それ

に仕事の方も間に合せたくと存じ、それ着物の浸抜しみぬき、それ洗あら張はりと、騒ぎにばかり日を暮し、未だ父上の道中着物ほどきもせずはに居るような仕末に御座候。

——私よりの御無沙汰ごぶさた、右の次第にて、まことに申訳なく候えども、あまり御許おんもとよりも手紙なきゆえ、定めし子供を控え手もすくなく其日々々のことに追われ、暇いとまなき身からだとは御察し申しながら、父上ちやく着なされ候てより未だ一通の手紙もまいらず、御許のこのみ氣に懸り、心許なくぞんじ居り候。奈何いかいたし候や。あるいは御許の心変りしやとも考え、斯かくては定めし夫に対しても礼義崩れ、我儘わがままなることもなきやと、日々心痛いたし居り候。御許ばかりは左様の事なきかとは思ひ居り候えども、人間の我儘は

いずれにもあることなれば、実に安心の成らぬものに御座候。それにしても、御許にかぎりて、左様なことは有るまじくと存じ居り候。何につけ善よしあし悪とも御便り下されたたく候。

——お福も最早もはや学校も間近に相成り候。長々の間、定めて御心を懸け下され候ことと、ありがたく、父上ともども喜び居り候。

——就ついては、先日より何か送りたいくと存じながら、彼あれや是これやにひかされて今日まで延引いたし、誠に不本意に御座候。只今小包便にて、乾塩かんしおびき引少々、鰹かつおぶし節五本、豆せんべい、松風いずれも少々、前掛一枚、右の品々めずらしくも無い物に御座候えども、御送り申上候。乾塩引は素しろうと人の俄にわか干しに候間、何分身は砕け、うまみも無く候。されど今は斯この品ばかりの時節もつとに候。尤

も、斯の品にて小なる物一本四十五錢に御座候。送り物に直段ねだんが書きなどは可笑おかしく候。

——御話もいろいろ有之候えども、今日は之にて御免を願ひ上げ候。福子へも宜敷よろしく御伝え下されたく候。先ますは、あらあら。

母より

### 雪子どの

末筆ながら旦那様へ宜敷御申訳くだされたく、御頼申上げ※。又、御近所へは何も進あげる物なきゆえ、何卒々々よろしく御伝え下されたく候」

お雪はしばらく生家さとへも書かなかつた。この母からの便りは彼女に種々いろいろなことを思わせた。お雪は、母の手紙を顔に押当てて、

泣いた。

「どうしてそう家が面白くないんでしょうねえ」

こうお雪は夫の傍へ子供を抱いて来て、嘆息するように言った。奥の庭の土塀どべいに近く、大きな李すももの樹があつた。沢山かたま密集つて生なつた枝からは、紫色に熟した実がポタポタ落ちた。三吉は沈思を破られたという風で、子供の方を見て、

「なにも、俺は面白い家庭などを造ろうと思つて掛つたんじゃない——初かんなんから、艱難かんなんな生活を送る積りだ」

「でもこの節は毎日々々考えてばかりいらつしやるじゃ有りませ



んか」とお雪は恨めしそうに、「ああ、家を持ってこんな風に成ろうとは思わなかった」

「じゃ、こうだろう、お前のは平素芝居でも見られるような家へ行きたかったんだろう」

「そう解とつちや困りますよ。芝居なんか見たか有りませんよ。直に貴方あなたはそれだもの。なんでも私の為することは気に入らない。第一、貴方あなたは何事なんにも私に話して聞かせて下さらないんですもの」

「こうして話してるじゃないか」と三吉は苦にが笑わらいした。

「話してるなんて……」と言つて、お雪は子供の顔を眺めて、

「ああ、もつと惻りこ好うな女にに生れて来れば好かつた。私も……私も

……この次に生れ變つて来たら……」

「生れ變つて来たたら、どうする」

お雪は答えなかつた。

「あんまり貴方も考え過ぎるんでしよう」

とお雪は冷かに微笑ほほえんで、「ちと曾根さんの方へでも遊びに行つてらしたらどうです」

「余計な御世話だ」と三吉は力を入れて言つた。「お前は直に、曾根さん、曾根さんだ。それがどうした。お前のような狭い量見で社よのなか会の人と交際が出来るものか」こう彼は言おうとしたが、それを口には出さなかつた。

「だって、こうして引籠ひっこんでばかりいらつしやらないで、御出掛に成つたら可いでしょうに……」

「行こうと、行くまいと、俺の勝手じゃないか」

土堀の外の方では、近所の子供が集つて李を落す音がした。

「房ちゃん」とお雪は子供を抱き《だきしめ》るようにして、

「父さんに嫌きらわれたから、彼方あつちへ行きましょう」

力なげにお雪は夫の傍を離れた。三吉は、「妙なことを言うナア」と口の中で言つてみて、復た考え沈んだ。

暮れてから、三吉と直樹とは奥の部屋に洋燈ランプを囲んで、一緒に読んだり話したりした。

急にお雪は嘔はきけ気を覚えた。縁側の方へ行つて吐いた。

「姉さん、どうなすつたんですか」

と直樹はお雪の側へ寄つて、背中を撫なでてやる。

「ナニ、何でもないんです」とお雪は暫時しばらく動かずにいた後で言った。「難有ありがとう——直樹さん、もう沢山です」

この嘔吐の音は直樹を驚かした。三吉は何か思い当ることが有るかして、すこし眉まゆを顰ひそめた。流ながし許もとの方から塩水を造つて持つて来て、それを妻に宛行あてがつた。

その晩は、お雪はお福と一緒に蚊帳かやを釣つて、平常いつもより早くその内へ入つた。蚊が居うるて煩さわいと言いながら、一度横に成つた姉きょう妹まいは蠟燭ろうそくを点ともして、蚊帳の内を尋ね廻つた。緑色に光る麻蚊帳を外から眺めながら、三吉と直樹の二人は遅くまで読んだ。

お雪は何時までも団扇うちわの音をさせていたが、夫や直樹の休む頃に復た起きて、蚊帳の外で涼んだ。三吉も寝る仕度をして、子供

の枕まくらもと許のぞを覗くと、お雪が見えない。

「何しているんだろうナア」

こう独ひとりごと語ごとのように言つて、三吉は探してみた。表の入口の

戸が明いていた。隣近所でも最早も寝たらしい。向の料理屋の二階

だけは未だ賑にぎやかで、三味線の音だの、女の笑い声だのが風に送ら

れて聞えて来る。瓦斯ガスの燈あかりはシヨンボリとした柳の樹を照してい

る。一ひとあし歩あし三吉が屋外そとへ出てみると、暗い空には銀河が煙の様に

白かつた。

「お雪——」

と三吉が呼んだ。お雪は白い寝衣ねまきのまま、冷々とした夜気に

打たれながら、彼方あちこち是方と歩いてしたが、夫の声を聞きつけて引

返して来た。

「オイ、風邪を引くといかんぜ」

と三吉は妻を家の内へ呼入れて、表の戸を閉めた。

急に、子供は身体が具合が悪かった。三吉の学校では暑中休暇も短いので、復た彼は弁当を提<sup>さ</sup>げて通う人であったが、帰つて来てみると、家のものが皆なでお房の機嫌<sup>きげん</sup>を取っていた。お房は母親から離れずに泣き続けた。

「まあ、どうしたんだらう、この児は」とお雪は持<sup>もて</sup>余<sup>あま</sup>している。「智慧熱<sup>ちえねつ</sup>という奴かも知れんよ」と三吉も言つてみた。「橋本の

薬をすこし服のませてみるが可い」

夫婦は他の事を忘れて、一緒にお房のことを心配した。子供の泣声ほど直接じかに三吉の頭脳あたまへ響けて、苦痛を与えるものは無かった。あまりお房が泣止まないの、三吉は抱取つて、庭の方へ行つて見せるやら、でんでん太鼓だの笛だのを取出して見せるやら、種々にして賺すかしたが、どうしてもお房の気に入らなかつた。

お房の発熱は、大人の病氣と違つて、さまざまなことを夫婦に考えさせた。その夜は二人とも、熱臭い子供の枕許に集つて、一晚中寝ずにも看護をしようとした。やがてお房は熟睡した。熱もそうタイしたことでは無いつかれらしかつた。三吉はお房の寝顔を眺めていたが、そのうちに疲労つかれが出て、眠くなつた。

何時の間にか三吉は時と場所の区別も無いような世界の中に居た。そこには、唯恐しさがあつた。無智な子供のような恐しさがあつた……見ると病室だ。出たり入ったりしているのは医者らしい人達だ。寝台ねだいの上に横たわっている婦人は曾根だ。曾根は三吉に蒼あおざめた手を出して見せて、自分の病気はここに在あると言う。

人差指には小さい穴が二つ開いている。痛そうに血が浸染にじんでいゝる。医者が来て、その穴へU字形の針金を填はめると、そんな酷ひどいことをしてどうすると叫びながら、病人は子供のよう泣いた……

三吉はすこし正氣かえに復つた。未だ彼は曾根の病床に附いていて、看護を怠らないような気がしていた……ふと眼が覺めた。気がつ





に停車場の方へ向いた。

上りの汽車が来た。

午後の一時過には、三吉は汽車の窓から浅間の方を眺めて、直樹のことを想像しながら行く人であった。濃い灰色の雲は山の麓ふもとの方まで垂下つて来ていた。

高原の上はヒドい霧であった。殆んど雨のような霧であった。ほと停車場ステーションから曾根の宿まで、道は可成かなり有る。古い駅路に残った旅や舎どやへ着いた時は、三吉が学校通いの夏服も酷く濡ぬれた。

曾根が借りている部屋は、奥の方にある二階の一室で、そこに

は女ばかり三四人集っていた。やもめぐら 嬬 暮しをしつけた人達は、田舎の旅舎へ来ても、淋しい男おとこけ 氣のない様子に見えた。いずれも煙草一つ服のまもないような婦人の連で、例の曾根の親戚にあたるという人は見えなかつたが、肥った女学生は居た。煙草好きな三吉はヤリキレなくて、巻煙草を取出しながら独りでふか 燻し始めた。

「あれ、煙草盆もあ 進げなかつた」

と曾根はサツパリした調子で言つて、客の為に宿から取寄せて出した。女学生はかわるがわる茶を入れたり、菓物くだものを階下したから持運んだりした。歩いて来た故せいか、三吉ばかりは額から汗が出る。曾根はつつましうに、

「まあ、そんなに御暑いんですか。私は又、御寒いと思つていま

すのに」

こう言いながら、白い単衣ひとえの襟を搔かき合あわせた。彼女は顔色あおも蒼あおざめていた。

何時の間にか連の人達は出て行つた。窓の障子の明いたところからは、冷々とした霧が部屋の内まで入つて来た。曾根の話は、三吉の家を訪ねた時のことから、草木の茂つた城跡の感じの深かつたことや、千曲川の眺望ながめの悲しく思われたことなどに移つた。三吉は曾根の身体のことを尋ねてみた。

「別に変りましたことも御座いません」と曾根は悩ましそうに、「山を下りましたら、海かい辺へんへ参つてみようかと思ひます」

こう言つて、それから海と山の比較などを始める。「たしか、

小泉さんは山が御好なんで御座いましたねえ」とも言った。

三吉はすこし煩うるさそうに、

「医者は何と云うんですか、貴方あなたの御病気を」

「医者？　医者のことなぞがどうして宛あてに成りましょう。女の病気とさえ言えば、直ぐ歇ヒステリイ私的里……」

會根の癖として、何時いつでも自身の解剖に落ちて行く。彼女はそこまで話を持って行かなければ承知しなかった。

「私の友達と一緒に音楽を始めました人も、そう申すんで御座いますよ——私ほど気心の解らない者は無い、こうして十年も交際つきあっているのにツて」會根は自分で自分を嘲あざけるように言つた。

三吉も冷やかに、「貴方のは——誰もこう同情を寄せることの

出来ないような人なんでしょう」

「では、私を御知りなさらないんだ」と言つて、曾根は寂しそうに笑つて、「昨晩は悲しい夢を見ましたんで御座いますよ……」

三吉は曾根のシヨンボリとした様子を眺めた。

「私は死んだ夢を見ました……」

こう言つて、曾根は震えた。暫時しばらく二人は無言でいた。

「ああ……私は東京の方へ帰るといふ気分になりません。東京へ帰るのは、ほんと真実にいや厭で……」曾根は嘆息するように言出した。

「してみると、貴方も孤独な人ですかネ」と言つて、復た三吉は巻煙草を燻した。窓の外は陰気な霧に包まれたり、時とすると薄日かすが幽かに射したりした。

旅情を慰める為に、曾根が東京から持って来た書籍は机の上に置いてあつた。それを曾根は取出した。旅に来ては客をもてなす物も無かつたのである。その曾根が東京の友達から借りて来たと言つて、出して見せたような書籍は、以前三吉も読み耽ふけつたもので、そういう書籍の中にあるような思想に長いこと彼も生活していた。この山の上へ移つてから、次第に彼の心は曾根の愛読するような書籍から離れた。折角の厚意と思つて、三吉はその書籍を手にとつて見た。しかし、彼は別の話に移ろうとした。こうして彼が曾根の宿へ訪ねて来たのは、他でもなかつた。彼は平素曾根いづも

の口から聞く冷い刺すような言葉を聞きたくて来たのである。自分の馬鹿らしさを嘲られたくて来たのである。

意外にも、その日の曾根は涙ぐんでいるような人であった。何となく平素いっもよりは菱しおれていた。

「小泉さん、ここへ被いら入しつて御覧なさい——まあ、ここまで被入しつて御覧なさい」

曾根は窓に近い机の側へ行つて、そこに客の席を作ろうとしたが、三吉は辞退した。

「ここで沢山です」と三吉は答えて、新しい巻煙草に火を点つけた。柱には、日蔭干ひかげぼしにした草花の束が掛けてあつた。曾根は壁のところかに立つて、眼を細くしてその花束を嗅いで見せた。親しい



ようでも、何処か三吉には打解けないところが有るので、やがて曾根も手持無沙汰に元の席へ戻った。彼女は、二度まで三吉の家を訪ねて世話に成ったことを考えて、何卒して客をもてなしたいという風で有った。林檎<sup>りんご</sup>などをむいて勧めた。二人の雑談は音楽のことから、ある外国から来ている音楽者の上に移った。

「先生がこう申しますんです」と曾根はその年老いた音楽者のことを言った。「曾根さん、貴方は宗教<sup>おしえ</sup>を信じなければいけない、宗教を信じなければ死んだ後で復た御互に逢<sup>あ</sup>うことが出来ませんからツて——死んで極楽へ行く積りも御座いませんけれど、逢えませんか心細<sup>こまかい</sup>う御座ますねえ……」

間もなく汽車の時間が来た。三吉は宿の主人に頼んで、車を用

意して貰うことにした。

「今日は学校から直じかに汽車に乗ってやって来ました」と三吉が言  
つた。

「御宅へ黙って出ていらしたんでしよう……」と曾根も気の毒  
そうに苦にがわらい笑わらいした。

「何卒どうぞ、御帰りでしたら、奥さんに宜敷よろしく……」

家の方のことは妙に三吉の氣に掛つて来た。それを言出した時  
ほど、彼も平氣を装おうとしたことは無かつた。三吉は曾根に別  
れを告げて、復た霧の中を停車場の方へと急いだ。

日暮に近い頃、三吉は自分の住む町へ入つた。家の草屋根が見  
える辺あたりまで行くと、妙に彼の足は躑ちゆうちよ躑ちよした。平素ふだんとは違つて、

わざわざ彼は共同の井戸のある方へ廻道して、日頃懇意な家の軒先に立った。別に用事も無いのに、しばらくそこで近所の人と立話をした。その日の空模様では浅間登山の連中もさぞ困るであろうなどと話し合つた。ちらちら燈火あかりの点く頃に、三吉はブラリと自分の家へ歸つた。

こんな風に、ことわり断なしで外出した例は三吉に無いことであつた。直樹は山の上で一夜を明す積りで出掛けたので、無論夕飯には歸らず、夫婦ぎり互に黙つたまま食卓むかに對つて食つた。妻の気を悪くした顔付を見ると、三吉は話して差さしつかえ支の無いことまで話せなかつた。

夕飯の後、お雪は尋ねた。

「曾根さんは未だ居いらつしやいましたか」

この問には、三吉は酷ひどく狼狽ろうばいしたという様子をして、咽喉のどへ干乾ひからび付いたような声を出して、

「私が知るものかね、そんなことを」

と思わず知らずトボケ顔に答えた。三吉はウソを吐つかずにはいられなかった。そのウソだということを自分で聞いても隠されな  
いような気がした。

その晩、夫婦の取換した言葉は唯たったこれぎりであつた。物を言わ  
ないは言うよりか、どれ程苦痛であるか知れなかった。直樹は居  
ず、三吉は独りで奥の蚊帳の内に横に成りながら、自分で自分の  
為することを考えてみた。気味の悪い蚊帳は髪に触ふつて、碌ろくに眠ら

れもしなかった。

十二時過ぎた頃、お雪は寝衣のまま、別の蚊帳の内に起直つて、

「御休みですか」

と声を掛ける。三吉の方では返事もせず、沈まり返っていた。

お雪のすすりなき啜泣の音が聞えた。

「貴方、御休みですか」

と復た呼ぶので、三吉は眠いところを起されたかのように、

「何か用が有るか」

「何卒、どうぞ私に御暇を頂かせて下さい」

お雪は寢床の上に倒れて、声を放つてな哭いた。

「明日にしてくれ……そんなことは明日にしてくれ……」

こう三吉はさも草くたぶ臥れているらしく答えて、それぎり黙って来た。身動きもせずにいると、自分で自分の呼吸を聞くことが出来る。彼は寢床の上に震えながら、熟じゅと寝た振をしていた。そして耳を澄ました。お雪は泣きながら蚊帳の外へ出て、そこいらを歩く音をさせた。畳がミシリミシリ言う。箆たんす筒が鳴る。三吉は最早疑心に捕えられて了って、その物音を恐れた。そのうちに、蚊帳の内に寝かしてあった子供が泣出した。三吉は子供の傍の方で妻のなきじやくり歔泣の音を聞くまでは安心しなかった。

浅間登山の一行は翌日の午前になって帰って来た。直樹は好きな高山植物などを入口の庭に置いて草鞋わらじの紐ひもを解いた。

「兄さんにチョッキを借りて行つて、好い事をしました——寒くて震えましたよ」

こう直樹は三吉の顔を眺めて言った。山登りをした制服も濡れ萎れて見えた。この中学生はあけがた 暁に噴火口を見て、疲れた足をひきず 引摺りながら降りて来た。

直樹を休ませて置いて、三吉は何処どこへという目的めあてもなく屋外そとへ歩きに行つた。お雪の言つたことに対して、何とか彼は答えなければ成らなかつた。

午後に成つて、三吉はスタスタ歩いて帰つて来た。彼は倚より凭かか

つて眺め入っていた田圃たんぼの側わきだの、藉しいていた草だの、それから岡よぎを過る旅人の群などを胸むねに浮べながら帰つて来た。家へ戻つてみると、直樹は疲労つかれを忘れる為ために湯ゆに行つた留守で、お雪は又、子供を背負おぶいながら働はたらいていた。彼女は、「お暇やすみを頂たまかせて下さい」と言出したに似合にあわず、それ程避さけたい生活を送おくっている人とも見えなかつた。三吉は自分の部屋へ行つた。机ひろの上に紙かみを展ひらげた。

曾根——旅舎やじやの二階の壁のところところに立つて、花束はなむくを嗅かいで見せた曾根そねの蒼あおざめた頬ほは、未だ三吉の眼まなこにあつた。「吾儕われわれは友達ではないか——どこまでも友達ではないか——互たがひに多くの物ものに失望しつぱつして来た仲間同志なかまどうしではないか」この思想しんがえは、三吉みやうに取とつて、



見失うことの出来ないものであつた。

ここから三吉は曾根へ宛てて最後の別離わかれの手紙を書いた。「――あるいは、これを好しとみ給うの日もあるべきかと存じ候」と書いた。

この長く御無沙汰するという手紙を、三吉はお雪を呼んで見せた。それから、彼はすこし改まったような、決心の籠こもった調子で、こう言出した。

「お断り申して置きますが、僕の家は解散して了いますから」

「ええ……どうでも貴方の御好きのように……私は生家うちへは帰りませんから」

とお雪は恨めしそうに答えた。

何故夫が曾根への手紙を見せて、同時に家を解散すると言出したかは、彼女によく汲取くみとれなかつた。で、その手紙のことに就いては、「そんなことを為なさらないたツても可いでしょうに……」  
と言つてみた。

その時、お雪は不思議そうに夫の顔を熟視みまもつて、「誰も暇が貰いたくて、下さいと言うものは有りやしません」と眼で言わせていた。復た彼女は台所の方へ行つて働いた。

湯から歸つて来た直樹は、縁側に出て、奥の庭を眺めた。庭の片隅かたすみには、浅間から採つて来た植物が大事そうに置いてあつた。それを直樹は登山の記念として、東京への好い土産だと思つてい  
る。

この温和すなおな青年の顔を眺めると、三吉は思うことを言いかねて、何度かそれを切出そうとして、反かえつて自分の無法な思想かんがえを笑われるような気がした。

「直樹さん、すこし僕も感じたことが有つて、吾家うちは解散して了解かと思ひます」と三吉は話の序ついでに言出した。

直樹は答えなかつた。そして、深い溜息ためいきを吐いた。常識と同情じやうけいとに富んだこの青年の柔嫩やわらかな眼は自然おのずと涙を湛たたえた。

「君はどう思ふか知らんが」と三吉は言淀いよいよんで、「どういふものか家がウマくいかなひ……僕の考へでは、お雪は生家さとへ歸した方が可いかと思ふんです」

「しかし、兄さん」と直樹は涙ぐんだ眼をしばたいて、「それ

では姉さんが可哀想です。もし、そんなことにも成れば、一番可哀想なのは房ちゃんじゃ有りませんか」

「房ふうは可哀想サ」と三吉も言った。

長いこと二人は悄しよんぼり然として、言葉もかわさずに庭を眺めていた。

お雪は食事の用意が出来たことを告げに来た。それを聞いて、直樹は起たちがけに、三吉に向つて、

「ああ——私のように弱い者は、今のような御話を聞くと、最早何事なんにも手に付ません。私は実に涙もろくて困ります——」

「まあ、行つて飯でもやりましょう」と三吉も立上つた。

「兄さん、兄さん、真ほんとう実に考え直してみてください」

こう言つて、直樹は三吉の後を追つた。

直樹は三吉夫婦と一緒に食卓むかに対つても、絶間とめどがなく涙が流れるという風であつた。その晩は三人とも早く臥床ねどこに就いたが、互におちおち眠られなかつた。直樹は三吉と枕を並べてしくしくやりだす。お雪もその同おもいやり情じやうに誘われて、子供こどもに添乳そえちをしながら泣いた。この二人の暗いところで流す涙を、三吉は黙つて、遅くまで聞いた。

かたくな頑固がんこな三吉が家を解散すると言出すまでには、離縁りえんの手続、

妻を引渡す方法、媒妁人なこうどに言つて聞かせる理由、お雪の荷物の取片付、それから家を壊した後の生活のことまでも想像してみたので、一度それを口にしたら、容易に譲ることの出来ないという彼

の心も、いくらか和やわげられたような日が来た。「君の志は有難い——まあ、僕もよく考えてみよう」こう三吉は直樹に言つて、それから復た学校の方へ出掛けたが、帰つて来てみると、曾根からの葉書が舞込んでいた。彼女も避暑地を発たつ、奥様へ宜敷、房子様へも宜敷、と認しためてあつた。三吉から出した手紙は東京へ宛てたので、未だ曾根は知る筈はずがない。そんな手紙が待つとは知らずに、彼女は帰京を急ぐのであつた。

到頭、三吉も讓歩した。家の解散も見合せることにしたと言出した。それを聞いて、お雪はホツと息を吐ついた。直樹も漸ようやく安心したという顔付で、三吉が自分の意見を容いれたことを喜んだ。

「姉さん、浅間の話でもしましょう」

と直樹は勇ましそうに笑ながら言った。その時に成つて、三吉も登山の話をする氣に成つた。「一度行かない馬鹿、二度行く馬鹿」と土地の人のよく言うことなどを持出した。そして、世帯を持つからその日までのことを考えてみて、今更のように家の内を歩いてみた。

直樹の出発はそれから間もなくで有つた。この青年が中学の制服を着けて、例の浅間土産を手に提げて、名残惜しなごりそうに別れを告げて行く朝は、三吉も学校通いの風呂敷包を小脇こわきに擁かかえながら、一緒に家を出た。

「直樹さん。左様なら」

とお雪は子供を抱いて、門口のところまで出て見送つた。

停車場で直樹に別れた三吉は、直ぐその足で軌路レールの側わきを通つて、学校へ廻つた。日課を終つた後、三吉は家の方へ帰ろうとして、復た鉄道の踏切を越した。その時は城門の前を横に切れて、線路番人の番小屋のある桑畠のところへ出た。番人は緑色の旗を示しながら立つていた。暫時しばらく三吉も佇立たたずんで眺めた。轟然ごうぜんとした地響と一緒に、午後の上り汽車は三吉の前を通過ぎた。

「直樹さんも行つて了つた。曾根さんも行つて了つた」  
 こう三吉は思いやつた。

ぼつぼつと汽車が置いて行つた煙は、ひとかたまり一団ひとかたまりずつ桑畠の間を這つて、風の為に消えた。停車場の方で、白い蒸気を噴出す機関車、馳かけて歩く駅夫、乗つたり降りたりする旅客の光景さまなどは、



その踏切のところから望むことが出来る。やがて盛んな汽笛が起つた。

「直樹さん、左様なら」

と三吉は朝一番で発った人のことを思出して、もう一度別れを告げるように口の中で言ってみた。汽車は出て行つた。三吉は山の上に残つた。

## 七

一年経つた。三吉は沈んで考えてばかりいる人ではなかつた。

彼の心は事業しごとの方へ向いた。その自分の氣質に適した努力の中に、

何物を以ても満すことの出来ない心の空虚を充そうとしていた。

彼が探していた質実な生活は彼の周囲に在った。先ず彼は眼を開いて、この荒寥とした山の上を眺めようとした。そして、その中にある種々な物の意味を自分に学ぼうとしていた。

お雪も最早家を持つてから足掛三年に成る。次第に子供も大きく成った。家には十五ばかりに成る百姓の娘も雇入れてあつた。年寄の居ない三吉の家では、夫婦して子供を育てるといふことから容易でなかつた。

丁度三吉は学校の用向を帯びて出京した留守で、家では皆な主人の帰りを待侘びていた。

「今晚は」

こう声を掛けて、近所の娘達が入つて来た。この娘達は、夕飯の終る頃から手習の草紙を抱かかえて、お雪のところへ通つて来るよ  
うに成つたのである。

「何卒、お上んなさいまし」とお雪は入口の庭の方へ子供を向け  
て、自分も一緒に蹲しゃがみながら言った。

「まあ、房ちゃんちゃんの肥つていなさること」と娘の一人が言った。

他の娘も笑いながら、「房ちゃん、シイコが出来ますかネ」

お房は半分眠っていた。お雪は子供の両足を持添えて、「シ  
ー」とさせて、やがて自分の部屋の方へ連れて行つた。

子供の寢床は敷いてあつた。お雪が寢衣を着更えさせていると、  
そこへ下婢おんなは線香の粉にしたのを紙に包んで持つて来た。お房は

股またずれ擦がして、それが傷いたそうに爛ただれている。お雪は線香の粉をなすつて、襠むつき褌あを宛あてて、それから人形でも縛るようにお房の足を縛った。

お雪が横に成つて子供を寝かしつけている間に、近所の娘達はランブランブの周まわり圍へ集った。下婢も台所を片付けて来て、手習の仲間入をさして貰った。ともかくもこの娘は尋常科だけ卒業したと言つて、その前に雇つた下女おんなのように、仮名の「か」の字を右の点から書き始めたり、「す」の字を結むすびだけ書き足すようなことはしなかつた。

しかし、この下婢おんなは性来読書よみかきが嫌きらいと見えて、どんなに他の娘達が優美な文字を書習おうとして骨折うづらやつていても、それを羨うらやま

しいとも思わなかつた。お雪が起きて来て、ヨモヤマの話を始め  
る頃には、下婢も黙つて引込んでいない。無智な彼女はまたそれ  
を得意にして、他の娘達よりも喋舌しゃべつた。

お房を背負おぶつて町へ遊びに行つた時、ある人がこんなことを言  
つたと言つて、それを下婢が話し出した。

「教師の赤にしては忌々いめいめしいほどミットモねえなあ——赤もフ  
クレてるし、子守もフクレてるし、よく似合つてらあ」

お雪も他の娘も笑わずにいられなかつた。

「明日はこちらの叔父さんも御帰りに成りやしよう」

と娘の一人が言つた。お雪はこの娘達を相手にして、旅にある  
夫の噂うわさをした。

東京から三吉は種々な話を持って帰って来た。旅に出て帰って来る時ほど、彼も家を思い妻子を思うことはなかつた。

「房ちゃん、御土産おみやが有るぜ」

と三吉は旅の鞆かばんをそこへ取出した。

「父さんが御土産を下さるツて。何でしょうね」とお雪は子供に言つて聞かせて、鞆の紐ひもを解ときかけた。「まあ、この鞆の重いこと。父さんの荷物は何時いつでも書籍ほんばかりだ」

下婢おんなは茶を運んで来た。三吉は乾いた咽喉のどを濡うるおして、東京にあ

る小泉の家の変化を語り始めた。兄の実が計画していた事業は驚くべき失敗に終つたこと、更に多くの負債を残したこと、銀行の取引が停止されたこと、これに連関して大将の家まで破産の悲運

に陥りかけたこと、それから実の家ではある町まちなか中の路地のよう  
な処へ立退たちのいたことなどを話した。

「姉さんの姉さんで、ホラ、お杉さんという人が有ったろう。あ  
の人も兄貴の家で亡くなった」と三吉は附添つけたした。

「宗さんはどうなさいました」とお雪が聞いた。

「宗さんか。あの人は世話してくれるところが有って、そつちの  
方へ預けてある。今度は俺おれは逢あわなかつた。見舞として菓子だけ  
置いて来た——なにしろ、お前、兄貴の家では非常な変り方サ。  
でも兄貴は平気なものだ」

「姉さんも御心配でしょうねえ」

こう夫婦が話し合っていると、お房はそこへ来て茶を飲みたい

と迫る。母が飲ませてやると言えば、それでは聞入れなかつた。

なんでもお房は自分で茶碗ちやわんを持って飲まなければ承知しなかつた。

終しまには泣いて威おどした。

「未だ独ひとりで飲めもしないくせに」

と言つて、お雪が渡すと、子供は茶碗の中へ鼻も口も入れて飲もうとした。皆なコボして了しまつた。

「それ、御覽なさいな」とお雪は帕ハンケチ子こを取出した。

「ア——舌打してらあ。あれでも飲んだ積りだ」と三吉が笑う。

「この節は何でも母さんの真似まねばかりしてるんですよ。母さんが寝れば寝る真似をするし、お櫃ひつを出せば御飯をつける真似をするし——」



「どれ、父さんが一つ抱っこしてやろう——重くなつたかな」と三吉は子供を膝ひざの上に載せてみた。

お房の笑顔えがおには、親より外に見せないような可憐あどけなさがあつた。

「兄貴の家を見たら、俺もウカウカしてはいられなく成つて来た」  
こう三吉が言つて、子供をお雪の手に渡した。

「房ちゃん」と下婢はそこへ来て笑いながら言つた。「父さんに  
股眼鏡まためがねしてお見せなさい」

「止よせ、そんな馬鹿な真似を」

と三吉が言つたが、お房は母の手を離れて、「バア」と言いながら後向に股の下から母の顔を覗のぞいた。

「隣の叔母さんが、房ちゃんの股眼鏡するのは復また直に赤さんの

御出来なさる証拠だツて」

こう下婢が何の気なしに言った。三吉夫婦は思わず顔を見合せた。

夫婦は眠い盛りであつた。殊ことに三吉が旅から帰つて来てからは、下婢まで遅く起きるようになつた。どうかすると三吉の学校へ出掛けるまでに、朝飯の仕度の間に合わないことも有つた。

朝の光が薄白く射して来た。戸の透間すきまも明るく成つた。一番早く眼を覚さすものは子供で、まだ母親が知らずに眠っている間に、最早床の中から這出はいだした。

子供は寢衣のまま母の枕まくらもと頭に遊んでいた。お雪は半分眠りながら、

「ちよッ。風邪かぜを引くじゃないか」

と叱るように言つて、無理に子供を床の中へ引入れた。お房は起きたがつて母に抱かれながら悶もがき暴あばれた。

水車小屋の方では鶏が鳴いた。洋燈は細目に暗く赤く点とぼつていた。お雪は頭を持上げて、炉辺ろべたに寝ている下婢を呼起そうとした。幾度も続けざまに呼んだが、返事が無い。

「ああああ、驚いちまった」

お雪は嘆息した。この呼声に、下婢が眼を覚まさないで、子供が泣出した。

「ハイ」

と下婢は呼ばれもしない頃に返事をして、起きて寢道具を畳んだ。下婢が台所の戸を開ける頃は、早起の隣家の叔母おばさんは裏庭を奇麗に掃いて、黄色い落葉の交った芥ごみを竹たけ藪やぶの方へ捨てに行くところであつた。

「どんなにお前を呼んだか知れやしない……いくら呼んだって、返事もしない」

こうお雪が起きて来て言つた。

暗い、噎むせるような煙は煤すすけた台所の壁から高い草屋根の裏を這つて、炉辺の方へ遠慮なく侵入して行つた。家の内は一時この煙で充みたされた。未だ三吉は寢床の上に死んだように成つていた。

「最早、起きて下さい」

とお雪が呼起した。三吉は眠がつて、いくら寝ても寝足りないという風である。勤務つとめの時間が近づいたと聞いて、彼は蒲団ふとんを引剥きはがすように妻に言付けた。

「宜よう御座んすか。真実ほんとに剥きはがしますよ——」

お雪は笑った。

漸ようやく正氣に返つた三吉は、急いで出掛ける仕度をした。その日、彼は学校の方に居て、下婢が持つて来た電報を受取つた。差出人は東京の実で、直に金を送れとしてある。しかも田舎教師いなかの三吉としてはすくなからぬ高である。前触まえふれも何もなく突然こういうものを手にしたということ、三吉を驚かした。

兄弟とは言いながら、殆んど命令的に金の無心をして寄した電報の意味を考えつつ三吉は家へ帰った。委しいことくわの分らないだけ、東京の家の方が氣遣きづかわしくもある。とにかく、兄の方で、よく困った場合でもなければ、こんな請求の仕方も為すまいと想像された。そして、小泉の一族の上に、何となく暗い雲を翹もちも望うけるような氣がした。

三吉は断りかねた。と言つて、余裕のあるべき彼の境涯でも無かつた。お雪もそれを氣の毒に思つて、万一の急に備えるようにと名倉の父から言われて貰つて来た大事の金を送ることに同意した。三吉は電報がわ為替せを出しに行つた。

夫は出て行つた。お雪は子供の傍に横に成つた。次第に發育して行くお房は、離れがたいほどの愛らしい者と成ると同時に、すこしも母親を休息させなかつた。子供を育てるといふことは、お雪に取つて、めずらしい最初の経験である。しかし、泣きたい程の骨折でもある。そればかりではない、氣の荒い山家育ちの下婢んなを相手にして、こうして不自由な田舎に暮すことは、どうかすると彼女の生活を單調なものにして見せた。

「ああああ——毎日々々、同じことをして——」

こうお雪は嘆いて、力なさそうに溜息ためいきを泄もらした。暫時しばらく、彼女は畳の上に俯うつぶし臥ふしに成つていた。復たお房は泣出した。

「それ、うまうま」

と子供に乳房を咬くわえさせたが、乳は最早出なかつた。お房は怒つて、容易に泣止まなかつた。

炉に掛けた鉄瓶てつびんの湯はクラクラ沸立っていた。郵便局まで出掛た三吉は用を達して戻つて来て、炉辺で一服やりながら、一雨ごとに秋らしく成る山々、蟋蟀こおろぎなどの啼出なきだした田圃側たんぼわき、それから柴車だの草刈男だのの通る淋さびしい林の中などを思出していた。お雪は子供を下婢おふわに背負せて置いて、夫の傍へ来た。

「房ちゃん、蝨いなご捕りに行きましょう」

と言つて、下婢は出て行つた。

夫婦は、質素な田舎の風習に慣れて、漬物で茶を飲みながら話



した。めずらしくお雪は煙草たばこを燻つかした。

「何だつてそんなに人の顔をジロジロ見るんです」とお雪が笑つた。

「でも、煙草などをやり出したからサ」こう答えて、三吉もスパやった。

「どういうものか、私は普通なみの身体からだでなくなると、煙草が燻したくつて仕様が有りません」

「してみると、いよいよ本物かナ」

三吉は笑い事では無いと思つた。今からこんなに子供が出来て、この上殖えたらどうしようと思つた。

それから四五日経つて、三吉は兄の実から手紙を受取つた。そ

の中には、確かに送ってくれた金を受取ったとして、電報で驚かしたことを気の毒に思うと書いてあつたが、家の事情は何一つ知らして寄さなかつた。唯、負債ほど苦しい恐しいものは無い、借金する勿<sup>なか</sup>れ、という意味が極く簡単に言つてあつた。

十一月に入つて、復<sup>ま</sup>た実は電報を打つて寄した。そうそうは三吉も届かないと思つた。しかし、弟として、出来得るかぎりの力は尽さなければ成らないような気がした。せめて全額でないまでも、送金しようと思つた。その為に、三吉は三月ばかり掛つて漸く書き終つた草稿を売ることにした。

「オイ、子供が酷<sup>ひど</sup>く泣いてるぜ。そうして休んでいるなら、見ておやりよ」

「私だつて疲れてるじや有りませんか——ああ、復た今夜も終よつび宵泣てかれるのかなあ。さあ、お黙りお黙り——母さんはもう知らないよ、そんなに泣くなら——」

こんな風に、夫婦の心が子供の泣声に奪われることは、毎晩のようであつた。母の乳が止つてから、お房の激し易やすく、泣き易く成つたことは、一通りでない。それに、齒の生え初めた頃で、お房はよく母の乳房を嚙かんだ。「あいた——あいた——いた——いた——ち、ち、ちツ——何だつてこの児はそんなに乳を嚙むんだねえ——馬鹿、痛いじゃないか」と言つて、母がお房の鼻を摘つまむと、子供は断ちぎれるような声を出して泣いた。

「馬鹿——」

と叱られても、お房はやはり母の懐ふところを慕った。そして、出なくても何でも、乳房を咬くわえなければ、眠らなかつた。

三吉は又、自分の部屋をよく出たり入ったりした。子供の泣声を聞きながら机むかに對うほど、彼の心を焦いらいら々させるものは無かつた。日あたりの好い南向の部屋とは違つて、彼が机の置いてあるところは、最早寒く、薄暗かつた。

収穫とりいれの休暇やすみが来た。農家の多忙いそがしい時で、三吉が通う学校でも一週間ばかり休業した。

ある日、三吉は散歩から歸つて来た。お雪は馳かけよ寄つて、

「西さんが被いら入つしやいましたよ」

と言いなから二枚の名刺を渡した。

「御出掛ですかツて、仰おつしやいましてね——それじゃ、出直しておいでなさるツて——」とお雪は附つ添けたした。

こういう侘わびしい棲居すまいで、東京からの友人を迎えるというは、数えるほどしか無いことで有つた。やがて、「お帰りでしたか」と訪れて来た覚えのある声からして、三吉には嬉しかった。

西は少としわ壮わかな官吏であつた。この人は、未だ大学へ入らない前から、三吉と往来して、中村という友達などと共に若々しい思かんが想えを取とりか換わした間柄である。久し振で顔を合せてみると、西は最早堂々たる紳士であつた。

西が連れて来て三吉に紹介した洋服姿の人は、やはりこの地方に來ている新聞記者であつた。B君と言つた。奥の部屋では、め

ずらしく盛んな話声が起つた。

西は三吉の方を見て、

「僕は君、B君なら疾とうから知っていたんだがネ、長野に来ていらつしやるとは知らなかった……新聞社へ行つて、S君を訪ねてみたのサ。すると、そこに居たのがB君じゃないか」

「ええ、つい隣に腰掛けるまで、西君とは思いませんでした」と記者も引取つて、「それに苗みょうじ字は變つてましよう、髭ひげなぞが生えてる、見違えて了しまいましたネ。実は西君が来ると言いますから、S君などと散々悪口を利きいて、どんな法学士が来るかなんて言つていました——来てみると西君でサ」

西も笑出した。「君、なかなか人が悪いんだよ……僕もね、今

度県庁から頼まれてコオペレエシヨンのことを話してくれと言うんで来たのサ。ところが君、酷ひどいじゃないか。僕の来る前に、話しそうなことを皆な書いちまつて、困らしてやれツて、相談していたんだとサ——油断が成らない——人の悪い連中が揃そろっているんだからね」

西は葉巻の灰を落しながら、粗末な部屋の内を見廻したり、こういう地方に来て引籠ひきこもっている三吉の容ようす子を眺ながめたりした。三年ばかり山の上で暮すうちに、三吉も余程田舎臭く成った。

「B君は寒いでしょう。御免蒙ごうむって外がいとう套たうを着給え」と西は背広

を着た記者に言ってみて、自分でもすこし肩を動ゆすつた。「どうも、寒い処だねえ——こんなじや有るまいと思つた」

お雪はいそいそと茶を運んで来た。西は旅で読むつもりほんの書籍ほんを取出して、それを三吉の前に置いて、

「小泉君、これは未だ御覧なさらないんでしよう。中村に何か旅で読む物はないかつて、聞いたら、これを貸してくれました。その葉書の入つてるところまで、読んでみたくです——それじや御土産がわりに置いて行きましょう——葉書は入れといってくれ給え」

記者もその書籍ほんを手に取つて見た。「私のように仕事にばかり追われてるんじや仕様が有りません。すこし静かな処へ引込んで、こういう物を読む暇が有つたら、と思ひます」



西は記者の横顔を眺めた。

記者は嘆息して、三吉の方を見た。「貴方などは仕事を成さる時に、何かこう自然から借金でも有つて、しよっちゆう日常それを返さなけりや成らない、と責められて、いやおう否応なしに成さるようなことは有りませんか——私はね、それで苦しくつてたま堪りません。自分が何かし為なければ成らない、と心で責められて、それで仕方なしに仕事を為ているんです。仕事を為ないではいられない。す為れば苦しい。ですから——ああああ、毎日々々、あっちこっち彼方是方と馳かけずり廻つて新聞を書くのかナア——そんなことをして、この生涯が何に成る——とまあ思ふんです」

「そりやあ君、確かに新聞記者などを為ている故せいだよ」と西が横よ

こやり  
槍を入れた。「廃してみ給え——新聞を長く書いてると、必と  
きつ  
そういう病気に罹る」

「ところがそうじゃ無いねえ」と記者は力を入れて、「私もすこ  
しは楽な時が有つて、食う為に働かんでも可いという時代が有り  
ました。やっぱり駄目です。今私が新聞屋を廃めて、学校の教員  
に成つてみたところが、その生涯がどうなる……畢竟心に休息の  
つまり  
無いのは同じことです」

「それは、君、男の遺伝性の野心だ。野心もそういう風に伝わ  
つて来れば、寧ろ尊いサ」と西が笑つた。

「そうかナア」と記者は更に嘆息して、「——所詮自然を突破  
する  
なんてことは出来ない。突破するなら、死ぬより外に仕方が無い。」

そうかと言って、自然に従うのは厭いやです。何故厭かと言うに、あまり残酷じゃ有りませんか……すこしも人を静かにして置かないじゃ有りませんか……私は、ですから、働かなけりや成らんといいう心持から退のいて、書籍ほんも読みたければ読む、眠たければ眠る、という自由なところが欲しいんです」

「僕もそう思うことが有るよ」と西は記者の話を引取った。「有るけれども、言わないのサ——言うと、ここの主人に怒られるから——小泉君は、働くということに一種の考えが有るんだねえ。僕は疾とからそう思ってる」

「實際——Lifeは無慈悲なものです」

と復た記者が言った。

「君、君」と西は記者の方を見て、「ほんとう眞実に遊ぶということは、女にばかり有ることで、男には無いサ。み給え——小説を読んでさえそうだ、ただ只は読まない——何かしらに仕ようという気で、既に読んでるんだ。厭だね、男の根性という奴は。ホラ、あのゾラの三カ条——生きる、愛する、働く——厭な主義じゃないか。ツマラない……」

「小泉さんはこういう処にいらして、おさみ御寂しくは有りませんか」と記者が聞いた。

「そりやあ君、細君の有る人と無い人とは違うからね」

こう西が戯れるように言出したので、思わず三吉はにがわらい苦笑した。

「そこだよ」と記者は言葉を続けた。「細君が有れば寂しくは無  
いだろうか。細君が有って寂しくないものなら、僕はこうやって  
今まで独身などで居やしない——しかも、新聞屋の二階に自炊な  
ぞをして、クスブったりして——」

西は話頭はなしを変えようとした。で、こんな風に言ってみた。「男  
が働くというのも、考えてみれば馬鹿々々しいサ。畢竟つまり、自然の  
要求というものは繁殖に過ぎないのだ」

「そうすれば、やっぱり追い使われているんだね。鳥が無心で何  
の苦痛も知らずに歌うというようには、いかないものかしら……」

と記者が言った。

「鳥だつて、み給え、対手あいてを呼ぶんだと言うじやないか。人間でも、好い声の出る者が好い配偶を得るといふ訳なんだろう……ところが人間の頭数が増えて来たから、繁殖といふことばかりが仕事で無くなって来たサ——だから、自分の好きな熱を吹いて、暮しても、生きていられるのが今の世の中サ」

「何だか僕等の生涯は夢らしくて困る」

「いづくんぞ知らん、日本国中の人の生涯は皆な夢ならんとはだ」  
三吉は黙つて、この二人の客の話を聞いていた。その時記者は沈んだ、痛ましそうな眼付をして、西の方を見た。西は目を外そらした。しばらく、客も主人あるじも煙草たばこばかり燻ふかしていた。

お房が覗のぞきに來た。

「房ふうちゃん、被い入らつしやい」

と西が見つけて呼んだ。お房は恥かしそうに、母のかげに隠れた。やがて母に連れられて、菓子皿の中にある物を貰もらいに來た。

「お客様にキマリが悪いと見えて、母さんの後であんがとうしてます」と言つてお雪は笑つた。

西は二度も三度も懐中時計を取出して眺めた。

「君は何時なんじまで居られるんだい。なんなら泊つて行つても可よいじゃないか」と三吉が言つた。

「ああ難ありがと有あう」と西は受けて、「今夜僕の為に歓迎会が有るといふんで、どうしても四時半の汽車には乗らなくちや成らない。今

夜はいずれ酒だろうから、僕はあまり難有くない方だけれど——  
それに、明日はいよいよ演説をやる日取だ」

「それにしても、まあユツクリして行つてくれ給え」

「あの時計は宛あてに成らない」と西は次の部屋に掛けてある柱時計  
と自分のとを見比べた。「大變後れてるよ」

「アア吾家うちのは後れてる」と三吉も答えた。

お雪はビールに有合せの物を添えて、そこへ持つて来た。「な  
んにも御座いませんけれど、どうか召上つて下さい」と彼女が言  
った。三吉も田舎料理をすすめて、久し振で友人をもてなそうと  
した。

「こりやどうも恐れ入ったねえ。僕は相変らず飲めない方でねえ」



と西は言った。「しかし、気が急せいて不可いけから、遠慮なしに頂き  
ます」

三吉は記者にもビールを勧めた。「長野の新聞の方には未だ長  
くいらつしやる御積りなんですか」

「そうですナア、一年ばかりも居たら帰るかも知れません……是こ  
方つちに居ても話相手は無し、ツマリませんからね……私は信濃しなのとい  
う国には少許すこしも興味が有りません」こう記者が答えた。

西はめずらしそうに、牛うし額びたいと称する蕈きのこの塩漬などを試みな  
がら、「僕は碓氷うすいを越す時に——昨日おとといだ——真実ほんとに寂さびしかった  
ねえ。彼方あそこまでは何の気なしに乗つて来たが、さあ隧トン道ネルに掛つ  
たら、旅こころという心もち地ちが浮ういて来た。あの隧トン道ネルを——君、そう

じゃないか——誰だって何の感じもしないで通るといふ人は有るまいと思うよ。小泉君が書籍ほんを探しに東京へ出掛けて、彼処を往つたり来たりする時は、どんな心地だろう」

客を見送りながら、三吉は名残惜なごりしそうに停車場まで随ついて行つた。寒く暗い停車場の構内には、懐ふところ手でをした農夫、真綿帽子かぶを冠かぶつた旅商人、それから灰色な髪の子守の群などが集つてた。

西と三吉とは巻烟草まきたばこに火を点けた。記者もその側に立つて、「僕が初めて西君と懇意に成つたのは、何時頃いつだっけね。そうだ、

君が大学へ入った年だ。僕はその頃、新聞屋仲間の年少者サ——二十の年だっけ——その頃に最早天下の大勢なんてことを論じていたんだよ」

「今は余程よっぽど分つていなくちやならない——ところが、君、やっぱり今でも分らないんだろう」と西が軽く笑った。

記者は玉子色の外套の隠袖かくしへ両手を入れたまま、反返そりかえって笑った。やがて、すこし萎しおれて、前曲まえこぎみに西の方を覗のぞくようにながら、

「その頃と見ると、君も大分変った」

と言われて、西は黙って記者を熟視みつめた。三吉は二人の周囲まわりを歩いていていた。

三人は線路を越して、下りの汽車を待つべきプラットホームの上へ出た。浅間へは最早雪が来ていた。

「寒い寒い」と西は震えながら、「僕は汽車の中で凍え死ぬかも知れないよ」

「すこし歩こう」と三吉が言出した。

「そうだ。歩いたら少しは暖かに成る」と言つて、西は周囲あたりを眺め廻して、「この辺は大抵僕の想像して来た通りだった」

三吉は指ゆびさして見せた。「あそこに薄うすすらと灰紫色に見える山ねえ、あれが八つが岳だ。ずっと是方こちに紅葉した山が有るだろう、あの崖がけの下を流れてるのが千曲川ちくまがわサ」

「山の色はいつでもあんな紫色に見えるのかい。もつと僕は乾燥

した処かと思つた」

「今日は特別サ。水蒸気が多いんだね。平常はもつとずっと近く見える」

「それじゃ何ですか、あれが甲州境の八つが岳ですか——あの山の向が僕の故郷です」と記者が言つた。

「へえ、君は甲州の方でしたかねえ」と西は記者の方を見た。

「ええ、甲州は僕の生れ故郷です……ああそうかなア、あれが八つが岳かなア。何だか急に恋しく成つて来た……」と復た記者が懐かしそうに言つた。

三人は眺め入つた。

「小泉君」と西は思出したように、「君は何時までこんな山の上

に引込んでゐる気かネ……今の日本の世の中じゃ、そんなに物を深く研究してかかる必要は無いと思うよ」

三吉は返事に窮こまつた。

「しかし、新聞屋さんもあまり感心した職業では無いね」と西は言つた。

「君は又、エジトルだつて、そう見くびらなくツても可いぜ」と記者が笑つた。

西も笑つて、「あんなツマラないことは無いよ。み給え、新聞を書く為に読んだ本が何に成る。いくら読んだつて、何物なんにも後へ残りやしない。僕は、まあ、厭だねえ。君なんか早く切上げて了いたまえ」

「君はそういうけれど、僕は外に仕方が無いし……生涯エジトルで暮すだろう……これも悪縁でサ」と言つて、記者は赤皮の靴を鳴らして、風の寒いプラットホームの上を歩いてみた。

下りの汽車が来た。少としわか壮な官吏と、少壮な記者とは、三吉に別れを告げて、乗客も少ない二等室の戸を開けて入つた。

「この寒いのに、わざわざ難有う」

と西は窓から顔を出して言つた。車掌は高く右の手を差揚げた。列車は動き初めた。長いこと三吉はそこに佇たたず立んでいた。

黄ばんだ日が映あつて来た。収とり穫いれを急がせるような小春の光は、

植木屋の屋根、機械場の白壁をかすめ、激しい霜の為に枯々に成つた桑くわばたけ 畠の間を通して、三吉の家の土壁を照した。家毎に大根を洗い、それを壁に掛けて乾すべき時が来た。毎年山家での習慣とは言いながら、こうして野菜を貯えたり漬物の用意をしたりする頃に成ると、復た長い冬ふゆしもり 籠の近づいたことを思わせる。

隣の叔母さんは裏庭にある大きな柿の樹の下へ蕙むしろを敷いて、ネンネコ半天を着た老婆おばあさんと一緒に大根を乾す用意をしていた。

未だ洗わずにある大根は山のように積重ねてあつた。この勤勉な、労苦を労苦とも思わないような人達に励まされて、お雪も手拭てぬぐいを冠り、ウワツパリに細紐ほそひもを巻付けて、下婢おんなを助けながら働いた。時々隣の叔母さんは粗末な垣根のところへやつて来て、お雪



に声を掛けたり、お齒黒の光る口元に微笑を見せたりした。下婢は酷い荒れ性で、靴の切れた手を冷たい水の中へ突込んで、土のついた大根を洗った。

「地大根」と称えるは、堅く、短く、蕪を見るようで、荒寥とした土地でなければ産しないような野菜である。お雪はそれを白い「練馬」に交ぜて買った。土地慣れない彼女が、しかも身重して、この大根を乾すまでにするには大分骨が折れた。三吉も見かねて、その間、子供を預った。

日に日に発育して行くお房は、最早親の言うなりに成っている人形では無かった。傍に置いて、三吉が何か為ようとすると、お房は掛物を引張る、写真掬を裂く、障子に穴を開ける、終には玩

もちゃ  
具にも飽いて、柿の食いかけを机になすりつけ、その上に這はいあ  
上がつて高い高いなどをした。すこしでも相手に成つていなけれ  
ば、お房が愚図々々言出すので、三吉も弱り果てて、鏡や櫛箱くしばこ  
の置いてある処へ連れて行つて遊ばせた。お房は櫛箱から櫛を取  
出して「かんか、かんか」と言つた。そして、三吉の散切頭ざんぎりあたま  
を引捕えながら、逆さに髪をとく真似まねをした。

「さあ、ねんねするんだよ」

こう三吉は子供を背中に乗せて言つてみた。書籍ほんを読みながら、  
自分の部屋の中を彼方あちこち是方と歩いた。

お房が父の背中に頭をつけて、心こころもち地よ好きさそうに寝入つた頃、  
下婢は勝手口から上つて来た。子供の臥床が胡燧こたつの側に敷かれた。

「とても、お前達のするようなことは、俺には出来ない」

と三吉は眠った子供をそこへ投ほうりだ出すようにして言った。

「旦那さん、お大根が縛れやしたから、釣るしておくんなすつて」と下婢が言った。この娘は、年に似合わないマセた口の利きようをして、ジロジロ人の顔を見るのが癖であつた。

三吉は裏口へ出てみた。洗うものは洗い、縛るものは縛つて、半分ばかりは乾かされる用意が出来ていた。彼は柿の樹の方から梯子はしごを持つて来て、それを土壁に立掛けた。それから、彼の力では漸く持上るような重い大根の繋つないである繩なわを手に提げて、よろしながからその梯子を上った。お雪や下婢は笑つて揺れる梯子を押えた。

「どうも、御無沙汰ごぶさたいたしやした」こう言つて、お房の時に頼んだ産婆が復た通つて来る頃——この「御無沙汰いたしやした」が、お雪の髪を結つていた女髪結を笑わせた——三吉は東京に居る兄の森彦から意外な消息に接した。

それは、長兄の実が復た復た入獄したことを知らせて寄よこしたもので有つた。その時に成つて三吉も、度々たびたび実から打つて寄したあの電報の意味を了解することが出来た。森彦からの手紙には、祖先の名誉も弟等の迷惑をも顧みられなかつたことを搔かきくど口説くようにして、長兄にしてこの事あるはくれぐれも痛嘆の外は無い、

と書いて寄した。

三吉は二度も三度も読んでみた。旧い小泉の家を支えようとしている実が、幾度か同じ蹉跌を繰返して、その度に暗いころへ陥没おちいつて行く徑路みちすじは、ありありと彼の胸に浮んで来た。三吉が過去の悲惨であつたも、曾てかつこういう可畏おそろしい波の中へ捲込まきこまれて行つたからで——その為には若い志望を擲なげうとうとしたり、落胆の極に沈んだりして、多くの暗い年月を送つたもので有つた。

実が残して行つた家族——お倉、娘二人、それから他へ預けられてゐる宗蔵、この人達は、森彦と三吉とで養うより外にどうすることも出来なかつた。それを森彦が相談して寄した。この東京からの消息を、三吉はお雪に見せて、実にヤリキレないという眼

付をした。

「まあ、実兄さんもどうなすつたと言いでしようねえ」

と言つて、お雪も呆あきれた。夫婦は一層の艱かん難なんを覚悟しなければ成らなかつた。

冬至には、三吉の家でも南かぼちや瓜ふきみそと蒨ふきみそ味みそ噌みそを祝うことにした。蒨とうの臺とうはお雪が裏の方へ行つて、桑畑の間を流れる水の辺ほとりから頭あたまを持上げたやつを摘取つて来た。復た雪の来そうな空模様であつた。

三吉は学校から震えて歸つて来て、小倉の行あんどんばかま燈あかり袴はかまのなりで食卓に就ついた。相変らず子供は母の言うことを聞かないで、茶ちや椀わんを引取るやら、香かの物を掴つかむやら、自分で箸はしを添そえて食うと言つて、それを宛あて行がわなければ割れる様な声を出して泣いた。折せつ角かく

祝おうとした南瓜も落味噌も碌にお雪の咽喉を通らなかつた。

「母さんは御飯が何処へ入るか分らない……」

お雪はすこし風邪の気味で、春着の仕度を休んだ。押詰つてからは、提灯ちようちんつけて手習に通つて来る娘達もなかつた。お雪が炬燵こたつのところこたつに頭を押付けているのを見ると、下婢おんなも手持無沙汰の気味で、アカギレの膏藥こうやくを火箸ひばしで延ばして貼はつたりなぞしていた。

寒い晩であつた。下婢は自分から進んで一字でも多く覚えようと思ふような娘ではなかつたが、主人の思惑おもわくを憚はばつて、申訳はばば

かりに本の復習おさらいを始めた。何時いつの間にか彼女の心は、蝗虫いなごを捕つて遊んだり草を藉しいて寝そべったりした楽しい田圃側の方へ行つて了つた。そして、主人に聞えるように、同じところを何度も何度も繰返し読んでいるうちに、眠くなつた。本に顔を押当てたなり、そこへ打臥つつぶして了つた。

急に、お房が声を揚げて泣出した。復また下婢は読み始めた。

「風邪を引いてるじゃないか。ちつとも手伝いをしてくれやしない」

こうお雪が言つた。お雪はもう我慢が仕切れないという風で、いきなり炬燵を離れて、不熱心な下婢の前にある本を壁へ投付けた。



「喧ましい！」

下婢は止すにも止されず、キョトキョトした眼付をしながら、  
狼狽うろたえている。

「何事なんにも為してくれなくても可いよ」とお雪は鼻を噉すり上げて言つた。「居眠り居眠り本を読んで何に成る——もう可いから止してお休み——」

唐紙を隔てた次の部屋には、三吉が寂しい洋燈ランプに對むかつて書物を展ひろげていた。北側の雪は消えずにあつて、降つた上降つた上へと積るので、庭の草木は深く埋うずれている。草屋根の軒から落ちる雫しずくは茶色の氷柱つららに成つて、最早二尺ばかりの長さに垂下つている。夜になると、氷雪の寒さが戸の内までも侵入して来た。時々可恐おそろ

しい音がして、部屋の柱が凍割しみわれた。

「旦那だんなさん、お先へお休み」

と下婢は唐紙をすこし開けて、そこへ手を突いて言った。やがて彼女は炉辺の方で寝る仕度をしたが、三吉の耳すすりなきに歔泣すすりなきの音が聞えた。一方へ向いては貧乏と戦わねばならぬ、一方へ向いては烈はげしい氣候とも戦わねばならぬ——こういう中で女子供の泣声を聞くのは、寂しかった。三吉は綿の入ったもので膝ひざを包んで、独ひとりで遅くまで机の前に坐っていた。

三吉が床に就く頃、子供は復た泣出した。柱時計が十二時を打つ頃に成つても、未だお房は眠らなかつた。

お雪は氣を焦いらつて、

「誰だ、そんなに泣くのは……其方行け……あんまり種々な物を食べたがるからそうだ……めッ」

いよいよお房は烈しく泣いた。時には荒く震える声が寒い部屋の壁に響けるように起った。母が怒って、それを制しようとする、お房は余計に高い声を出した。

「ねんねんや、おころりや、ねんねんねんねんねしな……」とお雪は声を和やわらげて、何卒どうかして子供を寝かしつけようとする。お房は嬉しそうな泣声に変って、乳房を咬くわえながらも泣止まなかつた。

「母さんだつて、眠いじゃないか」

と母に叱られて、復たお房はワツと泣出す。終しまには、お雪までも泣出した。母と子は一緒に成つて泣いた。

「どうしてあんなに子供を泣かせるんだねえ。あんなに泣かせなくつても済むじゃないか」

とお雪は下婢の前に立つて言った。隣家では朝から餅搗もちつきを始め、それが壁一重隔てて地響のように聞えて来る。三吉の家でも、春待宿はるまつやどのいとなみに忙せわしかった。門松は入口のところに飾り付けられた。三吉は南向の日あたりの好い場所をえらんで、裏白だの、讓葉ゆずりはだの、橙だいだいだのを取散して、粗末ながら注連飾しめかざりの用意をしていた。

貧しい田舎教師の家にも最早正月が来たかと思われた。三吉は、

裏白の付いた細長い輪飾を部屋々々の柱に掛けて歩いたが、何か復た子供のことでお雪が気を傷めていたいるかと思うと、顔をしかめた。三吉の癖で、見込の無い下婢よりは妻の方を責める——理窟りくつが有つても無くても、一概に彼は使う方のものがワルいとしている。

だから下婢が増長する、こうまたお雪の方では残念に思っている。

「そりや、お前が無理だ」と三吉はお雪に言った。「未だ彼女あれは十五やそこいらじゃないか——子供じゃないか——そんなに責めたつていけない不可」

「誰も責めやしません」とお雪はさも口惜くやしそうに答えた。お雪は夫が奉公人というものを克よく知らないと思っている——どんなに下婢が自分の命いいつけ令を守らないか、どんなに子供をヒドくする

か、そんなことは一向御構いなしだ、こう思っている。

「責めないって、そう聞えらア」と復た三吉が言った。

「私が何時責めるようなことを言いました」とお雪は憤然とする。

「お前の調子が責めてるじゃないか」

「調子は私の持前です」

「お前が父親おとつさんに言う時の調子と、今のとは違うように聞えるぜ」

「誰が親と奉公人と一緒にして、物を言うやつが有るもんですか。

こんな奉公人の前で、親の恥まで曝さらさなくつても可よう御坐んす」

「解らないことを言うナア——なにも、そんな訳で親を昇かぎ出したんじゃなし——奉公人は親ぐらいに思っていなくつて使われる

かい」

奉公人そツちのけにして、三吉とお雪とはこんな風に言合つた。その時、お房は何事が起つたかと言つたような眼付をして、親達の顔を見比べた。下婢は下婢で、隅すみの方に小さく成つて震えていた。

「女中のことと言合をするなどは——馬鹿々々しい」と三吉は思ひ直した。そして、自分等夫婦も、何時の間にかこんな争あらそい鬪いを始めるように成つたか、と考えた時は腹立しかなかった。

「今日は。お餅もちを持って参じやした。どうも遅なはりやして申訳がごわせん」

こう大きな百姓らしい声で呶どな鳴りながら、在の米屋が表から入

つて来た。

「お餅！ お餅！」と下婢は子供に言つて聞かせた。お房は手を揚げて喜んだ。この児は未だ「もう、もう」としか言えなかつた。

百姓は家の前まで餅をつけた馬を引いて来た。「ドウ、ドウ」などと言つて、落葉松からまつの枝で困つた垣根のところへ先まずその馬を繋つないだ。

## 八

橋本の姉が夫の達雄と一緒に、汽車で三吉の住む町を通過ぎよ  
うとしたのは、翌々よくよくとし年の夏のことであつた。



姉のお種は病を養う為に、伊豆の伊東へ向けて出掛ける途中で、達雄は又、お種を見送りながら、東京への用向を兼ねて故郷を発つたのである。この旅には、お種は娘のお仙も嫁の豊世も家に残して置いて、汽車の窓で三吉夫婦に逢あわられる順路を取った。彼女は、故郷で別れたぎりしばらく末の弟にも逢わないし、未だ弟の細君も知らないし、成るなら三吉の家で一晩泊つて、ゆっくり子供の顔も見たいと思うのであったが、多忙いそがしい達雄の身からだがそうは許さなかつた。

この報知しらせを受取つた三吉夫婦は、子供に着物を着更しらせえさせて、  
ステーション  
停車場を指して急いだ。夫婦は、四歳よっつに成る総領のお房ばかり  
でなく、二歳ふたつに成るお菊という娘の親でもあつた。お房は母に

手を引かれて、家から停車場まで歩いた。お菊の方は近所の娘におぶ背負さつつて行つた。

「お前は菊きいちゃんを抱いてた方が好かろう」

と三吉は、停車場に着いてから、妻に言つた。お雪は二番目の子供を自分の手に抱取つた。

上りの汽車が停まるべきプラットホームのところには、姉夫婦を待受ける人達が立っていた。やがて向の城跡の方に白い煙たが起つた。牛皮の大靴はを穿いた駅夫は彼方あちこち此方と馳かけ歩いた。

さまざま

種々な旅客を乗せた列車が三吉達の前で停つたのは、間もなくで有つた。達雄もお種も二等室の窓に倚より凭かかつて、呼んだ。弟夫婦は子供を連れてその側に集つた。その時、お雪は初めて逢つた

人々と親しい挨拶を交換した。

「橋本の伯母さんだよ」

と三吉はお房を窓のところへ抱上げて見せた。

「房ちゃんですか」と言つて、お種は窓から顔を出して、「房ち

ゃん……お土産が有りますよ……」

「ヨウ、日に焼けて、壮健そうな児だわい」と達雄も快潤らし

く笑つた。

お種は窓越しに一寸でもお房を抱いてみたいという風であつ

たが、そんなことをしている時は無かつた。彼女はいそがしそうに、子供へと思つて用意して来た品々の土産物を取り出して、弟夫

婦へ渡した。

「ずっと東京の方へ御出掛ですか」と三吉が聞いた。

「いや、東京は後廻しです」と達雄は窓につかまつて、「私だけ東京に用が有りますから、先<sup>ま</sup>ず家内を送り届けて置いて……今度の様に急ぎませんとね、お種もいろいろ御話したいんでしうけれど——」

「お雪さん、ゆつくり御話も出来ないような訳ですが、今度は失礼しますよ——いずれ復<sup>ま</sup>たお目に掛りますよ」とお種も言った。

お雪は二番目のお菊を抱きながら会釈する、お種は車の上からアヤして見せる、碌<sup>ろく</sup>に言葉<sup>か</sup>を交<sup>わ</sup>す暇もなく、汽車は動き出した。

お種が窓から首を出して、もう一度弟の家族を見ようとした頃は、汽車は停車場を離れて了つた。田舎の子供らしく育つたお房の紅い頬、お菊を抱いて立っているお雪の笑顔、三吉の振る帽子——そういうものは直にお種の眼から消えた。

「漸やっとこれで私も思が届いた」とお種も言つてみて、やがて窓のところよりかかに倚よりかか凭かかつた。

しばらく達雄夫婦の話は三吉等の噂うわさで持切つた。旅と思えば、お種も気を張つて、平常いつもより興奮した精神こころの状態ありさまにあつた。なるべく彼女は弱つた容子ようすを夫に見せまいとしていた。その日は達雄も酷ひどく元気が無かつた。しかし、夫はまた夫で、それを外部そとへは表すまいと勉めていた。

汽車が山を下りた頃、隣の室の客で、窓から乳を絞つて捨てる女が有つた。お種はそれを見て子の無い自分の嫁のことを思出した。彼女は悴せがれや、嫁や、それから不幸な娘などから最早もう余程離れたような気がした。

この旅はお種に不安な念おもいを抱いだかせた。何ということはないに、彼女は心細くて心細くて成らなかつた。彼女の衰えた身体からだは、正太の祝言を済ました頃から、臥床とこの上に横よこわり勝で、とかく頭腦あたまの具合が悪かつたり、手足が痛んだりした。で、弟の森彦の勧めに従つて、この前にも伊豆の温泉をえらひ込んで、遠く病を養いに出掛けたこともあつた。伊東行は丁度これで二度目だ。どういふものか、今度は家を離れたくなかつた。厭いやだ、厭だ、とお種がいうや

つを、無理やりに夫に勧められて出て来た位である。

赤羽で乗替えて、復た東海道線の列車に移った頃は、日暮に近かった。達雄はすこし横に成った。お種はセル地の膝ひざかけ掛を夫に掛けてやって、その側で動揺する車の響を聞いた。寝ても寝られないという風に、達雄は間もなく身を起したが、紳士らしい威厳のあるその顔には何処どことなく苦痛の色を帯びていた。彼は、眼に見ることの出来ないある物に追われているような眼付をした。

「どうか成さいましたか」とお種は心配顔に尋ねてみた。「都合が出来ましたら、貴方あなたもすこし伊東で保養していらしたら……」

「どうして、お前、そんなユツクリしたことが言っていられるもんじやない」と達雄が言った。「東京で用達をして、その模様

依<sup>よ</sup>つては直に復た国の方へ引返さなけりや成らん……俺<sup>おれ</sup>は今、一日を争う身だ……」

達雄は祖先から伝わった業務にばかり携わっていることの出来ない人であった。彼は今、郷里の銀行で、重要な役目を勤めている。決算報告の期日も既に近づいている。

車中の退屈<sup>しの</sup>凌ぎに、お種は窓から買取った菓<sup>くだもの</sup>物を夫に勧めた。達雄はナイフを取出して、自分でその皮を剥<sup>む</sup>こうとした。妙に彼の手は震えた。指からすこし血が流れた。

「俺も余程どうかしてるわい」

こう言つて、達雄は笑に紛らした。お種は不思議そうに夫の顔を眺めたが、ふとその時心の内で、



「まあ、旦那が手を切るなんて……今までに無い事だ」と不審しく思つて見た。

乗りつづけに乗つて行つた達雄夫婦は、その晩遅く、疲れて、国府津の宿まで着いた。

波の音が耳について、山から行つた人達は一晩中碌に眠られなかつた。海に見える国府津の旅舎で、達雄夫婦は一緒に朝飯を食つた。

お種は多忙しい夫の身の上を案じて、こんな風に言出した。

「貴方——もし御多忙しいようでしたらここから帰つて用を達し

て下さい。最早もとう船に乗るだけの話で、海さえ平穩おだやかなら伊東へ着くのは造作ない——私ひと独りで行きます」

「そうか……そうして貰えると、俺も大きに難ありがた有い……しかし、お前独りで大丈夫かな」と達雄が言った。

「大丈夫にも何にも。ここまで貴方に送って頂けば沢山です。初めての旅ではないし、それに伊東へ行けば多分林さん御夫婦や御隠居さんが来ていらつしやるで、何にも心配なことは有りません」

「じゃあ、ここでお前に別れるとしよう……こうつと、俺はこれから直に東京へ引返して、銀行の方の用達をしてト……おおいそがし大多忙」

こういう話をしているところへ、宿の下婢おんなが船の時間を知らせに来た。東京の方へ出る汽車が有ると見えて、宿を発たつて行く旅

人も有った。

「汽車が出るそうなのとお種は聞耳を立てた。「丁度好い——この汽車に乗らさせるが可い」

「伊東まで行く思をして御覧な」と達雄は言った。「なにも、そんなに周章あわてなくても好い。汽車はいくらも出る」

「でも、貴方は、一日を争う身だなんて仰おつしやつていらしたで……それほど大切な時なら、一汽車でも早く東京へ入った方が好からずと思つて」

「まあ、船までお前を送つてやるわい」

多忙いそがしがっている人に似合わず、達雄はガツカリしたように坐つて、復また煙草を燻ふかし始めた。何となく彼は平素ふだんのように沈おちつ着い

ていなかつた。

停車場の方では、汽車の笛が鳴った。達雄は一向それに頓とんちや着くなしで、思い屈したように、深く青い海の方を眺めていた。

そのうちに、伊東行の汽船の出る時が来た。夫婦は宿を出て、古い松並木の蔭から海岸の方へ下りた。細い砂を踏んで、礫こいしのあるところまで行くと、そこには浪なみが打寄せている。旅人の群も集つて来ている。舢はしけに乗る男女の客は、いずれも船頭の背中を借りて、泡立ち砕ける波の中を越さねば成らぬ。お種は夫に別れて、あるたくましげな男に背負おぶさつた。男はジャブジャブ白い泡の中を分けて行つた。

舢はしけが浮いたり沈んだりして本船の方へ近づしたぐがに随したがつて、悄しよんぼ

然<sup>り</sup>見送りながら立っている達雄の顔も次第にお種には解らなく成った。勝手を知った舟旅で、加<sup>おまけ</sup>に天気は好し、こうして独りで海を渡るといふことは、別にお種は何とも思わなかった。唯、彼女は夫のことが気に懸って成らなかった。汽船に移ってから、彼女は余計に心細く思つて来た。夫は最早傍に居なかった。

伊豆行の汽船は相模灘<sup>さがみなだ</sup>を越して、明るい海岸へ着いた。旅客は争つて舳に移った。お種も、湯<sup>ゆ</sup>の香<sup>か</sup>のする温泉地へ上った。

伊東の宿には、そこでお種の懇意に成った林夫婦、隠居、書生などがその夏も来ていた。この家族は東京から毎年のように出掛

けて来る浴客である。長い廊下に添うて、庭に面した二階の部屋がこの人達の陣取っていた処で、お種はその隣の一室へ案内された。不<sup>とりあえず</sup>取敢、彼女は嫁の豊世へ宛<sup>あ</sup>てて書いた。

その日からお種は温泉宿の膳<sup>ぜん</sup>に対つて、故郷の方を思う人であった。不思議にも、達雄からは文通が無かった。一週間待つても、二週間待つても、夫は一回の便りもしなかった。

一月待った。まだそれでも夫からは便りが無かった。正太や豊世の許<sup>ところ</sup>から来る手紙には、父のことに就<sup>つ</sup>いて一言も書いてなくて、家の方は案じるなとか、くれぐれも身<sup>からだ</sup>を大切に<sup>して</sup>病を養つてくれよとか——唯、母に心配させまい心配させまいとするような風

に書いてある。何となくお種は家に異状の起つたことを感じた。

こうして遠く離れた土地へ——海岸へ出れば向に大島の見えるよ  
うな——そんな処へ独り彼女が置れるおかというは、何事も夫が見せ  
まいとする為であろうと想像された。お種は、夫に勧められて無  
理に連出されて来た旅の心細かったことや、それから途中で夫の  
手が震えてついぞ切った例ためしのない指なぞを切ったことを絶えず胸  
に浮べた。そんなことを思う度に、身体がゾーとして来た。

二月待った。隣室の林夫婦は、隠居と書生だけ置いて、東京の  
方へ行く頃と成った。その人達を船まで見送るにつけても、お種  
は堪え難い思をした。

東京に居る森彦からの手紙は、すこしばかり故郷の事情を報じ  
て来た。それを読んで、始めてお種は夫の家出を知った。森彦の

考えにも、ここで姉が帰郷してみたところで、家の方がどうなるものでも無い。それよりは皆なの意見を容れて今しばらく伊東に滞在しておれ、とある。不思議だ、不思議だと、お種が思い続けたことは、漸く端緒だけ呑込めることが出来るように成った。しかし、彼女の気質を知る者は、誰一人として家の模様をあからさまに告げて寄すものが無かつた。

何にも達雄からは音沙汰が無い……苦しいことが有れば有るよ  
うに、せめて妻の許だけへは家出をした先からでも便りが有りそ  
うなもの、とこうお種は夫の心を頼んでいた。また一月待った。



橋本の若夫婦——正太、豊世の二人は、母のことを心配して、便船に乗つて来た。

この人達を宿の二階に迎えた時のお種のこころもち心地は、丁度吾子たすを乗せた救い舟にでも遭遇であつたよう、破船同様の母には何から尋ねて可いか解らなかつた。

せがれ悴や嫁の顔を見ると、お種も力を得た。彼女はすこし元気づいたような調子で、自分の落胆していることを若いものに見せまいとする風であつた。

「お前達は子が無いで——こういう温泉地へ子でも造りに来たかい」

と言われて、正太と豊世とは暫しばらく時顔を見合せた。

「母親おつかさん、そこどころじゃ有りませんよ……」

と豊世うれが愁うれわしげに言出した。

正太はこの話を遮さえぎって、妻にも入浴させ、自分でも旅の疲労を忘れようとした。

浴室は折れ曲った階段を降りて行ったところにあつた。伊豆らしい空の見える廊下のところで若夫婦はちよつと佇たたず立んだ。

「お前達は子でも造りに来たかいなんて——母親さんはあんな気で被入いらつしやるんでしようか」と豊世が言つてみた。「真実ほんとに何からお話したら可いでしょうねえ……」

「なにしろ、お前、ああいう気性の母親さんだから、一時いちじきに下手たなことは話せない」と正太も言つた。「お前が側に附ついて

追々と話して進あげるんだネ」

こんな言葉を取とり換かわした後、正太は二三の男の浴客に混つて、湯船の中に身を浸した。彼は妻だけこの伊東に残して置いて復た国の方へ引返さなければ成らない人で有つた。前途は彼に取つて唯暗澹あんたんとしている。父が投出して置いて行つた家の後仕末もせねば成らぬ。多くの負債も引受けねば成らぬ。「家などはどうでも可い」とよく往時むかし思い思ひした正太ではあるが、いざ旧ふるい家が壊こわれかけて来た<sub>こわ</sub>と成ると、自分から進んでその波の中へ捲まきこ込まれて行つた。

湯から上つて、正太は母や妻と一緒に成つた。

母は声を低くして、「林の御隠居も隣室となりへ来ておいでる……そ

れで先刻さつきああは言ってみたが、大概私も国の方のことは察しておるわい」

「実叔父さんの応援さえしなかったら、こんなことには成らなかつたかも知れない」と正太が言つた。「しかし、今と成つてみれば、それも愚痴だ。父親おとつさんも苦しく成つて来たから応援した——要するに、是方こつちの不覚だ」

「実叔父さんもどうしてあんなことを成すつたんでしょう。必きつと誰かに欺だまされたんでしようねえ」こう豊世は言つた。

母は引取つて、「ホラ、私が伊東へ来る前に、実のことで裁判所から調べに来たろう——私はあれが氣に成つて氣に成つて仕方が無かつた。田舎いなかのことだもの、お前、尾鱈おひれを付けて言い触らす

「さ」

「あれでパツタリ融通が止つた」と正太は言つた。

「大方そんなことだらうと思つた」と母も考へて、「銀行の用だ、銀行の用だと仰つて、何度父親さんも東京へ出たか知れない……東京で穴埋が出来なかつたと見えるテ。それで、何かや、後はどう成つたかや」

「成るようにしか成りません」と正太は力を入れて、「森彦叔父さんにも国の方へ行つて頂く積りです」

「嘉助もどうしたかサ」

「こういう時には、年をとつた者は何の力にも成らない……殆んど意見が立てられない」

お種が掘つて聞こう聞こうとするので、なるべく正太はこういう話を避けようとした。その時、お種は達雄の行衛ゆくえを尋ねた。

「途中で父親さんから実印を送つて寄りました。それが最後に来た手紙でした。多分……支那の方へでも行く積りらしい……」  
「こ  
う正太は言い紛まぎらして、委くわしいことを母に知らせまいとした。

「一ひとはた旗挙げて来る気かいナア」

と母が力を落したように言つたので、思わず豊世は胸が迫つて来た。女同志は一緒に成つて泣いた。

正太は母の側に長く留ることも出来なかつた。伊東を発つ日、

彼は母だけ居るところで、豊世の身の上についた出来事を告げた。聞けば聞くほど、お種は驚愕おどろきの眼を瞪みはつた。夫が彼女のもので無くなつたばかりでなく、嫁まで彼女のものでは無くなりかけて来た。

正太は簡単に話した。父の家出が世間へ伝わると同時に、豊世の生家さとからは電報を打って寄した。それには老祖母おばあさんの病氣としてある。豊世は直に電報の意味を読んだ。そして、再び夫の許へ帰ることの出来ない様な疑念うたがいと恐怖おそれとに打たれた。生家へ出掛けて行つてみた時の豊世は、果して想像の通り引止められて了しまつた。離別の悲哀かなしみは豊世の眼を開けた——どこまでも豊世は正太の妻であつた——そんな訳で、彼女は自分の生家に対しても、

当分国の方に居にくい人である——彼女はしばらく東京にでも留つて、何か独立することを考えようとして来た人である。こういう話を母に残して置いて、やがて正太は別れを告げて行つた。

一旦くれた嫁を取戻すとは何事だろう。この思想かんがえはお種に非常な侮辱を与えた。その時お種は、橋本の家に伝わる病氣を胸に浮べた。何かにつけて、彼女は先ずその事を考えた。「あんな親子には見込が無い——」などと豊世の生家から指を差されるのも、唯、女に弱いからだと考えられた。

「だから、私が言わないこつちや無い——」

とお種は独りで嘆息して了つた。彼女は豊世を抱いて泣きたいような心が起つて来た。そして皆な一緒にどうか成つて了うよう



な気がした……

「橋本さん——貴方はそんな頭髪あたまをしていらつしやるから旦那に捨てられるんです」

お種おねが部屋を出て、二階の欄干てすりから温泉場の空を眺めっていると、こんな串じょうだん談を言いながら長い廊下を通る人が有つた。隣室の客だ。林夫婦は師走しわすの末に近くなつて復た東京から入湯に来ていた。

豊世と一緒に成つた頃から、お種は髪を結う気も無く、無造作に巻きつけてばかりいたが、男の口からこんな言葉を聞いた時は

酷ひどく氣に成つた。

「捨てられたと思つて貰うと、大きに違ふ……私は旦那に捨てられる覚えは無いで……」

と腹の中で言つてみた。他ひとから見れば最早そんな風に思われるか、とも考えた。彼女は林が戯れて言うとも思えなかつた。

部屋へ戻ると、豊世は入替りに出て行つた。姑しゅうとめと嫁とが一緒に成つて、国の方の話を始めると、必きつと終しまには両方で泣いて了う。

二人は互に顔を合せているのも苦くるかつた。町へ——漁村へ——近くにある古跡へ——さもなければ隣室に居る家族、その他この温泉宿で懇意に成つた浴客の許ところへ遊びに行くことを勉つとめて、二人ぎり一緒に居ることはなるべく両方で避けよう避けようとした。

お種は独り横に成った。故郷の家が胸に浮んだ。机がある、洋<sup>ラ</sup>燈が置いてある、夫はしきりと手紙を書いている……それは前の年のある冬の夜のこと、どうも夫の様子が変に思われたから、一時頃までお種は寝た振をしていたことがあつた。やがて夫が手紙を書き終つた頃に、むつくと起きて、是非それを読ませよと迫つた。未だそんなものを書く気でいるとは、読ませなければ豊世を呼ぶとまで言つた。その時、夫がこの手紙だけは許してくれ、そのかわり女のことは思い切る、とお種に誓うように言つた……その後、女は東京へ出たとやらで、どうかすると手紙の入つた小包が届いた。夫は送金を続けていた……

お種の考えることは、この年の若い、親とも言いたいような自

分の夫に媚こびる歌妓うたひめのことに落ちて行つた。同時に、国府津の海岸で別れたぎり、年の暮に成るまで待つても夫から一回の便りも無いことを思つてみた。

到頭、お種は豊世と二人で、伊東に年をとつた。温泉宿の二階で、林の家族と一緒に、鱒ごまめ、数の子、乾栗かちぐり、それから膳ぜんに上る数々のもので、屠蘇とそを祝つた。年越の晩には、女髪結が遅く部屋々々を廻つた。お種もめずらしく、豊世の後で髪を結わせた。姑まげの鬻まげがいつになく大きいので、それを見た豊世は奇異な思に打たれた。

お種はその晩碌に眠らなかつた。夜の明けないうちに起きて、サツパリと身じまいした。

「まあ、母親おつかさんは白粉おしろいなどをおつけなさるんですか」と豊世も臥床とこを離れて来て言った。

「私だつて、つけなくつてサ」とお種は興奮したように笑つた。

「若い時はいくらでもつけた」

「若い時はそうでしょうけれど、私が来てから母親さんがそんなに成さるところを見たことが無い」

「さあ、さあ、豊世もちやつと化粧おつくりしよや。二人で揃そろつて、林さんへ御年始に行こまいかや」

温泉場の徒然つれづれに、誰が発起するともなく新年宴会を催すこと

に成つた。浴客は思い思いの趣向を凝らした。豊世が湯から上つて来て見ると、姑は何処どこからか袴はかまを借りて来て、裾すその方を糸くで括くくつているところであつた。

「豊世や、今日は林の御隠居さんと一緒に面白い趣向をして見せるぞい。ちゃんともう御隠居さんには打合せをして置いたからネ」  
こうお種が言うので、豊世は不思議そうに、

「母親さんはまた何を成さるんですか——」

「まあ、何でも好いから、お前の羽織を出して貸しとくれ」

豊世の羽織には裏に日の出に鶴をあらわしたのが有つた。お種はそれを借りて、裏返しにして着て見せた。

「ほん実に、何を成さるんですか」と豊世が心配顔に言つた。「母

親さん、下手な事は止して下さいよ」

「お前のように、楽屋でそんなことを言うもんじやないぞい——  
見よや、日の出に鶴だ。丁度御おあつらえ誂だ。これで袴はを穿いて御覽、  
立派な万まんざい歳さいが出来るに」

豊世は笑つて可いか、泣いて可いか、解らないような気がした。  
「旅の恥は搔かきすて捨サ」とお種が言つた。「氣晴しに、私も子供に  
成つて遊ぶわい……それはそうと、豊世は御隠居ところさんの許へ行つ  
て、御仕度はいかがですかつて見て来ておくれや」

姑の言付で、豊世は部屋を出た。平素ふだんから厳格な姑のような人  
に、そんなトボケた真似まねが出来るであらうか、こう思うと、豊世  
はハラハラした。

二階の広間には種々いろいろな浴客が集つて来た。その日はこの温泉宿に逗とまり留りゆうしているものばかりでなく、他よそからも退屈顔な男女が呼ばれて来て、一切無礼講で遊ぶことに成つた。板前から女中まで仲間入を許された。

にぎや賑かな笑声が起つた。隠し芸が始まつたのである。若い娘や女中達は楽しそうに私語さしごき合つたり、互に身体を持たせ掛けたりして眺めた。こういう時に見せなければ見せる時は無いと思うかして、芸自慢の人達は我勝にと飛出した。中には、喝かつさい采さいに夢中に成つて、逆上のぼせたような人も有つた。

この光景ありさまを見て来て、廊下伝いに豊世は部屋の方へ戻ろうとした。林の細君に逢つた。



豊世は気が気で無いという風に、「奥さん——母親さん達は大丈夫なんでしようかねえ。何だか私は心配で仕様が有りません」

「私共の祖母さんが太夫さんなんですトサ」と林の細君は肥満した身体を動ゆすりながら笑った。

「母親さんもネ、家の方のことを心配なさり過ぎて、それであんなに気が昂たつたんじやないかと思えますよ——母親さんには無い事ですもの……」

「でも、橋本さんはキサクな、面白い方ですから……私共の祖母さんを御覧なさいな」

折れ曲った長い廊下の向には、林の家族の借りている二間ばかりの部屋が見える。障子の開いたところから、動く烏帽子えぼし、頭巾ずきん

が見える。

仮装した女の万歳の一組がそこへ出来上った。お種は林の隠居の手を引きながら、嫁達の立っている前を通過ぎた。

その時、お種は心の中で、

「面白可笑おかしくして遊ばせるような婦女おんなでなければ、旦那衆の気には入らないのかしらん……ナニ、笑わせようと思えば私だって笑わせられる」

こう自分で自分に言ってみた。彼女は余程トボケた積りでいた。嫁が心配していようななどとは思っても寄らなかつた。

盛んな喝采が起つた。浴客はいずれもこの初春らしい趣向と、年をとつた人達の戯たわむれとを狂喜して迎えた。豊世は気まりが悪いよ  
うな、困つて了つたような顔付をして、何を姑すが為るかと心配し  
ながら立つていた。林の細君も笑いながら眺めた。

林の隠居は、こんな事をしたことの無い、溫柔おとなしい老婦としよりで、  
多勢の前へ出ると最早下を向いて了つた。その側には、お種が折  
角の興をさませまいとして、何か独りで万歳の祝いそうなこと  
を真似まねて言つた。

「ホイ——ポン——ポン——」

お種は鼓を打つ手真似をしながら、モジモジして震えている太  
夫まわりの周囲を廻つて歩いた。

豊世は立つて眺めながら、

「まあ、母親さんは……どうしてあんなことを覚えていらした  
んでしよう……何時、何処で覚えたんでしよう」

「祖母さん——」と林の細君は隠居のことを言った。

「あんなに、喋舌しゃべつて、喋舌しゃべつて、喋舌しゃべりからかいて——」と豊  
世は思わず国訛くになまりを出した。

「奥さん、吾家うちの母親さんをああして出して置いてても可いでしょ  
うか。私はもう困つて了いますわ」

「そうネ。橋本さんは少しハシヤギ過ぎますネ」

こんな話をしていゝうちに、お種の方では目出度く祝い納めて、  
やがて隠居と一緒に成つて笑つた。隠居は烏帽子を擁かかえたまま自

分の部屋の方へ逃げて行つた。お種もその後を追つた。

部屋へ戻つてからも、お種は自分で制おさえることの出来ないほど興奮していた。豊世は姑の背後うしろへ廻つて、何よりも先ず羽織や袴を脱がせた。

「母親さん、母親さん、すこし気を沈おちつ着けて下さいよ……」  
豊世は慰め顔に言つた。

お種は笑つて、「なにも、そんなに心配することは無い。母親さんは、お前、皆さんと遊ぶところだぞや。そんなことを言う手間で、褒ほめてくれよ」

豊世は何とも言つてみようが無かつた。過度の心痛から、姑がこんな精神こころの調子に成るのでは有るまいか、と考えた時は哀かなしか

った。

夕方まで、お種は庭に出て、浴客を相手に物を言い続けた。その晩は、親子とも碌ろくに眠られなかった。この反動と疲労とが来て、姑が沈み考えるように成るまでは、豊世も安心しなかった。

何時まで豊世も姑と一緒にいられる場合では無かった。豊世は豊世で早く東京へ出て独立の出来ることを考えなければ成らないと思っていた。旧い静かな家に住み慣れたお種には、この親子別れ別れに成るといふことが心細くて、嫁を手離やして遣りたくなかった。

「豊世——お前は私のことばかり心配なように言うが、自分のことも少許<sup>ちと</sup>考えてみるが可い——そうまたお前のように周章<sup>あわ</sup>てることは無いぞや」

とお種は嫁に向つて言つてみた。

お種の考えでは、夫の行方に就<sup>つ</sup>いて、忤<sup>せがれ</sup>夫婦の言うことに何処か判<sup>はつきり</sup>然<sup>はつきり</sup>しないところがある。どうも隠しているらしく思われる

ところが有る。もし嫁が聞知つているものとすれば、何とか言い賺<sup>すか</sup>して、夫の行方を突留めたい。こう思った。お種は、もうすこしもうすこしと、伊東に嫁を引留めて置きたくてならなかつた。

「では、母親さん、こういうことにしましょう。私にもどうして可いか解りませんからネ、森彦叔父さんに一つ指図<sup>さしず</sup>して頂きまし

よう……森彦叔父さんが居た方が可いと仰つたら、居ましよう」

豊世はこんな風に言出した。

森彦からは返事が来た。それには豊世の願つた通りのことが書いてあつた。豊世は早く上京して前途の方針を定めよとあるし、姉は今しばらく伊東で静養するように、そのうちには自分も訪ねて行くとしてあつた。

二月の末に成つて、漸く豊世は姑の側を離れて行くことに決めた。

「もうすこし、お前に居て貰いたいよ。私独りに成つて御覧、どんなに心細いか知れない」とお種はしお萎れた。

「ええ、私もこうして居たいんですけれど……居られるものなら、



一日でも余計……」

こう言いながら、嫁はサツサと着物を着更えた。旅の手荷物もそこそこに取纏めた。

船までは、林の隠居や細君が一緒に見送りたいと言出した。お種はこの人達に励まされながら豊世と連立つて、宿を出た。まだ朝のことで、湯の流れる川について、古風な町々を通過ぎると、やがて国府津通いの汽船の形が見えるところへ出て来た。船頭は舢はしけの用意をしていた。

最早節句の榮螺さざえを積んだ船が下田の方から通つて来る時節である。遠い山国とはまるで氣候が違っていた。お種は旅で伊豆の春に逢うかと思うと、夫に別れてから以来の事を今更のように考え

てみて、海岸の砂の上へ倒れかかりそうな眩暈心地に成った。

「母親さん、母親さん、すっかり御病気を癒して来て下さいよ。」

私は東京の方で御待ち申しますよ……真実に、母親さんの側に居て進あげたいんですけれど」

と言つて、嫁は舩の方へ急いだ。

お種は林の隠居、細君と共に、豊世を乗せた汽船の方を望みながら立っていた。別離わかれを告げて出て行くような汽笛の音は港の空に高く響き渡った。お種の眼めのまえ前には、青い、明るい海だけ残った。

宿へ戻つて、復たお種は自分一人を部屋の内に見出した。竹翁の昔より続いた橋本の家が一夜のうちに基礎からして動揺いて来たことや、子がそれを壊さずに親が壊そうとしたことや、何時の間にか自分までこの世に最も頼りのすくない女の仲間入をしかけていることなどは、全くお種の思いもよらないことばかりで有つた。

豊世は行つて了つた。午後には、お種は折れ曲つた階段を降りて、湯槽の中へ疲れた身を投入れた。溢れ流れる温泉、朦朧とした湯気、ガラスまでガラス窓から射し入る光——周囲は静かなもので、他人の浴客も居なかつた。お種は槽の縁へ頸窩のところを押付けて、萎びた乳房を温めながら、一時死んだように成つていた。

窓の外では、温暖あたたかい雨の降る音がして来た。その音は遠い往む時かしへお種の心を連れて行つた。お種がまだ若くて、自分の生家さとの方に居た娘の頃——丁度橋本から縁談のあつた当時——あの頃は、父が居た、母が居た、老祖母おばあさんが居た。この小泉へ嫁かたづいて来た祖母の生家の方でも、お種を欲しいということで、折角好ましく思つた橋本の縁談も破れるばかりに成つたことが有つた。それを破ろうとした人が老祖母だ。母は老祖母への義理を思つて、すでに橋本の方を断りかけた。もしあの時とき……お種が自害して果てる程の決心を起さなかつたら、あるいは達雄と夫婦に成れなかつたかも知れない……

思いあまつて我と我身を傷きずけようとした娘らしき、母に見つか

つて救われた当時の光景さま、それからそれへとお種の胸に浮んで来た。

これ程の思をして橋本へ嫁いて来たお種である。その志は、正太を腹おなかに持ち、お仙を腹に持った後までも、変らない積であつた。人には言えない彼女の長い病氣——実はそれも夫の放蕩ほうとうの結果であつた。彼女は身を食くわれる程の苦痛にも耐えた——夫を愛した

ここまで思い続けると、お種は頭脳あたまの内部なかが錯乱して来て、終しまには何にも考えることが出来なかつた。

「ああ、こんなことを思うだけ、私は足りないんだ……私が側に居ないではどんなにか旦那も不自由を成さるだろう……」

とお種は、濡ぬれた身からだを拭ふく時に、思い直した。

湯から上つて、着物を着ようとすると、そこに大きな姿見がある。思わずお種はその前に立った。湯気で曇った玻璃ガラスの面を拭いてみると、狂死した父そのままの蒼あおざめた姿が映っていた。

「真ほん実に、橋本さんは御おう羨らしい御身分ですなえ——御国の方からは御金を取寄せて、こうしていくらでも遊んでいらつしやられるなんて」

すこし長く居る女の湯治客の中には、お種に向つて、こんなことを言う人も有つた。お種は返事の仕ようが無かつた。

「ええ……私のようにノンキな者は有りませんよ」

お種は自分の部屋へ入っては声を呑んだ。

林の家族はやがて東京の方へ引揚げて行つた。お種の話相手に成つて慰めたり励ましたりした隠居も最早居なかつた。この温泉場を発つて行く人達を見送るにつけても、お種はせめて東京まで出て、嫁と一緒に成りたいと願つたが、三月に入つても未だ許されなかつた。沈着おちつけ、沈着けという意味の手紙ばかり諸方から受取つた。

国の方からは送金も絶え勝に成つた。そのかわり東京の森彦から見舞として金を送つて来た。この弟の勧めで、お種は皆なの意見に従つて、更に許しの出るまで伊東に留まることにした。山に

蕨わらびの出る頃には、宿の浴客は連立つて遠くまで採りに出掛けた。お種もよく散歩に行つて、伊豆の日あたりを眺めながら、夫のことを思いやつた。採つて来た蕨は丁寧ていねいに乾し集めた。支那の方へ行つたとかいう夫の口へ、せめて乾した蕨が一本でも入るようなつて伝は有るまいか、とも思つてみた。

六月の初に成つた。漸ようやく待侘わびた日が来た。お種は独りでそこそこに上京の仕度をした。その時に成つても、達雄からは何等の消息が無い。しかし、お種は夫を忘れることが出来なかつた。

旅で馴染なじみを重ねた人々にも別れを告げて、伊豆の海岸を離れて行くお種は、来た時と帰る時と比べると、全く別の人のようであつた。海から見た陸おかの連続つづき、荷積の為に寄つて行く港々——すべ



て一年前の船旅の光景さまを逆に巻返すかのようで、達雄に別れた時の悲しい心こころもち地ちが浮んで来た。

汽船は国府津へ着いた。男女の乗客はいずれも陸おかへと急いだ。

高い波がやって来てはしけ艇はしけを持揚げたかと思ううちに、やがてお種は波打際なみうちぎわに近い方へ持つて行かれた。間もなく彼女は達雄しよんがほり

然ほりと見送つてくれたその同じ場処ばりに立つた。

六月の光は相模灘さげに満ちていた。お種は岸を立去るに忍びないような気がした。夫と一緒に歩いた熱い砂を踏んで行くと、松並木がある、道がある、小高い崖がけを上つたところが例の一晩泊つた旅舎やしやだ。

「オヤ、ただいま只今御帰りで御座いますか。大層御緩ぶごゆつくりで御座います

ネ」

何事も知らない旅舎やどやの亭主は、お種が昼飯ひるの仕度に寄つて種いろいろ々ろなことを尋ねた時に、手を揉もんだ。

豊世や、森彦や、それから留守居している実の家族にも逢われることを楽しみにして、まだ明るいうちにお種は東京へ入った。

## 九

豊世が借りている二階はゴチャゴチャとした町中にあつた。そこは狭い乾燥した往来を隔てて、唯規則正しく、趣味もなく造られた同じ型の商家が対むかい合っているような場所である。豊世がこ

ういう町中を扨えらんだのは、通学の便利の為で、彼女は上京する間もなく簿記を修めることにしていた。そこへお種が尋ねて行つた。姑しゅうとめと嫁とは窮屈な二階で一緒に成つた。階下したに住む夫婦者は小売の店を出して、苦しい、忙しい生活を営みつつある。しかし心易い人達ではあつた。

「何にしても、これはエライところだ」とお種はすこし落付いた後で言つた。「でも、豊世——伊東で寂しい思をしながら御馳走ごちそうを食べるよりかも、ここでお前と一緒にパンでも咬かじる方が、どんなにか私は安気なよ」

伊豆の方で豊世が見た時よりも、余程姑の容子ようすに焦いら々いらしたところが少なくなつたように思われた。で、豊世もすこし安心して、

自分の生家——寺島の母親が丁度上京中であることを言出した。この母は療治に出て来て、病院の方に居るが、最早間もなく退院するであろうと話し聞かせた。

「あれ、そうかや」とお種は切ないという眼付をした。「私は寺島の母親さんには御目に掛れない」

「<sup>かま</sup>関わらないようなものですけれど……」と豊世は言ってみた。

「お前は関わらないと思つても、私が困る……第一、お前をこんな処に置いて、寺島の母親さんに御目に掛れた義理じゃない……」

その時、お種は自分の留守へ電報を打つて寄したといふ人を想つてみた。無理にも豊世を引戻そうとした人を想つてみた。唯お種は面目ないばかりでは無かつた。

「では、私はこうするで……暫時しじょう森彦の方へ頼んで置いて貰うで……それから復またお前と一緒に成らず。どうしても今度はお目に掛れない……そうだ、そうせまいか……お前もまた悪く思つてくれるなや」

と姑かえに言われて、豊世は反つて氣の毒な思をした。彼女は何もかも打ぶち開けて、話す氣に成つた。

「母親さん、私も困りましたよ。寺島の母が着いた時は、真ほん実とうに無いと言つても無い……葉書一枚買うことも出来ませんでしたよ、母が、国へ安着の報知しらせを出しとくれ、ちよいとコマカイのが無いからお前の方で立替えといとくれツて、言いましたも、それを買いに行くことが出来ません。私がマゴマゴしていますと、お

前は葉書を買う金銭も無いのかツて、母は泣いて了しまいました……でも、その時百円出してくれました……それで、まあ漸やっと息を吐ついたんですよ」

「それは困つたらうネ、私の方へも為替かわせが来なく成つた。ああ御金の送れないところを見ると、国でも動揺ごたごたしてるわい……しかしネ、豊世、ここで家の整理が付きさえすれば、お前を正しょうた太が困らすようなことは無いぞや……」

こういう話に成ると、お種は酷ひどく大ザツパな物の考えようをするのが有つた。往時むかしは橋本の家の経済まで薬方の衆が預つて、お種は奥を守りさえすれば好い人であつた。

翌日お種は森彦の宿の方へ移ることにした。聞いてみると、嫁

の側にも落付いていることが出来なかつたのである。

彼方あちこち是方こちとお種は転々して歩いた。森彦の宿に二週間ばかり置いて貰つて、寺島の母が国へ帰つた頃に、漸ようやく嫁よめの方へ一緒に成ることが出来た。毎日々々雨の降つた揚句で、泥ぬ濘かるみをこねて戻つて来ると、濡ぬれた往来はところどころ乾きかけている。店頭みせさきの玻璃戸ガラスどはマブしいほど光っている。薄暗い壁に添うて楼梯はしごだんを昇ると、二階の部屋の空気は穴の中のように蒸暑かつた。丁度豊世はまだ簿記の学校の方に居る時で、間に合せに集められた自炊の道具がお種の眼に映つた。衣紋竹えもんだけに掛けてある着物ばかり

は、室内の光景さまに不似合なものであつた……お種は、何処どこへ行つても、真ほん実とうに倚より凭かかれるという柱も無く、真ほん実とうに眠ねられるという枕も無くなつた。

その日からお種は豊世と二人で、この二階に臥ねたり起きたりした。姑と嫁の間には今までに無い心が起つて来た。お種は、自分が夫から受けた深い苦痛を、豊世もまた自分の子から受けつつあることを知つた。自分の子が関係した女——それを豊世が何時いつの間にか嗅かぎ付けていて、人知れずその為ために苦みつつある様子を見ると、お種は若い時の自分を丁度眼め前まえに見せつけられるような心こころもち地ちがした。

不思議にも、貞操の女の徳であるということを口の酸くなるほ



ど父から教えられたお種には、夫と他の女との関係が一番煩うるさく光  
つて見えた。で、お種は自分の経験から割出して、どうすれば男  
というものの機嫌きげんが取れるか、どうすれば他の女が防げるか、そ  
ういう女としての魂胆を——彼女が考え得るかぎり——事細かに  
嫁の豊世に伝えようと思った。夏の夜の寝物語に、お種は姑とし  
て言えないようなことまで豊世に語り聞かせた。こんな風にして、  
姑と嫁との隔てが取れて来た。二人は親身の親子のように思つて  
来た。

ある日、豊世はお種に向つて、

「母親さん、今まで貴方には隠していましたが……真ほんとう実に父親おとつ  
さんのことを言いましたようか」

こう言出した。お種は嫁の顔をつくづくと眺めて、

「復た……母親さんを担かつごうなんと思つて……」

「いえ、真実に……」

「豊世や、お前は真実に言う気かや……待てよ、そんなこと言われただけでも私は身体がゾーとして来る……」

その時始めて、お種は夫の滞ありか在地を知つた。支那へ、とばかり思つていた夫はさ程遠くは行つていなかった。国に居る頃から夫が馴染なじみの若い芸者、その人は新橋で請出うけだされて行つて、今は夫と一緒に住むとのことであつた。

「大方、そんなことだらざと思つた」

とお種は苦にが笑わらいに紛まぎらわ  
らした、心の中には更に種々な疑問を起

した。

八月には、お種は東京で三吉を待受けた。この弟に逢あわれるばかりでなく、久し振りできようだい姉弟や親戚のものが一つ処に集るということは、お種に取つて嬉しかった。豊世もまだ逢つてみたことの無い叔父うわさの噂をした。

「橋本さんは是方こちらですか」

みせさき店頭あかりの玻璃戸に燈火の映る頃、こう言つて訪ねて来たのは三吉であつた。丁度お種や豊世は買物を兼ねてぶらぶら町の方へ歩かみさんきに行つた留守の時あいさつで、二階を貸している内儀あいさつが出て挨拶し

た。

三吉は自分の旅舎やどやの方で姉を待つことにして、皆なと一緒に落合おちあいたいと言出した。「では、御待ち申していますから、明日の夕方からでも訪ねて来るように」こう内儀に言伝ことづてを頼んだ。

やがて三吉は自分の旅舎を指して引返して行つた。その夏、彼は妻の生家さとの方まで遠く行く積りで、名倉の両親を始め、多くの家族を訪ねようとして、序ついでに一寸ちよつと東京へ立寄つたのであつた。

久し振で出て来た三吉は翌あくるひ日一日宿に居て、親戚のものを待を受けた。森彦は約束の時間を違たがえずやつて来た。三吉はこの兄を二階の座敷へ案内した。そこに来ていたお雪の二番目の妹にあたるお愛にも逢わせた。

「名倉さんの？」と森彦は三吉の方を見て、「先に修業に来ていた娘はどうしたい」

「お福さんですか。あの人は卒業して帰りました。もう旦那さんが有ります」

「早いものだナ。若い人のズンズン成人しとなするには魂消たまげちまう——兄貴の家の娘なぞも大きく成った——そう言えば、俺おれの許とこのやつも、来年あたりは東京の学校へ入れてやらなきや成るまいテ」

水色のリボンで髪を束ねた若々しいお愛の容ようす子を眺めながら、森彦は国の方に居る自分の娘達のことを思出していた。

「お愛さん、貴方はもう御帰りなさい。保証人の方へ廻まわって、認み印とめを貰もらって行いったら可かいでしよう」

と三吉に言われた、お愛は娘らしく顔を紅めて、学校の方へ帰る仕度をした。

間もなく三吉は兄と二人ぎりに成った。森彦は夏羽織を脱いで、窓に近く胡坐をかいた。達雄や実の噂が始まった。

「いや、エライことに成つて来た。四方八方に火が点いたから驚く」と森彦が言出した。

三吉も膝を進めて、「しかし、橋本の方なぞは、一朝一夕に起つた出来事じゃないんでしようネ。私が橋本へ行つてた時分——あの頃のことを思うと、ナカナカ達雄さんも好く行つていましたツけがナア——非常な奮発で。それともあの頃が一番好い時代だったのかナア」

「なにしろ、お前、正太の婚礼に千五百両も掛けたとサ。そういうヤリカタで押して行つたんだ」

「姉さんなぞが又、どうしてそこへ気が着かずにいたものでしょう」

「そりや、心配は無論仕ていたろうサ。細君が帯を欲しいと言えば帯を買つてくれる、着物が欲しいと言えば着物を買つてくれる——亭主に弱点よわみが有るからそういうことに成る。姉さんの方ではそうも思わないからネ。まあ、心配はしても、それほどとは考えていなかつたらうサ」

好い加減にこういう話を切上げて、三吉はこの兄の直接関係したことを聞いてみようとしたりした。達雄のことに就いて、尋ねたいこ

とは種々あつた。先まず夕飯の仕度を宿へ頼んだ。

この町中にある旅舎やどやの二階からは、土蔵の壁、家の屋根、樹木こずえの梢などしか見えなかつた。しかし割合に静かな座敷で、兄弟が話をするには好かつた。

「どうして達雄さんのような温厚おとなしい人に、あんな思い切つたことが言えたものかしらん」こう森彦が言出した。「そりやお前、Mさんと俺とでわざわざ名古屋まで出張して、達雄さんの反省を促しに行つたことが有るサ」

「よくまた名古屋に居ることが分りましたネ」と三吉は茶を入れ



替えて兄に勧めながら言った。

「段々詮せんさく索してみると、達雄さんが家を捨てて出るという時に、途中である銀行から金を引出して、それで芸者を身受けして連れて行った。それが新橋の方に居た少婦おんなさ……その時Mさんが、どうしても橋本は名古屋に居るに相違ない。俺にも行け、一緒に探せという訳で、それから名古屋に宿をとってみたが、さあ分らない。宿の内儀かみさんはやはりそれ者しやの果だ。仕方がないから、内儀に事情を話して、お前さんが探出したら礼をすと言ったところが、内儀は内儀だけに、考えた。なんでもそういう旦那には、なるべく早く金を費つかわして了うというのが、あの社会の法だとサ。では、十円出して下さい、私も身体が悪いから保養を兼ねて心当りの温

泉へ行つて見て来る、名古屋に二人が居るものなら必ずその温泉へ泊りに来る、こう内儀が言つて探しに行つてくれた。果して一週間ばかり経つと、直ぐ来いという電報だ。そこで俺が飛んで行った。まだ蚊帳かやが釣つてあつて、一方に内儀、一方にMさん、とこう達雄さんを逃がさないように附いて寝ていた。達雄さんが俺の方を向いたその時の眼付というものは……」

森彦は何か鋭く自分の眼でも打つたという手付をして見せて、言葉を続けた。

「それから、Mさんと俺とで、懇々説いてみた。実に平素ふだんの達雄さんには言えないようなことを言つたよ——自分は何もかも捨てたものだ——妻があるとも思わんし、子があるとも思わん——後

はどう成つても関かまわないつて。最早も仕方う無い。その言葉ことばを聞いて、  
 吾われわれ儕はは別わかれた」

「エライ発ほっしん心しんの仕方かたをしたものだ。坊主ぼんずにでも成ろうというところを、少婦おんなを連れて出て行いくなんて」

と三吉は言いつてみたが、曾かつて橋本はしもとの家いへの土蔵どくらの二階にで旧ふるい日記にっぴを讀よんだことのある彼かれには、この洒落しゃらくと放縦はうじゆうとで無理むりに彩いろどりしてみせたような達雄たつおの家出いへでを想像さうざうし得えるように思おもつた。いかに達雄たつおが絶望ぜつぼうし、狼狽ろうばいしたかは、三吉さんきちに悲惨ひはんな感かんじを与たまへた。

「あの時とき吾われわれ儕はの会見かいけんしたことは、ちゃんちゃんと書面しよめんに製こしらえて、一通いっとうは記念きねんの為に正太しょうたへ送おくつたし、一通いっとうは俺おれの許とこに保たもつてある」こ  
 う森彦もりひこは物のキマリでもつけたように言いつた。

「姉さんは委くわしいことを知っていましうか」

「これがまた難物だテ。気でも違えられた日には大おおごと事だからネ。まあソロソロと耳に入れた。その為にああして長く伊東に置いて、なるべく是方こつちの話は聞かせないようにしたよ」

その時下婢おんなが夕飯の膳を運んで来た。三吉は下婢を返して、兄弟あにで話しながら食うことにした。

「どれ御馳走に成ろうか」と森彦は性急な調子で言つて、箸はしを取上げた。「兄貴の家にも弱つたよ。ホラ、お前の許とこのお雪さんが先頃拜跪はみに来て、当分仕送りは出来ないツて断つたもんだから、俺の方でどうかしてやらなくちや成らない……しかし、お前も御苦労だった。お互に長い間のことだから。加おまけに、各めいめい自家族を

控えてると来てる」

「實際、私の方にも種々な事情が有りましてネ。学校の貧乏なところへもつて来て、町や郡からの補助は削けずられる、それでも教員の数は増ふさんけりや手が足りない。私も見かねて、俸給を割さくことにしました……まあ、当分補助は覚おぼ束つかないものと思つて下さい……そのかわり橋本の姉さんは私の方へ引取りましょう。今度その積りで出て来ました」

「アア、そうか。そうして貰えると、姉さんの為にも好かろう」  
こんな話をして、やがて食う物は食い、喋しゃべ舌べすることは喋舌しゃべつたという風に、森彦は脱いで置いた羽織を引掛けた。

「最早も姉さんも見えそうなものだ」と三吉が言った。「夕飯でも

済ましてから来ると見えるナ」

森彦は羽織の紐ひもを結びながら、「今夜は俺の許へ話に来る人が有る。一寸用がある。これで俺は失礼します。それじゃ御馳走に成りました」

「まあ、可いじや有りませんか。もう少し話して行つたら」

「いや、復また逢えたら逢おう。名倉さんへも、皆さんよろしくに宜敷」

紳士風の夏帽子を手に持って出て行く森彦を送つて、間もなく三吉は姉を迎えた。

お種は豊世を連れて三吉に逢いに来た。三吉とお種とは故郷の

方で別れてから以来、このかた一度汽車の窓で顔を合せたぎりである。蔭ながら三吉も姉のことでは心配していたので、こうして逢つて見るまでは安心が出来なかつた。

三吉と豊世の間には初対面の挨拶あいさつなどが交換とりかわされた。

「もうすこし早く来ると、森彦さんとも一緒に成れた」と三吉が姉に言った。

「そうも思いましたがネ、あんまり多勢で押掛けても気の毒だと思つて——」

「叔父さんおじ、昨晩は失礼いたしました」

と豊世は「叔父さん」を珍しそうに言う。

「私達は今、面白い二階に居ますよ」とお種は女持の煙草たばこ入を

取出しながら、「お前さんなぞが上つて見ようものなら、驚く位だ。一つ部屋に、応接間もあれば、ランプ部屋もあれば、お勝手もある……蚊が出て困ると言つて、実の家から蚊帳を借りたは好かつたが、釣つてみると部屋一ぱいサ。環かんを釘くぎへ掛けても、まだダクンダクンしてる……笑つたにも何にも……」

「そういう思いもしてみるのが好う御座んす——」と三吉が言つた。お種と豊世とは顔を見合せた。やがてお種は一服やつて、「私もネ、長いこと伊東の方に居ました。森彦の親切で、すっかり保養も出来たで……是こないだ頃お雪さんから手紙を下すつたように、もしお前さんの許とこで私を呼んでくれるなら、行つて子供の世話でも何でもしてやるわい」



「まあ、暫時しばらく私の方へ来ていて御覧なさい——姉さんには田舎いなかの方が静かで好いかも知れません——そのかわり、何にも御馳走は有りませんぜ」

「御馳走なぞが要いらずか。この節では、お前さん、一週間に一度ずつ森彦の旅舎やじやへ行つて、新聞を読んで、お風呂に入れて貰つて、夕飯を振舞つて貰つては帰つて来る。それより外に何にも楽しみが無い——私は今、そういう日を送つてる」

豊世は姑から細い銀の煙管きせるを借りて、前曲まえこじみに煙草かかを燻かかしてみながら、話を聞いている。

「伊東に居た時分も、お前さん、他の奥様よそなぞが橋本さんは御おうら羨やましい御身分だ、こうして毎日遊んでいらしても、御国から

は御金を送つて来るなんて——他はひと何事なんにも知りませんからネ……」

こういうお種の調子には、存外沈着おちついたところが有るので、三吉も心配した程では無いと思つて来た。弟は話を進めようとしたが、それを言う前に、自分の方のことを持出した。学校の暑中休暇を機会として、名倉の家まで行く積りだと話した。

「先頃お雪さんが出ていらした節は、実の家の方で御一緒に成りました」とお種が言った。

「私はネ、叔父さん」と豊世は引取つて、

「このお宿でお雪叔母さんにお目に懸りました——森彦叔父さんと御一緒に伺つて」

「これはお前より叔母さんの方に先に逢つてますよ」とお種は嫁

の方を弟に指して見せた。

豊世はこの始めて逢った「叔父さん」という人にジロジロ見られるような気がして、姑の傍に小さく成っていた。

夏の日が暮れて、燈火あかりは三人の顔に映った。三吉は姉の容子ようすを眺めながら、こう切出した。

「達雄さんも、名古屋の方だそうですね……」

「そうだそうな」

と答えるお種の顔には憂愁うれいの色が有った。それを彼女は苦にが笑いまぎらで紛まぎらわそうともしていた。

「何処どこも彼処かしこも後家さんばかりに成つちやつた」

「三吉——俺は未だ後家の積りじや無いぞい」と姉は口を尖とがらした。

「積りでなくたって、実際そうじや有りませんか」と弟は戯れるように。

「馬鹿こけ——」

お種は両手を膝ひざの上に置いて、弟の方を睨にらむ真似まねした。三吉も嘆息して、

「姉さん、旦那のことは最早思い切るが宜よう御座んすよ。だって、あんまりヤリカタが洒落しゃれ過ぎてるじや有りませんか。私も森彦さんから聞きましたかね、そんな人に尽したところで、無駄です——

—後家さんが可い、後家さんが可い」

「これ、お前さんのように……そう、後家、後家と言つて貰うまいぞや」

「馬鹿々々しい……亭主に好きそうな人が有つたら、私がまた姉さんに世話して進<sup>あ</sup>げる」

不幸な姉<sup>あわれ</sup>を憐<sup>あわれ</sup>む心から、三吉はこんな串<sup>じょうだん</sup>談<sup>だん</sup>を言出した。お種はもうブルブル身<sup>からだ</sup>を震わせた。

「三吉、見よや、豊世が呆<sup>あき</sup>れたような顔をしてることを——お前さんがそんな悪い口<sup>にく</sup>を利<sup>き</sup>くもんだからサ——国に居る頃から、お前さん、お仙なぞが三吉叔父さん、三吉叔父さんと言つて、よく噂<sup>うわさ</sup>をするもんだから、どんなにか好い叔父さんだろうと思つて豊

世も逢いに来たところだ……」と言つて、お種は嫁の方を見て、

「ナア、豊世——こんな叔父さんなら要らんわい」

豊世は笑わずにいられなかつた。

「しかし、串談はとにかく」と三吉は姉の方を見て、「後家さんというものはそんなにイケナイものでしょうか」

「後家に成つて、何の好い事があらず」

と姉は力を入れた。

「そりや、若くて後家さんに成るほど困ることは無いかも知れませんが、年をとつてからの後家さんはどうです。重荷を卸して、安心して世を送られるようなものじゃ有りますまいかね……人にもよるかも知れませんが、こう私は、姉さん位の年頃に成

つて、子のことを考えて行かれる後家さんが一番好かろうと思うんですが……」

「まあ、女に成つてみよや」

と言つて、姉は取合わなかつた。

その晩、お種は弟の宿に泊めて貰つて、久し振で一緒に話す積りであつた。やがて町の響も沈まつて聞える頃、お種は嫁に向つて、

「豊世、お前はもう帰らツせ」

「今夜は私も母親さんの側に泊めて頂きとう御座んすわ」と豊世が言つた。「何だか御話が面白そうですから……」

姑の許を得て、豊世は自分の宿まで一旦断りに行つて、それか

ら復た引返して来た。三人同じ蚊帳の内に横に成つてからも、姉弟は話し続けた。お種はまくらもと枕許へ煙草盆を引寄せて、一服やつたが、自分で抑おさえることの出来ないほど興奮して来た。伊東に居た頃、よく彼女の瞑つぶつた眼には一つの点が顕あらわれて、それがグルグル廻るうちに、次第に早くなつたり、大きく成つたりして見えた。お種は寝ながらそれを手真似でやつて見せた。しまい終には自分の身からだまでその中へ卷込まれて行くような、可おそろ恐しい焦いらいら々した震え声と力とを出して形容した。

「ア——姉さんは未ほんとだ真実に癒なおっていないんだナ」

と三吉は腹おなかの中で思った。それを側で聞くと、豊世も眠られなかつた。



再会を約して置いて、翌朝お種は三吉に別れた。豊世も姑と一緒にこの旅舎を出た。

「——三吉の家まで行つて置けば、正太の許から迎をよこしてくるたつて、造作なからず」

「ええ、三吉叔父さんの御宅までいらつしやれば、もう郷里へ歸つたも同じようなものですわ」

こんな言葉を換しながら、姑と嫁とは宿の方へ歸つて行つた。例の二階で、復た復たお種が旅仕度を始める頃は、やがて八月の末であつた。森彦の旅舎だの、直樹の家だの、方々へ暇乞い

にも出掛けなければ成らぬ、と思うと、心はあわただしかつた。

ジメジメと蒸暑い午後、一番後廻しにした実の留守宅に暇乞に寄る積りで、お種は宿を出た。橋本へ嫁いてから以来このかた——指を折つて数える程しか彼女は自分の生家さとへも帰つていない。その中で、小泉の家が東京へ引越したばかりの頃、一度彼女は母と一緒に成つたことや、その時も夫がある女に關係して、その為長年薬方を勤めた大番頭の一人が怒つて暇を取つたことや、その時こそは夫婦別をしようかとまで彼女も悲しく思つたことや、それからその時ぎり母にも逢えなかつたことなどを胸に浮べて行つた。

小泉の家も段々小さく成つた。ある狭い路地を入れて、溝どぶ板いたの上を踏んで行くと、そこには種々な生活を営む人達が一種の陰

気な世界を形造っている。お種は薄暗い格子戸の前に立った。

「誰方<sup>どなた</sup>？」

こう若々しい声で言つて、内から顔を出したのは、お俊であつた。

「母親さん——橋本の伯母<sup>おば</sup>さんが被入<sup>いら</sup>しつてよ」

と復た娘は奥の方へ声を掛けた。橋本の伯母と聞いて、お倉は古びた簾<sup>すだれ</sup>の影から這出<sup>はいだ</sup>した。毎年のようにお倉は脚氣<sup>かっけ</sup>を煩<sup>わづら</sup>うので、その夏も臥<sup>ね</sup>たり起きたりして、二人の娘を相手に侘<sup>わび</sup>しい女暮しをしているのである。

過去つた日を思わせるような、こういう住居<sup>すまい</sup>に不似合なほど大きい長火鉢<sup>ながひばち</sup>の側で、女同志は話した。

「三吉が来いと言つてくれるで、私も暫時しばらくあれ彼の方へ行つて厄介に成るわいなし」とお種が言つた。

「そりや、まあ結構です——三吉さんは私共へも一寸寄つて下さいました」とお倉は寂しそうに笑いながら、「私がこんな幽霊のような頭髪あたまをしていたもんですから、三吉さんも驚いて逃げて行つて了いました……」

「私でも、ドモナラン」

この「ドモナラン」は茶盆をそこへ取出したお俊を笑わせた。

「俊」とお倉は娘の方を見て、「貰つたお茶が有つたらう」

「母親さん、あのお茶は最早も駄目よ」とお俊はすこし顔を紅くした。

「お倉さん、番茶で沢山です。そんなにかま関つて下さると、生家さとへ来たような気がしない……」とお種は快活らしく笑つて、

「そう言えば、三吉も可笑おかしなことを言う奴だテ。私が豊世を連れて彼の宿あれまで逢いに行きましたら、何をまた彼が言出すかと思つと、何処どこも彼処かしこも後家さんばかりに成つちやつた——なんて。

私は怒つてやつた」

「ほん真実に、皆な後家さんのようなものですよ——でも、姉さんなぞは未だ好う御座んすサ。私を御覧なさいな。私くらい運の悪い者は無い——私は小泉へお嫁に來ましてから、旦那と一緒に暮したなんてことは、貴方の三分一も有りやしません——留守、留守で、そんなことばかりしてゐるうちに一生済んでしまいました」

染めずにいるお倉の髪は最早老婦としよりのように白い。

不幸ふしあわせだ、不幸だと言いなながら氣の長いお倉の様子は、余計にお種をセカセカさせた。

お種は自分の生家さとを探すような眼付をして、四辺あたりを眺め廻した。実は留守、お杉は亡くなる、宗蔵は他よそへ預けられている、よく出入した稲垣いながき夫婦なども遠く成った。僅わずかに兄弟の力を頼りに細々と煙を立てる有様である。二間ばかりある住居で、日も碌ろくに映あらなかつた。それに、幾度か引越した揚句あげくのことで、ずっと昔の生家を思出させるような物は殆んどお種の眼に映らない。唯、奥

の方の壁に、父の遺筆が紙表具の軸に成って掛っている。そこには、未だそれでも忠寛の精神が残っていて、すた廃れ行く小泉の家に対するかのような……

こういう衰えた空気の中でも、お俊はズンズン成長した。高等女学校程度を卒おえる程の年頃に成った。

「御蔭様で、俊も、学校の方の成績は始終優等だもんですから、校長先生も大層肩を入れて下さいましてネ」と言つて、お倉は娘の方を見て、「お前の描いた画を持って来て、伯母さんにお目にお掛けな」

お俊は幾枚かの模写をそこへ取出して来て、見せた。この娘は自分で模様を描いた帯を《しめ》ていた。

「漸ようやくこういう色彩いろの入ったものを許されました」とお倉は娘の画をお種に指して見せて、「三吉さんが、画や歌のお稽古けいこは止やめて学校だけにさしたら可からう——なんて言うんですけれど、折角今までやりましたものですから、せめて画の先生だけへは通わせたいと思いますんですよ。俊も好きですから……」

「そうですね。ここで止めさせるのは惜しいものだ」とお種が言った。

「私もネ、何を儉約しても斯娘これには掛けたいと思ひまして……どうして、貴方、この節では母親おつかさんの言うことなぞを聞きやしません。何ぞと言うと私の方がやりこめられる位です」

「教育が違いますからネ」



「ええええ、私共の若い時などは、今のように学校が有るじやなし……」

「鶴は？」とお種はお俊の妹のことを聞いてみた。

「御友達（とこ）の許へでも遊びに行つたんでしよう」とお俊が答える。

「俊、鶴（つう）ちゃんの免状は何処にあつたつけねえ。伯母さんにお目に掛けたら……まあ、あの娘（こ）も学校が好きでして、試験と言えば賞を頂いて参ります」

こんな話をしながら、お倉は吸付けた長煙管の口を一寸袖で拭（ふ）いて、款待顔（もてなしが）にお種の方へ出した。狭い廂間（ひあわい）から射し入る光は、窓の外を明るくした。簾越（すだれ）しに隣の下駄職（げたしよく）の劳苦する光景（さま）も見える。溝（どぶ）の蒸されるにおいもして来る。

母に言付けられて、お俊は次の間に置いてある桐きりの机の方へ行った。実の使用つかつていた机だ。その抽匣ひきだしの中から、最近に来た父の手紙を取出した。

お倉は鼠色の封筒に入った獄中の消息をお種に見せて、声を低くした。「ここにも御座います通り、橋本さんへも宜よろしく敷申すようにつて」

「実は何事なんにも外部そとのことを知らずにいるんでしょうよ」とお種は嘆息した。

暫しばらく時女同志は無言でいた。お倉は聞いて貰う積りで、

「なにしろ、貴方、長い間の留守ですから、私も途方に暮れてしまいましたよ……こんな町中に住まわないたって、もつと御屋賃の御廉おやすい処へ引越したら可かろうなんて、三吉さんもそう言いますんですけれど、ここの家に在ある道具は皆な、貴方 差さし押おさえ……娘達を学校へ通わせるたつて、あんまり便利の悪い処じや困りますし……それに、私共の借財というのが……」

次第かきくどに搔口説くような調子を帯びた。お倉の癖で、枝に枝がさして、終しまには肝心の言おうとすることが対あ手に分あらないほど混こん雑らかって来た。

「あれで、森彦も自分の事業の方の話は何事なんにもしない男ですが——」とお種はお倉の話さえぎを遮さった。「貴方の方に、郷里くにに、自分の

旅舎やどやじゃ……どうしてナカナカ骨が折れる。考えてみると、よく彼あれもやったものです」

「真実ほんとに、森彦さんには御氣の毒で」

「彼の旅舎へ行つてみますとネ、それはキマリの好いものですよ。酒を飲むじやなし、煙草を燻ふかすじやなし……よくああ自分が責められたものだと思つて、私は何時でも感心して見て来る。何卒どうかして彼の思うことも遂げさして遣りたいものですよ」

身内のものの噂は自然と宗蔵のことに移つた。

「宗さんですか」とお倉はさもさも厄介なという風に、「世話ししんてくれる人がよく来て話します。まあ心はどれ程御強健ごじょうけんなものか知れませんなんて……こういう中でも、貴方、月々送るもの

は送らなけりや成りません。森彦さんも御大抵じや有りませんサ」  
 「彼は小泉の家に附いた厄介者です。どうしてまたあんな者が出来たのですかサ」

「もう少し病人らしくしていると可いんですけれど、わがまま我儘なん  
 ですからねえ——森彦さんはああいう気象でしょう、ほんと真実に宗蔵  
 のような奴は……けだもの獣でもあろうものなら、踏殺してくれないな  
 んて……」

お倉やお種が笑えば、お俊も随ついて笑った。このじょうだん諺語は、  
 森彦でなければ言えないからであつた。

やがて別れる時が来た。

「三吉さんの許ところへいらつしやいましたら、俊や鶴のことを宜敷よろしく

御願ひ申しますツて、そう仰つて下さい……何卒……」

こう力を入れて頼むお倉の言葉を聞いて、お種は小泉の家を出た。東京を発つ朝は、お種は豊世やお俊やお鶴などに見送られた。

豊世は幾度か汽車の窓の下へ来て、涙ぐんだ眼で姑の方を見た。

## 十

一年余旅の状ありさま態ようやを續けて、漸くお種は弟の家まで辿り着いた。三吉は遠く名倉の家の方から歸つて来て、お雪と共に姉を待受けているところであつた。

「才、橋本の姉さん——」

とお雪は台所から飛んで出て来て、たすきはす襷をはず除しながら迎えた。

奥の部屋へ案内されたお種の周囲まわりには、三吉夫婦を始め、子供等がめずらしそうに集った。お種は、せせこま狭隘せせこましい都会の中央まんなかから、水車の音の聞えるような処へ移つて、弟等と一緒に成れたことを喜んだ。彼女は別に汽車にも酔わなかつたと言つた。

「房ちゃん、橋本の伯母さんだが、覚えているかい」と三吉は年長えの娘に尋た。

「一度汽車の窓で逢あつたぎりじや、よく覚えが有るまいテ」と言つて、お種はお房の顔を眺ながめて、「どうだ、伯母さんのような気がするか」

「皆な大きくなりましたらう」

「菊ききちゃんの大きく成つたには魂たまげ消た。姉さんの方と幾いくら許も違わ  
ない」

お種はそこに並んでゐる二人の娘を見比べた。

「へえ、こういうのが今年出来ました。見て下さい」とお雪は次の部屋に寝かしてあつた乳ちのみご呑児を抱いて来て見せた。

三番目もやはり女の児で、お繁しげと言つた。お繁は見慣れない伯母を恐れて、母の懐ふところへ顔を隠したが、やがてシクシクやり出した。お雪は笑つて乳房くわを咬えさせる。すこし慣れるまで、他よその方を向いていようなどと言つて、お種も笑つた。

「房ちゃんいくつは幾歳いくつに成るの？」とお種が手土産てみやげを取出しながら聞いた。



「伯母さんが何歳に成るツて」とお雪も言葉を添える。

「ね、房ちゃんがこれだけで、菊ちゃんがこれだけ」とお房は小さな掌てひろを展ひろげて、指を折ひつて見せた。

「フウン——お前さんが五歳いっつで、菊ちゃんが三歳みつ——そう御お好り好こうじや、御ご褒ほう美びを出いささずば成いるまい——菊ちゃんにも御お土み産やが有ありますよ」

「御土産！ 御土産！」

と二人の子供は喜んで、踊まつて歩あいた。

「御行儀を好くしないと伯母さんに笑われますよ。真ほん実とにイタズラで仕方が有ありません」とお雪が言いつた。

親達の側にばかり寄よつていたお房は、直ただに伯母の方かたに行いつた。

そして、母に勧められて、無邪気な「亀さん」の歌などを聞かせた。

お房の小供らしい声には、聞いている伯母に取って、幼い時分のことまでも思わせるようなものが有った。

「これはウマイもんだ」とお種は左右に首を振った。「もう一つ伯母さんに歌って聞かせとくれ……何年振で伯母さんはそういう声を聞くか知れない……」

始めて弟の家を見るお種には、草<sup>わらぶき</sup>葺の屋根の下もめずらしかった。お種はお雪に附いて、裏の畠<sup>はたけ</sup>の方まで見て廻<sup>ま</sup>って、復<sup>ま</sup>た三

吉の居る部屋へ戻つて来た。

「才、ほんに、柿の樹が有るそうな」とお種は身を曲めて、庭の隅に垂下る枝ぶりを眺めながら、「嘉助がよく御厄介に成つたもんですから、帰つて来てはその話サ——柿だの、李だの、それから好い躑躅だのが植えてあるぞなしツて」

庭には桜、石南花なども有つた。林檎は軒先に近くて、その葉の影が部屋から外部を静かにして見せた。

お雪は乳呑児を抱いて来た。「先刻泣いたかと思うと、最早こんな笑っています」

「ホ、御機嫌が直つたそうな」とお種はアヤして見せて、「これは好い児だ」

「私共のようにこう多勢でも困りますけれど、貴方の許ところでも御一人位……」

「どうも豊世には子供が無さそうですテ……」

「ほんと眞実に、分けて進あげたい位だ」と三吉が笑った。

「くれるなら貰うわい」とお種は串談じょうだんのように言つて、「し

かしこれは皆な持つて生れて来るものだゲナ。持つて生れて来ただけは産む……そういうように身体そなに具そなわつてゐるものと見えるテ——授からん者は仕方ない」

「なにしろ、私のところなぞは書生ばかりで始めた家でしょう——」と三吉は言つた。「菊ちゃんが出来て、私が房ちゃんを抱いて寝なければ成らない時分は、一番困りましたネ……どうしても

母親でなけりや承知しない……寒い晩に、子供は泣通し……こんなに子供を育てるのは厄介なものかしらんと思つて、實際私も泣きたい位でした」

「皆なそうして育つて来たのだわい」

「よく書生時代には、男が家を持った為にへコしまんで了うなんて、そんな意気地の無いことがあるもんか、と思ひましたツけが——  
考えてみると、多くの人がへコむ訳ですネ」

「お雪さん、貴方は今女中無しか」

「ええ、幸い好いのが見つかったかと思ひましたら、養蚕をする間、親の方で帰してくれつて」

「どうして、それじゃナカナカ骨が折れる」と言つて、お種は家

の内を眺め廻して、「しかし、お雪さん、私も御手伝いしますよ。今日からは貴方の家の人と思つて下さいよ」

何となくお種は興奮していて、時々自分で制えよう制えようとするらしいところが有る。顔色もいくらか蒼あおざめて見える。三吉は姉を休ませたいと思つた。

「菊ちゃん、来うや」

こう訛なまりのある、田舎娘らしい調子で言つて、お房は妹と一緒に裏の方から入つて来た。

「母さん」

お房は垣根の外で呼んだ。お菊も伯母の背中に負おぶさりながら、一緒に成つて呼んだ。子供は伯母に連れられて、町の方から帰つてきた。お種が着いた翌日の夕方のことである。

「オヤ、お提ちようちん燈ちんを買つて頂いて——好いこと」お雪は南向の濡ぬれえん縁えんのところちよつとに立つていた。

「一寸ちよつとそこまで町を見に行つて参りました」とお種は垣根の外から声を掛けた。お房は酸ほおずき漿ちようちん提燈ちんを手にして、先まず家へ入つた。つづいて伯母も入つて、そこへお菊を卸した。

喜び騒ぐ二人の子供から、お雪は提燈を受取つて、火を点とほした。それを各めいめい自じに持たせた。

「菊ちゃん、そんなに振つてはいけませんよ——これは蠟燭ろうそくが

すこし長過ぎる」とお種が言った。

「あか紅い紅い」とお雪はお繁を抱いて見せた。

「どれ、父さんの許へ行つて見せて来ましょう」

こう言いながら、お種は子供を連れて、奥の方へ行つた。

「父さん、お提燈」

とお房がさしつけて見せる。丁度三吉も一服やっているところであつた。

「へえ、好いのを買つて頂いたネ」

と父に言われて、子供は彼方あちこち是方と紅い火を持って廻つた。

「私もここで一服頂かずか」とお種は三吉の前に坐つた。「こう  
いう子供の騒ぐ中で、よくそれでも仕事が出来たものだ……ほんと真実



に、子供が有ると無いじや家の内が大違いだ……」

何かにつけて、お種の話は夫の噂うわさに落ちて行つた。何故、達雄が妻子を捨てたかという疑問は、絶えず彼女の胸を離れなかつた。「妙なものだテ」とお種は思出したように、「旦那が未だ郷里くにの方に居る時分——まあ、唐突だしぬけと言つても唐突に、ふいとこんなことを言出した。お種、お前を捨てるようなことは決して無いで、安心しておれやツて。それが、お前さん、夢にも私はそんなことを思つたことの無い時だぞや。それを聞いた時は、私はびくツとした……」

「姉さん、そういう時分に家の方のことが幾分いくぶんか解りそうなものでしたネ」

「解るものかよ。朝から晩まで、御客、御客で。それ酒を出せ、肴さかなを出せ、出さなければ、また旦那が怒るんだもの。もうお前さん、ゴテゴテしていて、そんなことを聞く暇もあらずか」

「私が姉さんの許へ行つた時分は、達雄さんも勉強でしたがナア」  
「あの調子で行つてくれると、誠に好かつた。直に物に飽きるから困る。飽きが来ると、復た病気が起る——旦那の癖なんですからネ」

「それはそうと、達雄さんも今どうしていきましょう」

「どうしていることやら……」

「やはりその女と一緒にしようか」

「どうせ、お前さん長持ちがせずか——御金が無くなつて御覽な

さい。何時までそんな女が旦那々と立てて置くもんですかね……  
…今度は自分が捨てられる番だ……そりやあもう、眼に見えてる  
……」

「先ずそういうことに成って行きそうですナ」

「そこですよ、私が心配して遣るのは。旦那もネ、橋本の家で生  
れた人ですから、何卒して私は……あの家で死なして遣りたくて

サ」

喧嘩でもしたか、子供が泣出した。お種は三吉の傍を離れて、

子供の方へ行つた。

幼い子供達は間もなくお種に取つて、離れがたいほど可愛いものと成つた。肩へ捉つかまらせるやら、萎しなびた乳房を弄なぶらせるやら、そんな風にして付纏つきまとわれるうちにも、何となくお種は女らしい満足を感じた。夫に捨てられた悲かな哀しみも、いくらか慰められて行つた。

炉辺に近い食卓の前には、お房とお菊とが並んで坐つた。伯母は二人に麦香煎むぎこがしを宛行あてがつた。お房は附木つけぎで甘そうに嘗なめたが妹の方はどうかすると茶碗ちやわんを傾かしげた。

「菊ちゃん、お出し」と言つて、お種は妹いもうと娘むすめの分だけ湯に溶かして、「どれ、着物おへべがババく成ると不可いけいから、伯母さんが養つて進あげる」

子供にアーンと口を開かせる積りで、思わず伯母は自分の口を開いた。

「ああ、オイシかった」とお房は香煎こがしの附いた口端を舐め廻した。  
「房ちゃんも菊ちゃんも頂いて了つたら、すこし裏の方へ行つて遊んで来るんですよ。母さんが何していらつしやるか、見てお出なさい——母さんは御洗濯かな」

「伯母さん、復た遊びましょう」とお房が言った。

「ええ、後で」とお種は笑つて見せた。「伯母さんは父さんの許とこで御話して来るで——」

子供は出て行った。

三吉はその年の春頃から長い骨の折れる仕事を思立っていた。

学校の余暇には、裏の畠へも出ないで、机に向つていた。好きな野菜も、稀たまに学校の小使が鍬くわを担かついで見廻りに来るに任せてある。「三吉さん、御仕事ですか」とお種は煙草入を持って、奥の部屋へ行った。彼女は弟の仕事の邪魔をしても気の毒だという様子をした。

「まあ、御話しなさい」

こう答えて、弟は姉の方へ向いた。丁度お種も女の役の済むという年頃で、多羞はずかしい娘の時に差して来た潮が最早身体から引去りつつある。彼女は若い時のような忍耐こらえじよう力が無くなった。心細くばかりあつた。

「妙なものだテ」とお種が言出した。この「妙なものだテ」は弟

を笑させた。その前置を言出すと、必<sup>きつ</sup>とお種は夫の噂を始めるか  
ら。

「旦那も来年は五十ですよ。その年に成つても、未だそんな氣で  
いるとは。実に、ナサケないじや有りませんか……男というもの  
は可恐<sup>おそろ</sup>しいものですネ……私が旦那の御酒に對手<sup>あいて</sup>でもして、歌の  
一つも歌うような女だったら好いのかも知れないけれど——三吉  
さん、時々私はそんな風に思うことも有りますよ」

苦<sup>にがわらい</sup>笑<sup>ほお</sup>したお種の頬<sup>ほお</sup>には、涙が流れて来た。その時彼女は達  
雄が若い時に秀才と謳<sup>うた</sup>われたことや、国を出て夫が遊学する間彼  
女は家を預つたことや、その頃から最早夫の病氣の始まつたこと  
などを弟に語り聞せた。

「ある時なども——それは旦那が東京を引揚げてからのことですよ——復た病気が起つたと思ひましたから、私が旦那の氣を引いて見ました。『むむ、あの女か——あんな女は仕方が無い』なんて酷くひど譏けなすじや有りませんか。どうでしょう、三吉さん、最早旦那が関係していたんですよ。女は旦那の種を宿しました。その時、私もネ、寧いっそその児を引取つて自分の子にして育てようかしら、と思つたり、ある時は又、みすみす私が傍に附いていながら、そんな女に子供まで出来たと言われては、世間へ恥かしい、いかに言つてもナサケないことだ、と考へたりしたんです。間もなく女は旦那の児を産落しました。月つき不足たらずで加おまけに乳が無かつたもんですから、満まる二月とはその児も生きていなかつたそうですよ——し



かし、旦那も正直な人サ——それは気分が優しいなんて——自分が悪かったと思うと、私の前へ手を突いて平謝りに謝る。私は腹が立つどころか、それを見てもう気の毒に成つてサ……ですから、今度だつても旦那が思い直して下さりさえすれば……ええええ、私は何処までも旦那を信じているんですよ。豊世とも話したことですがネ。私達の誠意が届いたら、必と阿父さんは帰つて来て下さるだろうよツて……」

「伯母さん、お化粧するの？」とお房は伯母の側へ来て覗いた。

「伯母さんだつて、お化粧するわい——女で、お前さん、お化粧

しないような者があらずか」

お雪や子供と一緒に町の湯から帰って来たお種は、自分の柳やなぎ行李ごうりの置いてある部屋へ入って、身じまいする道具ひろを展ひげた。

そこは以前書生の居た静かな部屋で、どうかすると三吉が仕事を持込むこともある。家中で一番引隠れた場処である。お種が大事にして旅へ持って来た鏡は、可成かなり大きな、厚手の玻璃ガラスであつた。

それむかに對むかつて、サツパリと汗あせ不知せしらずでも附つけようとすると、往時むかし

小泉おぼあさんの老祖母おばあさんが六十余むそに成るまで身だしなみを忘れずに、毎日薄

化粧けしょうしたことなどが、昔風おんなの婦人おんなの手本としてお種の胸むねに浮うんだ。

年のいかなふせいい芸者風情ふせいに大切たいせつな夫おつとを奪うば去すられたか……そんな遺瀨やるせないなような心こころも起おこつた。残酷ざんくなほど正直ちやうな鏡かがみの中には、最早ちやう週しゅう

落し尽くした女が映っていた。肉が衰えては、節操も無意味で有るかのよう……

頬の紅いお房の笑顔が、伯母の背後から、鏡の中へ入って来た。「房ちゃん、お前さんにもお化粧つくりして進あげましょう——オオ、オオ、お湯ぶうに入いって好い色に成つた」

と言われて、お房は日に焼けた子供らしい顔を伯母の方へ突出した。

やがてお種はお房を連れて、お雪の居る方へ行いった。お雪も自分で束髪を直しているところであつた。

「母さん」とお房は真白に塗られた頬を寄せて見せる。

「へえ、母さん、見てやって下さい——こんなに奇麗きれいに成なりました」

たよ」とお種が笑った。

「まあ……」とお雪も笑わずにいられなかつた。「房ちゃんは色が黒いから、ほんと真実におか可笑しい」

しばらく暫時、お種はそこに立って、お雪の方を眺めていたが、しまい終に堪え切れなくなつたという風で、こう言出した。

「お雪さん、そんな田舎臭い束髪を……どれ、貸して見させ……私は豊世のを見て来たで、一つ東京風に結つてみてあ進げるに」  
お房は大きな口を開きながら、家の中を歌って歩いた。

南の障子に近いところは、お雪が針仕事を展げる場所である。

お種はお雪と相さしむかい対たいに坐つて、余念もなく秋の仕度の手伝いをした。障子の側は明るくて、物を解いたり縫つたりするに好かつた。

「菊ちゃん、伯母さんにその写真を見せとくれ——伯母さんは未だよく拝見しないのが有つた」

お種は子供が取出した幾枚かの写真を受取つた。お雪が生家さとの方の人達の面影おもかげは順々に出て来た。

「お雪さん」とお種は勉の写真を取上げて、「この方がお福さんの旦那さんですか」

「ええ」

「三吉も、彼方あちらで皆さんに御目に掛けて来たそうですが……やは

りこの方は名倉さんの御養子の訳ですネ。商人は何処どこか商人らしく撮とれてますこと」

こう言つてお種は眺めた。

「菊ちゃん、そんなに写真を玩具おもちゃにするんじや有りませんよ」

と母に叱られても、子供は聞入れなかつた。お種は針仕事を一ひ切ときりにして、前掛を払いながら起たちあが立たつた。

「さあ、房ちゃんも菊ちゃんも、伯母さんと一緒にいらつしやい——復た御城跡の方へ行つて見て来ましょう」

お種は帯をメ《しめ》直して、二人の子供を連れて出て行つた。お雪の側には、そこに寝かしてあつたお繁だけ残つた。部屋の障子の開いたところから、何となく秋めいた空が見える。白いちぎ

れちぎれの雲が風に送られて通る。

「姉さんは？」と三吉が学校から帰つて来て聞いた。

「散歩がてらオバコの実を採りにいらつしやいました——子供を連れて」

「そんな物をどうするんかネ」

「髪の毛に成さるとかツて——煎じてせん付けてると、光沢つやが出るんだ

そうです——なんでも、伊東の方で聞いてらしたんでしよう」

三吉は小倉の行燈袴あんどんばかまを脱捨てて、濡縁ぬれえんのところへ足を投

出した。

「それはそうと、姉さんは木曾きその方へ子供を一人連れて行ききたがつてるんだが——どうだネ、繁ちゃんを遣やることにしては」

こんなことを夫が言出した。お雪は答えなかつた。

「こう多勢じやヤリキレない」と言つて三吉はお繁の寝ている様子を眺めて、「姉さんに一人連れてつて貰えば、吾<sup>われわれ</sup>儕<sup>われ</sup>の方でも大に助かるじやないか……しきりに姉さんがそう言うんだ……」

「そんなことが出来るもんですか」とお雪は言葉に力を入れた。

三吉は嘆息して、「姉さんだつても寂しいんだろうサ……そりや、お前、正太さんには子供が無いから、あるいは長く傍に置きたいと言うかも知れないし、くれろと言うかも知れない。その時はその時サ。当分姉さんが繁ちゃんを借りて行って、育てて見たいと言うんだ。どうだネ、お前は——俺<sup>おれ</sup>は一人位貸して遣つても可いと思うんだが」



「貴方は遣る気でも、私は遣りません——そんなことが出来るか出来ないか考えてみて下さい——」

「預けたって、お前、別に心配なことは無いぜ。姉さんのことだから必<sup>きつ</sup>と大切にしてくれる」

「姉さんが何と仰<sup>おつしや</sup>つても——繁ちゃんは私の児です——」

姉が末の子供を郷里の方へ連れて行きたいという話は、三吉の方にあつた。お雪は聞入れようとしなかつた。

秋も深く成つて、三吉の家ではめずらしく訪ねて来た正太を迎えた。正太は一寸上京した帰りがけに、汽車の順路を山の上の方

へ取つて、一夜を叔父の寓居すまいで送ろうとして立寄つたのであつた。奥の部屋では客と主人の混り合まぎつた笑声が起つた。お種は台所の方へ行つたり、吾子わがこの側へ行つたりして、一つ処ところに沈着おちついていられないほど元氣づいた。

「正太や——お前は母親おつかさんを連れてつてくれる人かや」

「いや、今度は途中で用達ようたしの都合も有りますからネ——母親さんの御迎には、いずれ近いうちに嘉助をよこす積りです」

「そんなら、それで可いが、一寸お前の都合を聞いて見たのさ。何も今度に限つたことは無いで……」

三吉を前に置いて、橋本親子はこんな言葉を換かわした。漸ようやくお種は帰郷の日が近づいたことを知つた。その喜よろこび悦よろこびを持って、復た

お雪の方へ行つた。

三吉と正太とは久し振で話した。この二人が木曾以来一度一緒に成つたのは、達雄の家出をしたという後であつた。顔を合せる度に、二人は種々さまざまな感に打たれた。でも、正太は元気で、父の失敗を双肩になに荷おうとする程の意気込を見せていた。

「正太さん。姉さんも余程沈おちつ着いて来ましたろう。僕の家へ来たばかりの時分はどうも未だ調子が本当で無かつた——僕が姉さんに、郷里くにへ帰つたら草鞋わらじでも穿はいて、薬を売りに御出掛なさいなんて、そんな串じょうだん談だんを言つてるところです」

「そういう氣分に成れると可いいんですけれど……然しかし、最早連れて帰つても大丈夫でしょう。母親さんが家へ行つて見たら、定め

し驚くことでしようナア。なにしろ、私も手の着けようが有りませんから、一切を挙げ皆さんに宜敷頼むよろしく、持つて行きたい物は持つておいでなさい——何もかもそこへ投出して了ったんです」

「その決心は容易でなかつたらうネ」

「ところが、叔父さん、その為に漸く家の整理が済みました。そりやあもう、襖ふすまに張つてある短冊たんまで引剥ひっぺがして了ったんですからネ……そういう中でも、豊世の物だけは、一品だつて私が手を触れさせやしません……まあ、母親さんが居なくて、反かえつて好かつた。あれで母親さんが居ようものなら、それほどの決断には出られなかつたかも知れません。田舎はそこへ行くと難ありがた有あいもので、橋本の家の形も崩さずに遣つて行かれる。葉は依然として売

れてる——最早嘉助の時代でも有りませんから、店の方は若い者に任せましてネ、私は私で東京の方へ出ようと思つています。これからは私の奮発一つです」

「へえ、正太さんも東京の方へ……実は僕も今の仕事を持って、ここを引揚げる積りなんですが……」

「私の方が多分叔父さんよりは先へ出ることに成りましょう」

「随分僕も長いこと田舎で暮しました」

「お仙はどうしたかいナア」と不幸な娘のことまで委しく聞きたがる母親を残して置いて、翌あくるひ日正太は叔父の許を発たつて行つた。

そろそろお種も夫の居ない家の方へ帰る仕度を始めた。達雄が残して行つた部屋——着物——寢床——お種の想像に上るものは、そういう可おそろ恐しいような、可なつか懐しいようなものばかりで有つた。

「三吉さん——私もネ、今度は豊世の生さと家へ寄つて行く積りですよ。寺島の母親さんにも御目に掛つて、よく御話したら、必きつと私の心こころもち地ちを汲くんで下さるだろうと思ひますよ」

隣室に仕事をしている弟の方へ話し掛けながら、お種は自分の行李を取出した。彼女はお雪と夏物の交換などをした。

やがて迎の嘉助が郷くに里の方から出て来た。この大番頭も、急に年をとつたように見えた。植物の好きなお種は、弟がある牧場の方から採つて来たという谷の百合、それから城跡で見つけた黄な

花の咲く野菊の根などを記念に携えて、弟の家族に別れを告げた。お種は自分の家を見るに堪たえないような眼付をして、供の嘉助と一緒に、帰郷の旅に上った。

あくるとし

翌年の三月には、いよいよ三吉もこの長く住慣れた土地を

離れて、東京の方へ引移ろうと思う人であった。種いろいろ々な困難は

彼の前に横たわっていた。一方には学校を控えていたから、思う

ように仕事も進はかど捗らなかつた。全く教師を辞やめて、専心労作する

としても、猶なお一年程は要かかる。彼は既に三人の女の児の親である。

その間、妻子を養うだけのものは是非とも用意して掛らなければ成らなかつた。

とにかく、三吉は長い仕事を持って、山を下りようと決心した。

「オイ、洋服を出しとくれ」

とある日、三吉は妻に言付けた。三吉はある一人の友達を訪ねようとした。引越の仕度をするよりも何よりも、先まず友達の助力を得たいと思つたのである。

寒そうな馬車の喇叭らつぱが停ステーション車場ヨン寄よりの往来の方で起つた。その

日は三吉と同行を約束した人も有つたが、途中の激寒を懼おそれて見合せた位である。三吉は外がい套とうの襟えりで耳を包んで、心配らしい眼付をしながら家を出た。白い鼻息をフウフウいわせるような馬が、客を乗せた車を引いて、坂道を上つて来た。三吉はある町の角で待合せて乗つた。



雪はまだ深く地にあつた。馬車が浅間の麓ふもとを廻るにつれて、乗客は互に膝ひざを突合せて震えた。二里ばかり乗つた。馬車を下りて、それから猶山深く入る前に、三吉はある休茶屋の炉辺ろべたで凍えた身体からだを温めずにはいられなかつた。一里半ばかりの間、往来する人も稀まれだつた。谷々の氾濫はんらんした跡は真白ましろに覆おおわれていた。

訪ねて行つた友達は牧野と言つて、辺鄙へんぴな山村に住んでいた。ふとしたことから三吉はこの若い大地主と深く知るようになつたのである。そこへ訪ねて行く度に、この友達の静かな書齋や、樹木の多い庭園や、好く整理された耕地など——それを見るのを三吉は楽しみにしていたが、その日に限つては心も沈着かなかつた。

主人を始め細君や子供まで集つて、広い古風な奥座敷で話した。この温い家庭の空気の中で、唯三吉は前途のことを思い煩わづらつた。事情を打開けて、話してみようと思ひながら、翌日に成つてもついでそれを言出す場合が見当らなかつた。

到頭、三吉は言わず仕舞に牧野の家の門を出た。そして、制おさえがたい落胆と戦いつつ、元来た雪道を歸つて行つた。一時間あまり乗合馬車の立場たてばで待つたが、そこには車夫が多勢集つて話したり笑つたりしてゐた。思はず三吉も喪心した人のように笑つた。やがて馬車が出た。沈んだ日光は寒い車の上から彼の眼に映つた。林の間は黄かがやに耀やいた。彼は眺め、かつ震えた。

家へ歸つてからも、三吉はそう委くわしいことを家のものに話して

聞かせなかつた。末の子供は炬燵こたつへ寄せて寝かしてあつた。曆や錦絵を貼はりつけた古壁の側には、お房とお菊とがお手玉の音をさせながら遊んでいた。そこいらには、首のちぎれた人形も投出してあつた。三吉は炬燵にあたりながら、姉妹の子供を眺めて、どうして自分の仕事を完成しよう、どうしてその間この子供等を養おうと思つた。

お房は——三吉の母に肖にて——頬の紅い、快活な性質の娘であつた。丁度牧野から子供へと言つて貰つて来た葡萄ぶどうジャムの土産があつた。それをお雪が取出した。お雪は雛ひなでも養うように、二人の子供を前に置いて、そのジャムを嘗なめさせるやら、菓子かし麵包パンにつけて分けてくれるやらした。

三吉がどういふ心の有様でいるか、何事もそんなことは知らな  
いから、お房は機嫌きげんよく父の傍へ来て、こんな歌を歌つて聞かせ  
た。

「兎うさぎ、兎、そなたの耳は

どうしてそう長いぞ——

おらが母の、若い時の名物で、

笹の葉ツ子嚙のんだれば、

それで耳が長いぞ」

これはお雪が幼少おさない時分に、南部地方から来た下女とやらに習  
った節で、それを自分の娘に教えたのである。お房が得意の歌で  
ある。

三吉は力を得た。その晩、牧野へ宛てて長い手紙を書いた。

幸にも、この手紙は、彼の心を友達へ伝えることが出来た。その返事の来た日から、牧野は彼の仕事に取つての擁護者であつた。しかも、それを人に知らそうとすらしなかつた。三吉は牧野の深い心づかいを感じた。自分のベストを尽すということより外は、この友達の志に酬<sup>むく</sup>うべきものは無い、と思つた。

四月に入つて、三吉は家を探しがてら一寸上京した。子供等は彼の帰りを待<sup>まちわ</sup>たびて、幾度か停車場まで迎えに出た。北側の草屋根の上には未だ消残つた雪が有つたが、それが雨垂のように軒を

つたつて、溶け始めていた。三吉は帰つて来て、東京の郊外に見つけて来た家の話をお雪にして聞かせた。一軒、植木屋の地内に往来に沿うて新築中の平屋が有つた。まだ壁の下塗もしてない位で、大工が入つて働いている最中。三人の子供を連れて行つて其<sup>こ</sup>処で仕事をするとしては、あまりに狭過ぎるとは思われたが、いかにも閑静な、樹木の多い周囲が気に入つた。二度も足を運んで、結局工事の出来上るまで待つという約束で、其処を借りることに決めて来た。こんな話をして、それから三吉は思出したばかりでも汗の流れるという風に、

「家を探して歩くほど厭<sup>いや</sup>な気のするものは無いネ——加<sup>おまけ</sup>に、途中で、ヒドく雨に打たれて……」

と言つて聞かせた。女子供には、東京へ出られるということが訳もなしに嬉しかったのである。

その晩、お房やお菊は寐ねる前に三吉の側へ来て戯れた。

「皆な温順おとなしくしていたかネ」と三吉が言つた。「サ、二人ともそこへ並んで御覧」

二人の娘は喜びながら父の前に立つた。

「いいかね。房ちゃんが一号で、菊ちゃんが二号で、繁ちゃんが三号だぜ」

「父さん、房ちゃんが一号？」と姉の方が聞いた。

「ああ、お前が一号で、菊ちゃんが二号だ。父さんが呼んだら、返事をするんだよ——そら、やるぜ」

娘達は嬉しそうに顔を見合せた。

「一号」

「ハイ」と妹の方が敏捷すばしこく答えた。

「菊ちゃんが一号じゃ無いよ。房ちゃんが一号だよ」と姉は妹をつかまえて言った。

大騒ぎに成った。二人の娘は部屋中躍おどつて歩いた。

「へえ、繁ちゃんも種痘ほうそうがつけましたに、見て下さい」

と在から奉公に来ていた下女も、そこへ末の子供を抱いて来て見せた。厚着をさせてある頃で、お繁は未だ匍はいもしなかったが、チヨチチヨチ位は出来た。漸く首のすわりもシツカリして来た。家の内での愛嬌あいぎようもの者に成っている。



「よし。よし。さあもう、それでいいから、皆な行ってお休み」  
 こう三吉が言ったので、お房もお菊も母の方へ行つた。お雪は一人ずつ寝巻に着更えさせた。下女は人形でも抱くようにして、  
 柔軟やわらかなお繁の頬へ自分の紅い頬を押宛てていた。

やがて三人の子供は枕を並べて眠つた。

「一号、二号、三号……」

この自分から言出した串じょうだん談には、三吉は笑えなく成つた。

彼の母は、死んだものまで入れると八人も子供を産んでいる。お雪の方にはまた兄妹が十人あつた。名倉の姉は今五人子持で、※の姉は六人子持だ。何方どちらを向いても子供沢山な系統から来ている

……

あくるひ  
翌日、

三吉は学校の方へ形式ばかりの辞表を出した。そろそろ彼の家では引越の仕度に取り掛った。よく郊外の噂が出た。雨でも降れば壁が乾くまいとか、天氣に成れば何程工事が進んだらうとか、毎日言い合った。夫婦の心の内には、新規に家の形が出来て、それが日に日に住まわれるように成って行く気がした。

夫婦は引越の仕度にいそがしかった。お雪は自分が何を着て、子供には何を着せて行こう、といろいろに気を揉んだ。

「房ちゃん、いらつしやい。着物おべべを着てみましょう——温順おとなしくしないと、東京へ連れて行きませんかよ」

こう娘を呼んで言つて、ヨソイキの着物を取出して見た。それは袖口を括くくつて、お房の好きなリボンで結んである。お菊の方には、黄八丈の着物を着せて行くことにした。

「菊ちゃんの色が白いから、何を着ても似合う」

と皆なが言合つた。日頃親しくして、「叔父さん」とか「叔母さん」とか互に言合つた近所の人達は、かわるがわる訪ねて来た。「いよいよ御別れでござすかナア」と学校の小使も入口の庭の処へ来て言つた。

「何物なんにも君には置いて行くようなものが無いが、その鍬くわを進あげようと思つて、とつといた」と三吉は自分が使用つかつた鍬の置いてある方を指して見せた。

「どうも済みやせん……へえ、それじゃ御貰い申して参りやすかなア。鍬なんつものは、これで孫子の代までも有りやすよ」

小使は百姓らしい大きな手を揉んで、やがて庭の隅すみに立掛けてある鍬を提さげて出て行つた。

出発の日は、朝早く暖い雨が通過くわぎた。長い間溶けずにいた雪の圧力と、垂下つららつた氷柱の目方とで、ところどころ壊こわれかかった北側の草屋根の軒からは、隣家となりの方から壁伝いに匍はつて来る煙が泄もれた。丁度、庭も花の真盛りであつた。

隣家のおばさんは炊たきたて立の飯に香の物を添えて裏口から運んで来てくれた。三吉夫婦は、子供等と一緒に汚よごれた畳の上に坐つて、この長く住慣れた家で朝飯を済ました。そのうちに日あが映あつて来

た。お房やお菊は近所の娘達に連れられて、先まず停車場を指して出掛けた。

みちぶしん  
道普請

の為に高く土を盛上げた停車場前には、日頃懇意にした多勢の町の人達だの、学校の同僚だの、生徒だのが集つて、名な残ごりを惜んだ。そこまで夫婦を追つて来て、餞せんべつ別のしるしと言つて、物をくれる菓子屋、豆腐屋のかみさんなども有つた。三吉の同僚に、親にしても好いような年配の理学士が有つたが、この人は花の束を持って来て、夫婦の乗つた汽車の窓へ差入れた。その日は牧野も洋服姿でやって来て、それとなく見送つていた。

「困る。困る」

とお菊は泣出しそうに成つた。この兎は始めて汽車に乗つたの

で、急にそこいらの物が動き出した時は、周章あわてて父親へしがみ着いた。

ウネウネと続いた草屋根、土壁、柿こずえの梢、石垣の多い桑畑などは次第に汽車の窓から消えた……

汽車が上州の平野へ下りた頃、三吉は窓から首を出して、もう一度山の方を見ようとした。浅間の煙は雲に隠れてよく見えなかった。

乗換えてから、客が多かった。三吉は立っていないければ成らない位で、子持がそこへ坐つて了えば、子供の方は一人しか腰掛ける場処も無かった。お房とお菊とは、かわりばんこに腰掛けた。お繁はまた母に抱かれたまま泣出して、乳を宛行あてがわれても、揺ゆすら

れても、泣止まなかつた。お雪は持もて余あました。仕方なしにお繁を  
負おぶつて、窓の側で起たつたり坐まつたりした。

午後ごごの四時頃よじごころに、親子五人は新宿の停車場へ着いた。例の仕事  
が出来上るまでは、質素にして暮さなければ成らないといふので、  
下女も連れなかつた。お房やお菊は元気で、親達に連れられて始  
めての道を歩いたが、お繁の方は酷ひどく旅しよに萎しおれた様子で、母の背  
中に頭を持たせ掛けたまま、氣拔きひのしたような眼付まなづをしていた。  
時々お雪は立止たつて、めずらしそうに其処そこ是処ここの光景さまを眺めなが  
ら、

「繁ちゃん、御覽」

と背中に居る子供に言つて聞かせた。お繁は何を見ようともし

なかつた。

郊外は開け始める頃であつた。三吉が妻子を連れて移ろうとする家の板<sup>いた</sup>葺<sup>ふ</sup>き<sup>き</sup>屋根は新緑の間に光つて見えて来た。



# 青空文庫情報

底本：「家（上）」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年5月10日発行

1968（昭和43）年6月30日17刷改版

1998（平成10）年9月5日51刷

※底本は、35ページ9行目で鳳凰の「凰」の「白」を「百」と作っています。作字上の誤りと判断し、「凰」をあてました。

入力：(株)モモ

校正：藤田禎宏

2000年12月2日公開

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 家 (上)

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 島崎藤村

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>